

女の言いたい放題誌

わいふ NO.235.



特集 我が家を手に入れるまで
特別寄稿 テレビ出演でんまつ記
マイシヨノマイフロンティア
私の転職ストーリー



善積京子●編

¥2200

非婚を生きたい

婚外子の差別を問う

自らの意志で、非婚を積極的に選んだ人たちの悩みと闘いを紹介し、その生き方の前に立ちはだかる現代の戸籍制度を告発し、多様な生き方を保障する社会をめざす。

星野澄子●著

¥1500

夫婦別姓時代

氏名とわたしの自然な関係

女はなぜ「姓」を奪われるのか！ 夫婦がそれぞれ別々の姓を名乗ることの意味を、個の尊重と男女平等の視点から考え、新しい結婚像を追求した意欲作！

鎌田とし子・佐々木明子●著

¥2500

老後生活の共同を考える

老後にも現役時代の年収や持家の有無などの影響で階層格差があることを明確にし、老後生活の多様化と老人の孤立化問題を、具体的ケースで把握して、血縁にこだわらない全く新しい生活スタイルを模索する。

青木書店

東京都新宿区早稲田鶴巻町538
TEL: 03-3202-3999 [価格税別]

農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1
☎03(3585)1141 各社・店に
●内容見本呈

ワクワク心おどるあそびの大惑星に、ついに軟着陸！ 従来の教育的あそびの
コペルニクスの大転換ワープ！ 大好評の あそびの宇宙 に続き、大惑星登場！

かこさとしの あそびの大惑星

全10巻

幼児～小学校低学年向
A 日判上製・各48ページ

●全10巻箱入セット定価13,000円

●楽しい全10巻 各巻構成

- ①たいこんふえびのあそび
(遊びの音楽合奏隊)
- ②のんきないたずらっこのあそび
(遊びの寝転げんき屋)
- ③しろいももたまごやきのあそび
(遊びの食品料理店)
- ④いちめけたにいたけたのあそび
(遊びの手帳旅行団)
- ⑤こびととおとぎのくにのあそび
(遊びの高観かんらん車)
- ⑥どじょうこふなっこのあそび
(遊びの水中実験船)
- ⑦ももくりチョコレートのあそび
(遊びのお菓子大列車)
- ⑧あんだだれさどこさのあそび
(遊びの歌劇舞踏会)
- ⑨そらったわになったのあそび
(遊びの冒険司令官)
- ⑩びつくりしゃつくりのあそび
(遊びの謎々美術館)

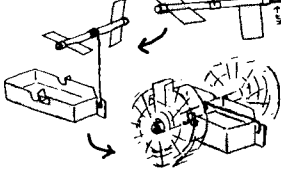
★あそびシリーズ
第2弾！

全10巻
完結！

あそびが
ひろがる！

楽しさ

いっぱい！

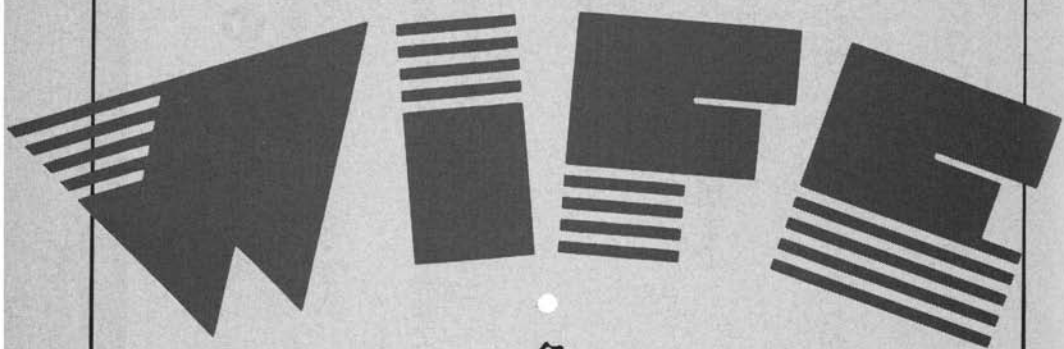


かこさとしのあそびの大惑星 ●全10巻
かこ先生があつめた日本と世界の子どもたちの遊び約500種ノ
クイズ・なぞなぞ・切り絵・集団遊び・言葉・工作など満載！各巻1000円
●内容見本呈

和風ケーキ＆クッキー
イラスト読本
●動物もヒトも食べること自然をつくる
黒田弘行著 ●動物もヒトも食べること自然をつくる
物ではないヒトの特殊性を、食の歴史を通して描ききる *1500円
●好評！イラスト読本からたの歴史 黒田弘行著 *1500円

食の歴史





あなたのフリースペースです。

4 私のことと場②

東京都練馬区・小江鐘子
写真・佐々木恵子 文・本人

●特集 我が家を手に入れるまで

10 子供のために建てた家
立山みゆき

16 地下の権利は？

前田道子

19 立ち退きから転居まで

三井早穂子

25 めでたさも中の下なりおらがん家^ち

匿名

31 マンション選びは運と縁

匿名

35 エッセイスト・クラブ

塚本真理・富永柳枝
高松恭子・広瀬サカエ

44 ズバリ一言

宮本節子・高木妙子・岩田佳子
上谷亜育・矢張優子・米山眞梨子

55 父

匿名・豊城智子

61 サーフレシーブ

西塔美恵子・荻野菜穂子・米山眞梨子
板山美枝子・匿名・匿名

65 総合学級 青木利子

73 平成おしたまごーん^の 西田淑子

74

マイ・ジヨブ
マイ・プロフェッション

永作あや子・小林智枝

80

テレビ出演てんまつ記
遠藤肖奈

85

フリースペース

匿名・重住麻悠・家守恭子・楠原晶子
佐藤玲子・餅原ひろ子・小松智子
高島直子・萬匠範子・中松ミナ子

99

読んでみました

佐藤乃麻・勝浦恵美子・和田好子

102

④(四)回(子)育(て)会(議)
子供の自由をどう認めるか明田珠美子・浅田節子・春日井芙美子
南千歌子・山下富代・山本真理

112

ブック情報

114

情報コーナー・サークルだより

116

コミック・痛快ノ一般人⑧ 栗田笑

連載⑥

120

私の愛する外国人 笠原珠子

125

わいふ文章講座(8) 副編集長・和田好子

連載小説②

130

契約結婚 山影冬彦

137

わいわいがやがや

権瓶敦子・山田永子・佐賀成子
神山寿子・加納礼子・井上治子

次号投稿募集 141 投稿規定 142 編集だより 144

ご投稿のさいのご注意 27 バックナンバー 34
各地で文章講座を 91 自費出版は「わいふ」へどうぞ 111
情報コーナーもつとご利用を 115 お友達に「わいふ」を 129
氏名住所を秘密にしたい方・仕事をしたい方へ 141

私のしごと場

2

リカ美容室

小江鐘子

(45歳) 東京都練馬区



十七年間数多くのお客様と知り合い、私が成長する上でそれは大切な栄養源となった。十九歳で母を亡くした私にとって、七十代の方は母のようであり、五十代、六十代の方は優しい姉たちで、四十代は同世代の友達。二十代、三十代のOLや若奥様には及ばずながら相談相手になってさしあげる。

美容室を開店したのは昭和五十年一月だったから、もう十七年目になる。そのとき、長女は二歳、次女は六カ月だった。当時を振り返ってみると無理な条件の中で夢我夢中で通り過ぎてきたように思う。二十八歳の私が、住み込みの従業員を含めて、五人分の食事の世話をし、家事、仕事に追われて部屋の隅々まで掃除をしたことなどなかった。そして娘二人を連れて公園に出掛けても、飽きるまで遊ばせることができなかった。いつも時間がないから早く！と、娘の手を引いてせかせるように帰宅した。



いつも後回しになる娘のパーマ
今日やっと



娘たちには悪いと思いつつ私は人生の大半を美容という職業生活に「ついやすこと」となった。でも心の中には暖かいものが確実に残っている。



秋津療育園へ毎月ボランティアに
障害のある人たちが待ちこがれて
迎えてくれる





娘たちは明るいのが取り柄
姉は19歳 妹17歳です

何でもいえる親友たち
私を支えるすてきな仲間



週に一回ストレス解消に
カラオケで
好きな「百万本のバラ」を
歌ってます

東山書房

〒104 東京都中央区新川2-2-1 708
 〒615 京都市右京区山ノ内大町5-3
 ☎03(3553)8358
 ☎075(841)9278

ひがしやま



河野美代子著

ベテラン婦人科医が、他人には相談しづらい「体や性」の悩みに誠実に答えます。ティーンはもちろん、父母、教師にも好評。性器・月経・避妊・人工中絶・一重ふたの手術(毛染)・他・四六判 1冊(1300円税別)

ティーンズボディQ&A

体の悩みにお答えします

●照エイボン受賞ノ
 女性教育賞

渥美雅子著

子どもは告発する

●雅子の事件簿から

いじめ、体罰、家庭内暴力、リンチ、殺人、生命と宗教、女教師駆け落ち、チビッコ芸人、丸刈り訴訟、自殺……



●弁護士としてかわった数々の事件から浮きあがる真実は？
 2男の母としての子を想う熱い視線が、学校、管理社会を告発する。――
 *四六判/1冊(1650円税別)



“人間と性”を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality

[ヒューマン・セクシュアリティ]

●編集長 ●村瀬幸浩●

●企画編集 ●“人間と性”教育研究協議会
 ●季刊/Ｂ5判・128頁●定価1400円(税込)

7号<新刊>《緊急特集》新教科書がもたらすもの
 ―学校・家庭の性教育の新段階―

[座談会]性教育の新たな展開を目指すとき
 山本直英+谷森正之+富沢寿美子+大戸ヨシ子+入江彰信(ベテラン教師が語る)

[授業実践]《月経》沖本温子 《構想・射撃》城 英介
 《生命の誕生》岡田法子・鈴木貞女

[論文]新指導要領と性教育・家庭でできる性教育

●ルボ 小学校の性の授業の実態

●教科書の問題点をさぐる 母親、父親は語る―子育てと性(座談会)・親へのアドバイス 他掲載

★連載③ 金城清子(法女性学)・澤厚子(宗教学)・和秀雄(書長類研究者) 奥田健夫(作家)

★海外レポート ストックホルム・サンフランシスコ/サンパウロ/フィリピン

6号 シルバーエイジの豊かな性と生

5号 ビル解禁を控え、いま避妊を問い直す

4号 エイズの現在と近未来

3号 障害者の性にとって「障害」とはなにか

●直送定期購読者受付中●郵便・京都4-1067番
 1年 5,600円 2年 11,200円(送料・税込みです)

〒203 東京留米市中央町五〇一八
 電話 〇四二四(七四)九二二五

母と子社

子どもの本っておもしろい

「母と子」'92年2月臨時増刊 A5版144ページ 定価1030円(税込)

●ひとくちに子どもの本といっても、本好きになっても、ほんのほんにこだわるなら、子どもの本の選び方・子ども本の十二か月Q&A・今、気になること・ポルノ雑誌と性教育(山本直英)・学校図書館に専任の司書(岩間克子)・エッセイ(古田足日/後藤竜二/宮川ひろ/小西正保/竹内オサム/佐藤通雅/村瀬学/いわむらかずお)・用語解説・参考文献・専門店・関連団体

母と子

4月号 発売中
 (税込み350円)
 年間家庭直送予約
 (4200円・干共)

今月の学級が誕生する日

●見えてきた息子の学級 柳沢由美子
 ●私の学級づくり泣き笑い 小暮康夫
 ●安堵感と共感を育む教室 岩辺泰史
 ●入学式の日の学級びらき 足田哲也
 ●私の学級づくり作戦 尾木直樹
 ●電車の中で液晶テレビ 鈴木みどり
 ●別姓結婚 子どもはどうする 榊原富士子
 ●学校五日制の動向 山本由美
 ●女の節句・男の節句 星野安三郎
 ●ウルトラマンごっこ 有吉有巳子
 ●過保護は子どもを戸惑わせる 戸田唯巳
 さくらの花の咲くころは 大町 正

●
特集

我が家を手に入れるまで



立山みゆき
前田道子
三井早穂子
匿名名



子供のために 建てた家

兵庫県明石市
立山みゆき

「いじめ」を逃れて

夫の実家でお産をして間もなく、二
誕生前の次男が小児マヒに感染し、左
足の自由を失いました。年末には私た
ちが住んでいる関西に帰り、阪大病院
で受診しましたが「重症、即日入院」
と診断されて、そのまま入院しました。
この時四歳の長男は、田舎に住む姑が
預かってくれました。

一年後「これ以上治療を続けても、
治る見込みがない」と言われて退院し
ました。早速田舎の姑に今までご苦労
をおかけした礼を述べるとともに長男
を引き取りたいと申し出ましたが、孫
かわいさから姑は言を左右にして、返
してはもらえませんでした。ようやく
のことに我が家に長男を引き取った時
は、小学校の五年生になっていました。
山陰と関西では、言葉や生活習慣が
随分と違います。また田舎者が転校後
間もなく、クラスで上位の成績をしめ
たことに対する反感もあったのでしょ
う。何やかやが重なって長男は、クラ

スのボスからいじめられるようになり
ました。

毎日生傷の絶え間がなく、「今日一
日無事であってくれますように」と毎
朝祈る気持ちで学校に送り出していま
した。しかし、いじめはエスカレート
する一方で、ついには登校を渋るよう
になりました。私も再々担任の教師に
実情を訴えましたが、言を左右にして
らちがあきません。長男をいじめより
救う道は卑怯なようだが、ここから逃
げ出すより外に道はないと思いました。

当時は今のように文化住宅や、マン
ションはそうありません。自分で家を
建てるより外に、引越すことはでき
ません。姑の許しをもらい主人に同意
してもらって、土地探しを始めました。
第一の条件は、中学校、高校の近く
であるということでした。足の不自由
な次男が、二、三年先には中学校に進
学するのを考慮してのことです。第二
の条件は、地価が安いということでした。
安サラーマン世帯である我が家で、
三人の子のこれからの学資を考え

ると、どんなに不便でもよいから安く上げたいと、そればかり考えていました。

当時公務員だった夫は「公務員が家など建てたとあつては、汚職官吏と間違えられかねない」と言つてノータッチ。私が一人で駆けずり回りました。毎朝夫や子供を送り出すと同時に家を出て、子供が帰宅する夕方まで、一日中土地を探して歩き回っていました。

当時住んでいたH市をまず探しましたが、地価の安い所は学校が遠いし、通学の便の良い所は地価が高くて手が出ません。第一、高校の数が多くて、どこの高校を目標にして探したらよいのか見当もつきません。

思案の末に、以前住んだことのあるA市を探することにしました。A市だったら高校は二校しかありませんし、その二校がお互いに近い距離の所に建っています。どこの高校に進学するのだろうか、という心配もしなくて済むそうです。そのうえに中学校も、高校の近くに建っています。ここだったら次

男の足でも、通学するのに心配はいらないと思ひました。

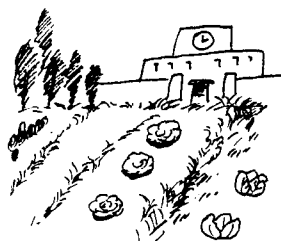
詳しい情報を知りたいと、駅の近くの不動産屋に飛び込みました。ところが学校の周辺は農地なので、宅地に變更しなければ家は建てられず、第一農地を三十坪とか五十坪などと切り売りしてくれる農家はないだろう、ということでした。

仕方がないのであちこちの不動産屋を回つては、なるべく学校に近い距離に建っている売り家や、土地を探しました。しかし坂道の中腹だったり、学校から遠かったり、次男の足を思うと買う踏ん切りがつきかねていました。

（土地を手に入れる）

その日も出掛けて行った不動産屋で「売り家がある」と教えてもらっていました。そこへ入って来たおじさんが、道案内を買って出てくれました。この人はKさんと言う農家の人ですが、百姓仕事が好きで、畑仕事は弟夫婦に任せて、自分は不動産屋に出入りして、

土地売買の情報提供などして、飲み代を稼いでいるということでした。



自転車を押して行くKさんと目的地に行く道々、足の不自由な次男やいじめにあっている長男のために、転居したいと思つている。次男の通学の便を思えば少しでも中学校や、高校に近いところに家が欲しいが、なかなか思うようにいかないところばしました。

聞いていたKさんは「ちょうど中学校の近くに、わしの畑が一反歩あるから、五十坪ぐらいだったら売ってもよい」と言い出しました。不動産屋に紹介してもらった売り家より、ずっと学校の近くです。帰宅すると夫に相談して、その畑の一角を分けてもらうこと

にしました。

西側は県道に面して、南側は一メートル幅位の私道に面している一角を求めることにしました。角地なので、外の場所より割高でした。そのころはその辺りの畑は坪一万円ぐらいでしたのに、角地だからと坪一万五千円でした。しかし学校に近いのが何よりの魅力で、求めることにしました。

南側を奥の方に通じる私道は、奥の方に広がる畑の持ち主である三軒の農家が出し合って造ったものでした。この道を行き来するのは、畑仕事に行く農家の人ぐらいなものでした。

不動産屋で知り合った縁で買う土地なので、私たちは不動産屋に手数料を払い、契約を結びました。

ところがKさんは、「わしの畑をわしが売るのでから、わしに直接手数料をよこせ」と言います。ようやく手に入れた土地をご破算にしたくないので、Kさんにも手数料を払いました。そのことを知った不動産屋のおじさんは「手数料を二重に払ったと知れたら、

ご主人にしかられるだろうから、わしらは返すことにしよう」と支払っていた手数料を返金してくれました。ようやく土地が手に入ったのですから、次は家の建築に掛からねばなりません。

（金 策 の 苦 労）

夫は三人の子の学資に、これから先どれだけ金が必要か分からないから、家を建てる金は出せない。金融公庫で資金を借りろ、と言います。折よく融資の受付をしていたので、早速申し込みましたが落選でした。終戦後十年あまりたっていましたので、我が家を建てようという人も増え、競争率は高くても何度も申し込まないと当選しない、ということでした。気を取り直して次の時にまた申し込み、やっと当選しました。

夫は家の建築資金と土地の購入資金と、両方の融資を受けようと言います。係の人に問い合わせると、建築の方の設計審査申請書等と一緒に、土地の登

記書類を提出するようにとのことでした。

土地を購入する時にKさんは、嫁入り前の娘がいるので、土地を売って嫁入り仕度を調えたなどと言われては娘の肩身が狭いだろう。契約書は渡すし土地代は分割でよいから、土地の登記は家を建てる時点にしてほしい、と言っていました。土地代を分割にしてもらえるのならこちらも助かる、と夫も同意していたので、登記はまだできていませんでした。

早速A市に出掛けて行き、Kさんに残金は一括して払うから、登記を急いでくれるように申し入れしました。家を建てる時点で登記をするという約束で購入したので、即刻登記できるものと思っていました。

ところがKさんは、あの土地の南側の畑を購入した不動産屋と組んで、一メートル幅の私道を四メートル幅に広げるように、奥の方の畑の持ち主である農家の人たちと話し合いをしているところで、今私道のそばに家を建てられては、折角の話がおじちゃんになる。

私道の件が片付くまで、もう二、三年待ってくれとの返事でした。

何で私道を広げる話に我が家が建っているのは邪魔なのか、不思議に思ってた。自分や不動産屋が買った畑は、奥の方の畑に通じる私道の入口にあるから、宅地として今処分してしまったら、奥の方の畑に通じる私道がなくなる。私道がないでは奥の方の畑を持っている農家が、宅地として処分しようと思っても、高くは売れないだろう。今のうちに私道を四メートル幅に広げてはどうだろう。ついでに是一对三の比率で土地の交換をしよう



ではないか。自分たちが道として一坪出せば三坪、二坪出せば六坪の割合で畑をよこせ、と交渉していると言う。これでは早急にらちはあかないだろうと、がっかりしました。

金融公庫の係の人は、期限内に土地の権利書を提出しないと、当選は無効になる。当選したのに辞退したとなれば、当分の間当選は望めないだろう、と言います。そんなことになれば、子供たちのために転居してやりたいという願いは、吹き飛んでしまいます。

何度かKさんと交渉をして、ようやく畑の北東の一角を登記してもらうこ

とにしました。最初求めていた場所は、県道沿いの角地でしたのに、今度の所は畑の奥の方に位置するので、何かと不便で不利になります。ただ四メートル幅の私道は、Kさんの責任でつける。我が家が出す二メートル分はKさんが持ち、南隣の人に二メートル幅出してもらって、四メートル幅の私道をつける、という約束だったのが、幾分の救いでした。

（トラブルつづき）

ようやく土地の登記が済むと、次は一級建築士に設計審査見積書を作成してもらって提出するように、と言われました。ようやく見つけた設計事務所で、親子五人が住める最小限の家をと言って、書類一式作成してもらいました。建築費は百十万円でした。一目見るなり夫は「建築費として出せるのは、百万円までだ。それでできなければ、家なんか建てることはいらん。明日にでも行って断わって来い」

気難しいワンマン亭主なので、どう

にもなりません。翌日設計事務所に、断わりとおわびに行きました。よほど私のしょんぼりした姿が気になったのでしょう。色々話を聞いてくださいました。

そのうちに設計士と夫と、同県人だと分かりました。「同県人が困っているのを、見捨てずの訳にはいかん。うちの事務所に出入りしている工務店に、わしから頼んでみよう」

親切な設計士のお陰で、何とか百万円で建築してもらえることになり、安心して金融公庫に申し込むことができました。申し込み期限の前日のことでした。

ようやく家が建つことになり、ほっとしていた時、次男のやんちゃが過ぎて良い方の足の骨を折り、一カ月間入院しました。その間ずっと病院で付き添っていましたので、気にはなっても建築の段取りはできかねていました。

退院したのを待ち兼ねたように、北隣の畑の持ち主Yさんから、話があるから来てほしい、と期日を指定したハ

ガキが送られてきました。何事かといぶかしみながら、指定の日に出かけて行きました。指定されたO町の公民館に行くと、O町のお百姓さんが何十人も、顔をそろえていました。

何が何だか分からないままに座ると、



おっかない顔つきのお百姓さんたちに、周りを取り囲まれました。

農地を宅地に地目の変更するには、隣接する農地の持ち主に、承認の印鑑をもらうことになっているそうです。

「隣の畑のYさんの認め印ももらわ

んと、勝手に宅地へ変更の申請をしたのは、どういうつもりだ」

皆から詰め寄られました。土地のこととにずぶの素人の私は、Kさんが万事ぬかりなく手続きをしてくれている、とばかり思っていました。話の様子ではどうやらKさんが、日ごろ不仲のYさんに頭を下げるのが嫌で、Yさんの認め印をもらわず、勝手に書類を農地委員会に提出したらしい様子でした。

ひとしきり口々に「やり方が汚い」だの「礼儀知らず」だのと言われました。しかし何を言ってもさっぱり話が通じないので、今度のことにはKさんが勝手にしたこと、私は何も知らぬということが分かったようです。「Kのおやじ、姿をくらまして顔を出しやがらんと」口々にKさんのことを、悪口雑言していました。

「今度のこととは不動産の知識がないために起こった騒ぎで、奥さんに悪意がないことはよく分かった。何もお宅を責めようとは思わんけどな、家を建てるんやったら、不動産関係の勉強を

してから取りかからなあかんわな」
今日集まった人たちの中で、リーダー格らしいおじさんが、重々しく私に言いました。

横車を押すことの多い、Kのおっさんをやっつけるよいチャンスと、意気込んで集まった人たちは、肝心のKさんは姿を見せないわ、何も分からぬ私相手ではさっぱりちがあかないわで、拍子抜けしようです。

「Kのおやじを懲らしめたいと思うてしたことやさかい、気を悪うせんといてな」

「何も奥さんに、どうこうはおまへん、今日はすみまへんでしたな」

ねぎらいの言葉を背中に聞きながら、公民館を後にしました。

（そしてくい打ち）

いろんなことがありましたが、ようやく家を建築するために、登記もすみ自分の物になった土地に、くい打ちをすることになりました。現地に行くと、沢山のお百姓さんが集まっていました。

Kさんがインチキをせぬように、皆で立ち会うのだと言うことでした。見渡す限りの野菜畑で、どこからどこまでがKさんの畑か分かりません。我が家を買った所だけは、あらましの見当で大根や白菜が抜いてありました。

測量士も来ましたが、肝心のKさんの姿がありません。

「おっさんを、早う呼んで来いや」
「また、雲がくれか」

皆で口々に言っているところへ、Kさんの弟がやって来ました。

「兄貴は急用ができて来れんさかい、代わりにわしが来てんけど」

来たのはよいけれど、間口が何メートルなのか、奥行きが何メートルなのか、何も聞いてないと言います。誠意のかけらも見えぬKさんに、集まった人たちは怒っています。

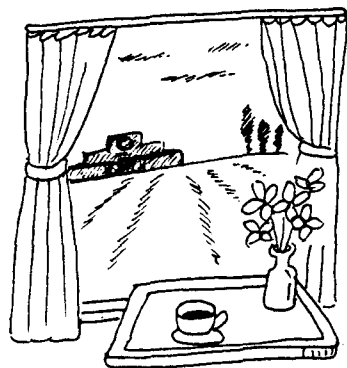
「私が覚えていきますから、言う通りに境石を入れてもらえますか」

たまりかねて、私が申し出ました。ようやく境界線も決まりました。長い道程でしたが、やっと一歩前に踏み

出すことができました。ほっとしてふり仰ぐと、O中学校にA高校の校舎が、冬空にそびえていました。

あれから三十年あまり。三人の子供たちも巣立って行き、夫と二人暮らしになりました。あの時、子供たちのことで必要に迫られて、がむしゃらになっただけからこそ、家は建てられたのだと思っております。さし迫って必要でなかったら、いまだに貸マンションぐらいのところに住んでいたのではないかと、思っております。

（当時お世話になった方々に感謝しながら）





地下の権利は？

神奈川県厚木市

前田 道子 (59歳)

（新居の購入）

昭和五十二年六月のある朝、

建売住宅 格安 六百八十万から

頭金なしでも可

このちらしが目に入るや私はすぐ行動をおこしました。当時九州から当地にまいり、夫は転職し私も働き再出発したのでした。借家に住み三年目、契約期限が目前にせまり、更に無理にお願いした飼いが子供を生み、手放しがたく緊急を要している時でした。第一にあの広告の頭金なしでもが最高の魅力でした。そして自家ならば犬が飼えるしと早速不動産屋に行きました。土地約百平方メートル、二階建て木造、3LDK。山を開墾した土地で目の前には相模野が見渡され、あなたに相模川、山裾には国道が通り、故郷と同じような風景にふっと深呼吸してしまいました。

五軒建築中でしたが、一番東端の家に決めました。東側は相模野を見おろし隣は桑畑であり、南側も西端寄りに

隣家あるのみで日当たりよく、北側はがけになっています。しかし、しつかり土どめしてあり、がけまでにはかなりの斜面の土地があり、犬小屋を作るのに最高の環境。そのうえ息子の学校の校舎が望めるほど近い。ただ、バス停には七、八分かかりますが一時間に四本位あり、通勤には自動車にて十五分位と好条件がそろい申し分ない。第一の資金ですが、これも不動産屋さんが皆手配してくれました。

夫婦共有ということで二人で借り入れようとしたが、夫が健康診断にて高血圧とのことで不可となり、結局私名義となりました。始めのうちは夫が大変不安がり「こんな大金借りて返済できるか、自分は責任とれないぞ」と健診結果の後まったく自信を失っていました。私はこの機会をはずしたらと強引に押し切り数百万を二十年間ローンで成立しました。

さて入居となるのですが、この夏は非常に雨が多く、予定通りに完成せず、ようやく八月二十八日に入りました。

その時点ではまだ電柱が雨続きで建てられなく、入居二週間は工事に使用した電線を引き込んでもらいました。夕刻の食事時など五軒で時差で炊飯器など使用するよう話し合ったり、電話も一週間はどなく、時代錯誤がおきそうな生活でした。しかし、その半面この浮世離れた一ときを結構面白がっていたものでした。

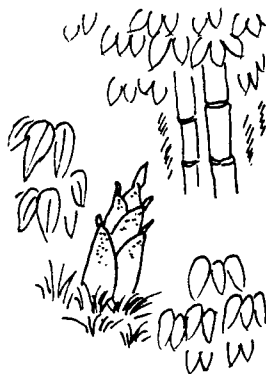
竹やぶの跡とかであちこちにニョキニョキと竹の子が出て来たり、くま笹が生い茂り、周辺に空地があったりして、全く田舎に帰ったようなのびやかな気持ちになりました。

犬小屋を建てたりして庭は非常に狭くなりましたが、窓を開ければ広い自然の眺め、朝はお日様が昇るのがみられ、冬でも二階は温室のように日が入り暖かく、夏は階下が南北に風が通り涼しく、家は小さいがまずは満足しておりました。

夫も「ここはお前の家だから」とちよっぴり皮肉。「もしオレが死んだら女では」と言いつつ隣家との境に垣

根を作ったり、友人に頼んで裏の斜面の土どめの補強をし、その上にしっかりとしたブロック塀を作らせたりしてくれましたが、本当に転居して一年目に脳出血にて急逝してしまいました。とうとう名実ともにローンの支払い私の肩にかかって来ました。

年々周辺に建売住宅が増築され、しかも広く立派になっていき、五、六年目には十数軒。それとともに下水道も完備されましたが、私共先駆者の家はいまだにくみ取り式トイレ。新築された家は水洗となり、太い土管を埋められたので、私共も一緒に引き込んでいただけなものか問い合わせましたが拒否されてしまいました。その後署名



申請していますがなかなか許可されません。

道路の舗装もすぐ横の新しく建築された家の道幅は、始めから四メートル以上あるためにただちに施工されましたが私共の家の前はわずかに狭く、結局道路路端の土地（私有地）をけずって四メートル幅としてようやく舗装されるといった具合。色々規制も変わるもので致し方ないと思っていましたが、やがて予想だにしないことが起こりました。

（どうしてが私の土地？）

「ゴウーゴウー ドッドッ ガリガリ」すごい騒音とともに地響きがして、小さい我が家が身振いするようなことが入居して七年目のある日、何の前ぶれもなく行なわれました。どうしたことかと斜面をのぞきこむと、山すその方を削っているのです。始めのうちは道路を広げるのかと思っていましたが、日々に中腹までそして一、二カ月後にはとうとう我が家の土どめの箇所から三メートル位のところまで垂直に削り

とられ、だんがい絶壁となったので
す。

その後もどんどん整地が続き、とう
とう広範囲の平地ができ、「工業用地」
という看板が立てられました。私共の
家側のだんがいは山肌をさらけだした
まま。整地した下方道路までの斜面は
しっかりと石垣を積み上げ補強され
たのです。

その後、軽微の地震でも家のあちこ
ちがひずみ、すでに工事中にドアの締
まりが悪くなったたりして大変影響受
けていたのですが、更に大雨になれば土
砂が流れました。我が家の土どめから
三メートル位は斜面がみえていたもの
が、どんどん土砂がくずれ、とうとう
一メートル先はだんがいとなってしまっ
たのです。おそらく樹木を伐採したの
が原因だと思っています。もちろん、下
の整地したところにも土砂が流れこんで、
始めの一、二年は幾度か整地し地なら
しを行っていました。一昨年その土地
の不動産屋さんから「がけに面した家
三軒とで共同で土どめをしないか」と

言われた時には驚いてしまいました。

そもそも地山で特にこの山は地層が
しっかり固く、今までの天災でもまっ
たく変化なかったとされ、市の公報に
も安全地帯と記されていました。その
原因はあくまで、山の中腹までも削り
取る施工者側にあるのは明白であるに
もかわらず、何ということか。

そしてとうとう昨年末の大雨の折、
私の家より一軒おいた家の側面から地
すべりが始まり、十メートル幅位土ど
めぎりぎりまで土砂くずれしてしま
いました。救急隊がかけつけたり、自治
会の人たちの努力で、土のうを積み上
げ一応は直りましたが、その箇所はい
まだにシートをたれさげ垂直にだんが
いとなり、やもすればえぐられた感
あり、危険箇所をまざまざみせつけ
ているのに何の処置もとられていま
せん。

地上では、日照権などがよく問題と
され、色々の場所できりあげられて
いるのに、地下のこと、すなわち日照
権より重大な事故につながり、家ど
ころか土地まで奪われかねないこの
事実

どうなっているのでしょうか。

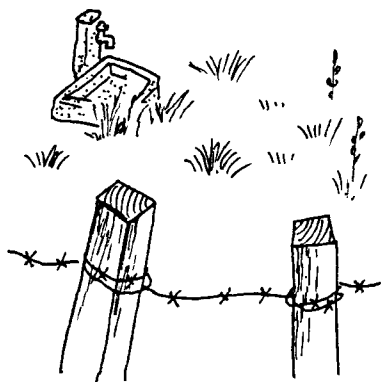
私もしかるべく訴えてみたのですが、
我が家はその地すべり地点より逆方向
に十メートルばかり離れていて、山肌
が歩いて通れる位の斜面があるから、
まあ心配ないでしょうと理解に苦しむ
ような回答がありました。

まだまだローン支払いも数年間ある
のにと不安になる中にも、主人ががっ
ちり土どめの補強をしておいてくれた
お陰と、犬の散歩しつづがけ下から見
上げると、我が家の土台が頑強に見受
けられ、きつと夫がしっかり支えてい
てくれると思うこのごろです。

そんな私に最近よく家の買い替えの
勧誘の人が来て「ここにお住いで地震
の時不安でないですか、いいマンショ
ンがあるのですがね」

「この自然公園の庭は捨てがたいで
すからね」

と答え、もう足元をみないで、一杯の
日光をあびた明るい小さい我が家を、
本当に自分のものにするまで完走しま
す。



立ち退きから 転居まで

東京都中野区

三井早穂子(56歳)

（一方的に立ち退き宣言）

結婚以来、住みなれた我が家に立ち退き問題が起きたのは五年前の暮のことだった。地主であったSさんが亡くなったとき、もしや?という懸念はよぎったのだが、都内に何箇所も所有している人ということで、相続のため手離すとしても、自分たちの所とは限らないと都合よく考えて、不安は向こうへ押しやって過ごしてきたのだった。相続人の代理と称する男が突然訪れて、この土地はすでにM建設に売却したから、近くその建設会社が借地権を買い取りに来る旨、一方的に告げて帰った。

私道の両側に十五軒の世帯が並んでいる。全部立ち退けば、四百坪を越える。新宿通りから少し入った、文化放送の坂下の一画である。都庁の新宿移転が決まる前から、昔なじみの家が、いつの間にか雑草の生い茂る空き地となって目につくようになっていた。

もちろん、どここの家だってそのまま

納得するはずがない。我が家として全面改築をしてまだ十年だから未練がある。翌日、相続人の一人である息子さんの職場に電話をした。

「本来なら借地人に買い取りの意志があるかどうか、先に打診するのが筋じゃないんですか?」

すると、銀行マンの彼はきわめて冷静に言っただけなのである。

「失礼ですが、とても皆さんに買えるような額じゃありませんよ。これは、あなたの方にとっても損な話じゃないと思いますけどね」

見くびられたものである。だが事実でもあったからぐうの音も出ない。

ま、いいか、よそに移れるチャンスだな、と思った。あまりに隣が近くて、プライバシーがなさすぎたもの。花を植えたり、飾ったりする場所もなかったもの。私の夢は郊外へと広がっていた。

ただ、建設会社の買い取り値は、上物(家)には一切関係なく、「当方が欲しいのは借地権だけ」であり、どん

なアバラ家も、建て替えたばかりの家も一律の金額だという。

十五軒は、一斉に法務局へ地代の供託を始めた。その一方で、敷地の狭い人ほど、もっと広い家に移れるチャンスだから、積極的な家探しを始めていた。

ところで、我が家の場合、難題があった。

二十五年も住んでいながら、買い替えの特例という税法が適用されないのだ。借地人の名義が、ここに居住していないしゅうとめであり、二十年前の



契約更新時に名義書き換えを怠っていたからである。

亡くなったSさんとしゅうとめとは古いつき合いで往き来して、言葉のうえだけでバトンタッチされ、更新料も地代も夫あてに領収書もらいながら、かんじんの法的手続きは、贈与税を心配したしゅうとめの、

「わたしが死んでからにしてちょうだい」という思いやりから出た言葉を素直に守ってきたのが裏目に出た訳である。

不動産会社や、銀行の主催する税理士相談に何度も通ったが、これはもうどうしようもないことだと分かった。仮にあわててしゅうとめの住民票を移し、同居を頼んだところで、二年や三年では特例は認められないよう、税法も改正されたばかりだし、おまけに国士法というのもし行されてしまった。

国士法は、知っての通り百平方メートル以上の土地を売買するには、役所の認可する金額を一円たりとも上回ることは許されない。我が家のように、

たったの十九坪になぜ国士法かと思ったら、総面積で底地を買ったから対象になるのだという。

計算によれば、売買価格の二八・一％が国税と地方税に消えていくことが分かった。転居先の物件を買うには、不動産屋に支払う手数料（価格の三％＋消費税）と住居部分にかけられる消費税、不動産取得税、登記料など最低限必要な経費を差し引いた額が、本当に使える金ということになる。

「それだと、七千万がぎりぎり。よほど田舎に引っ込むか、小さな中古しか買えないわ」

だったらいっそのこと、立ち退かずに頑張ろうという案が家族から出始めた。

夫も息子も、新宿や六本木辺りで飲んで車が拾えなくても、歩いて帰れる距離なのだ。絶対立ち退かないという家から、一緒に弁護士を頼もうと誘われ、その態勢に入った。

ここまでで、もう一年が経過していた。

（買い取りを受諾）

春を待っていたように三軒の家が越していった。と同時に建設会社はすぐに解体工事に着手した。

お向いと隣家にシヨベルカーが入った晩のことだった。

当時、私もパート勤めしていた我が家は、昼間は二匹の室内犬だけである。帰宅すると室内のあちこちに吐いた跡があり、二匹のおうとは夜半になっても止まらなかった。隣家の、本がわらが落下した時の音は、少し離れた家でも恐しかったという。

かわいそうなことをしてしまったノ犬にしてみれば、何の事情もわからないままに震動と騒音の中に置かれて、人間以上に過敏な動物だから、恐怖のあまりのおうとなったのだ。

保育園に子供を預けた経験のない私だが、翌日から遠回りして行きつけの動物病院に預けて出社し、帰りには又引き取って帰宅する生活が継続的に繰り返された。

五月末には、引っ越し先の決まらないうちは五軒だけとなってしまった。先に引っ越していった人たちは敷地の持ち分が広かったり、停年後だからゆったり暮らそうと、受け取った金額で余裕を残すようにしていった人たちである。

夫は、通勤に一時間半もかかる所にはもう絶対嫌だの一点張り。今までだって五十ぐらいまでは、房総方面に特急で二時間の通勤をしていた時期もあるのに、六十を目前にしてはもうその気になれないのだろう。

結局、家の分はそっくりローンを借りることにして、M建設の買い取りを受諾した。

国土法の示す金額は、公道から何メートル入っているか、持ち分の坪数等によって、一軒一軒異なっていて、公道に面していた家と、一番奥の家とでは、倍近い開きがあったし、我が家と位置は同じの筋向かいの家は、四十坪を有していたから単価は上なのだった。役所の説明では三十坪から四十坪くらい

が、売買されやすい広さなので、評価が高いのだそうだ。

（土地探しに本腰）

さて、いよいよ土地探しに本腰を入れることになって、土曜日は朝から不動産会社の車で見て回る。平均して一日に三、四箇所である。そしてこれには思ったものだけ、今度は夫と勤め帰りに待ち合わせて最寄りの駅から徒歩で何分かを確かめに行く。チラシには徒歩十三分とあったのに、実際はかなり速歩でも二十分かかった所もある。

中央線沿線、駅から徒歩十五分以内、車の置けるスペースが取れること、しかも夫は新宿からタクシーで二千円前後の距離というぜいたくな条件をゆずらないのだ。

「そんな好条件の土地が、今どき七千万で買えるはずがないじゃないの、あなたはね、自分で不動産屋さんを見て回らないからそんな夢みたいなこと言えるのよ、」

最後はこうしてケンカになり、帰路

の電車は気まずく押し黙ったままとなる。

現在のこの場所に決定するまで、二十件以上、不動産屋は数社、私は回ったことになる。駅から十八分、車は入りにくい狭い道と条件に合わない点はあったけれども、坪数は一応三十坪以上あったし、道幅も近隣がおいおい建て替えば、セットバックして広がるだろうから、と考えることにした。

値段は、その分九十五万円のオーバーであつたが、今考えても、お買い得だつたのではないかと思う。

ところで、支払いの件だが、全額支払わなければ登記移転はできないし、それができなければ建築にも着手できない。ところがお金の方は、住んでいる家を明け渡さないことには、全額支払われないのだ。仕方なく売買成立の日に合わせて銀行のローンを借りることにした。

古家つき土地だから解体はこちらで行わなければならない。売主からかぎを受け取り、中に入つてあせんとした。

三年前、老夫婦があいついで入院し、そのまま空き家になっていたと説明されたけれど、昨日までそこにいたかのように、コタツの上には湯飲みもきゅうすもそのままになっている。脱ぎ散らした衣類、使いかけの調味料。足が不自由だったのか、パイプの手すりがあちこちについているのが古い木造家屋と妙に不釣り合いだ。

私にかぎを手渡した人は、長男夫婦だと言っていたが、現住所は金妻ドラ



マの舞台となった辺りで、私が初めて会った日は、テニスラケットの入ったスポーツバッグを持っていた。

土地の代金は、両親のケアつき老人ホームの費用にあてるとのことだったが、そのスマートな暮らしぶり、目の前のこの無残な現実との落差に私は息をのむばかりだった。

解体屋は、家屋は壊すが荷物を全部運び出さなければ始めないと言う。土地の引き渡し日まで三箇月もあつたのに、何一つ手を触れようとしなかった夫婦とその親たちの関係が忍ばれたが、ともかくこの荷物は何とかさせなきゃいけないのだ。契約、移転登記とそこまで円満に運んできたのに、後から先方の違反があれこれ出て来て争いとなり、ようやく建築に着工できたのは五箇月もたった翌年の一月末のことだった。

（建築の成功と失敗）

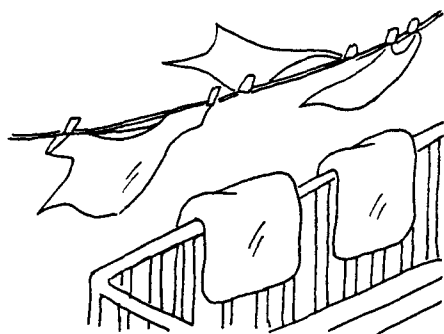
規定枚数もせまって来たので、建築中のことはよくことにして一年八カ

月住んでみての成功と失敗を箇条書きにしてみると、

成功 (一) 対面式キッチンにしたこと。洗物しながら家族とテレビが見られ、来客の応待ができ、流し台の汚れのボロ隠しができる。

(二) 夫のたつての希望で足を充分伸ばして入れる気泡式浴槽にしたこと。休日になると朝から入浴してご機嫌だが、難は水道料金がはね上がった。

(三) 洗面化粧台の水槽は、セーター



やブラウス等の手洗いができるように大きなものにした。

(四) 洗濯機はキッチンのすぐ横に、はめ込み式にして、未使用の時は折りドアで隠してある。

(五) リビングやホールに使った床材(大建工業)が汚れも傷もつきにくく、ふき取ればすぐ落ちるので満足している。

(六) 建築上のことではないが、障子に映る木漏れ日が、心を落ち着かせてくれる。布団を存分に干せるベランダが作れたこと。この二つは以前の住いでは味わえなかったことだ。洗濯物が干してあるのは美観をそこねるという説もあるけど、私は生活感がある家や町並みは好きである。

失敗 (一) キッチンの床材を、私は大建工業のキッチンタフという製品を主張していたのに、夫は内緒でコルクに変更していた。クッション性を考えたと夫は言ったが、汚れがつきやすく、手入れも大変。夫も失敗だと認めている。

(二) 掘ゴタツ。夫の郷愁と、しゅうとめへの親孝行のつもりで取りつけたが広くもない家で私は邪魔物扱いにしている。入って喜んでいるのは夫だけ。まして年老いた人には足腰を弱らせるものではないかと思う。まだ八十二歳のしゅうとめが足腰が非常に弱くなったのは、家族が勤めに出了た後いつも掘ゴタツでテレビを見ていたからでは？とまで思う。

(三) 住宅展示場のモデルハウス(住友林業)で見た和室のエアコンの取り付け方をまねて、床置型のエアコンを連絡子をはめ込んで隠し、その上をちよっとした床の間風にしたので見た目は落ち着きがあってよいのだが、床置型エアコン(ダイキン)はリモコン操作ができず、使用する時はいちいち連絡子を取りはずさなければならぬ。

(四) 和室出窓下に取りつけた地袋、これも意外と使いづらい。床下収納庫、屋根裏収納庫も足腰が弱って来たら開かずの場所になりそう。

(五) サンウエーブですすめられた流

し台のシンク、左側の約半分が奥行きハセンチほど狭くなって、そこにセツトのまな板や洗いおけがすっぽりおさまるようになっていた。まな板はほぼ正方形で広くなった分使いやすさは絶対、と言われてその気になったが、いざ使用してみたら左キキの私には不便このうえない。

（バブルでもうけたのは？）

話が少々元に戻るが、建築をどこに頼むかで、当初夫と意見が分かれていた。私は初めに徹底的に打ち合わせをしたら後はもうまかせきりにしたかったのだ。住友林業と住友不動産ホームから見積りを出してもらった。何しろ年齢が年齢で、銀行ローンの方は生命保険に入れないのだから、建築費は安く抑えたい。二社共に予算内で上がるような設計と見積りを出してくれて、いざ使用部材の見本を見せてもらったら、ドアにしろ、キッチンにしろ、スタンダードで指定されたものは、これ又夫の気に入らない。夫とモデルハウ

スで見たものは、ほとんどがオブションなのである。

結局、十年前に建ててもらった友人に又頼むことになり、骨組みの木材と和室以外のものは、すべて自分で仕入れると言いつ出した。サッシ、タイル、壁クロス、毎晩二人でカタログと首っぴきである。フローリングの床材を大建工業で統一したから、階段も、ホルの床材と統一が取れるように同社の階段セットをと主張したのに、「それくらいは、あいつにまかせなきや悪いんじゃないか」と遠慮してしまった。工事は遅れに遅れて、完成を待たずに引越して来たのだが、玄関を入ると直正面は真直ぐの階段である。

玄関回りは照明も収納も洋風でまとめたのに、和風の赤松の階段がドンと目の前にある。ホールのセピアの色調と何たる不調和！

十年前にも経験したから、どこかでそういうチグハグが出て来るとは思っていたけれど、それが玄関だったから、私のショックは大きい。外にも多々あつ

て、押入れの寸法も私の主張が入れられなかった。従来の押入れは布団を入れる場所以外は、あんな奥行きはいらない。

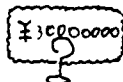
丈夫で長持ちがモットーで、土台と柱だけはしっかりと太いものを使ってくれたから、三十年やそこらはもちそうである。但し、私たちが無事にローンを払いきれるかが問題だ。

ところで、これだけ労力をかけて作った家、安く上がったと思いますか？

総工費二千五百五万円。（空調整備、塀、電話工事含む）坪単価に直すと八十万で足が出た。モデルハウス（これを見て歩いた時が一番楽しかった）だって六十万から八十万と聞いていたのに。もうできるはずもないけれど、夫との家作りなんて、金輪際ご免だ。

余談だが、四谷のあの土地を買ったM建設は、立ち退かない二軒を抱え、地価も下がり、かなりの損害だと聞いている。

バブルで誰が一番もうけたのかって？それは政府でございますよ。



めでたさも中の下 なり おらが^ち家

匿名

（家を買うぞ！）

昨年の春、又々転居の案内を出したとき、折り返しにいただいた電話の多くは「ようやく落ち着くのね。何はともあれ自分の城が持てたんだもの良かったじゃない。張り合いができたでしょう」——というものだった。

張り合いねえと私は独りごちる。

確かにこのご時世、知り人が新居を構えたとなれば、「ホウ、やったわね」と単純に思うだろう。そこまでのどんなドラマも想像せずに……。

もうすぐ四十年になる人生。結構うよ曲折の多かった自分史に、又一つ大きな曲がり角ができてしまった。誰も（多くの人）が夢に見る？ マイホームを手に入れようとするその時に、ギザギザに曲がってしまった。これは、恥ずかしながらマイホーム作戦失敗の記である。

悪夢の始まりは一昨年の夏。この地で二年目を迎え、夫は新しい職場に、私は地域社会によりやくなじんできた

ころのことである。

子供たちが寝静まったある夜、私がかの「美しい部屋」の確かに美しい部屋の数々を眺めていると、テレビを見ていたつれあいが「土地でも買ってどうか」と、ポツリと漏らした。「トチ」と私は尻上がりにいぶかし気に繰り返した。彼の、こんなふうにな何気なく漏らすひと言が大体において怖いのであった。ピピッと、私のアンテナは自動的にキャッチし始めた。

「いいだろう。おれはこんな田舎も好きだしここで定住してもいいと思ってるんだ。まあ、家ほも少し後で建てるとしても、こんな所でも地価は上がるばかりだから、今ごろがいいチャンスだよ」

チャンス——これも凶句だ。彼がチャンスと言って本当にチャンスだったためしがない。「土地って、どのくらいよ」と、私はつとめて不機嫌に聞き返す。「まあ四十坪ぐらいなら七、八百万でいけそうだよ。少し見てこようかと思ってるんだ」——ということとは、

もうアタリをつけているのだろうか。

この超保守的な土地柄にもそれなりに順応せんとして割り切り始め、そうねいつまでも借家でもないから長男が受験勉強に入る二年後ぐらいには——と、私も考えないではなかったが。

——と、そんな夜から三カ月後、十一月。話は急転直下、「家を買うぞ」というところにつき進んでしまっていた。私がすぐにはその気にならないと見た彼は、ひそかに近くの不動産屋に向いていたらしい。そこで、もうすぐ

この辺りは「線引き」と呼ばれている「市街化調整区域」の対象になり家が建てにくくなること、首都に直結する高速道路の開通を控えて、地価はますます値上がりするばかりであり、今がチャンスだと、しっかり吹き込まれすっかりその気になっていたのである。

こうなるともう目隠しをしてむちを当てられた競走馬のごとき彼である。後戻りも立ち止まることも忘れている。

私は、どうせ買うならせめて一年くらいかけて、いろいろ物件を見て歩き

たいし、経済的にも一、二年後のほうが楽になるからと「待った」をかけたが、彼はなおも鼻息荒く駆け続けた。何度か言い争いになり、彼は言い放った。「いいじゃないか。おれが買うんだから」

この言葉で、私の頭の中は真白になり、二の句がつけなかった。(だったら買ってみなさいよ、一万や二万の買物じゃないんだからね。私知らないからね)

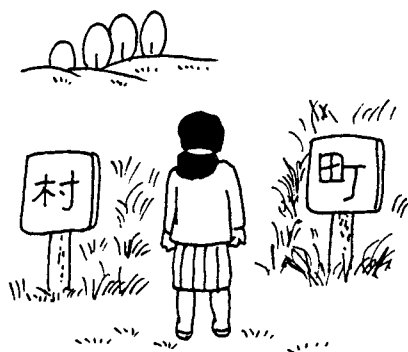
（じつくり慎重に）

そのうちに、手を打ちたい物件があったから印鑑と手付金を用意しろと言う。そして数日後、彼はその話を決めてきたぞと告げた。

私はもうシラけてフテていた。彼が持って来た見取り図をチラと見たが心は少しも動かなかった。

が、とにもかくにも私たちはこれからそこに住むことになるのならと、休日の子供たちを連れて出掛けた。

ここは「村」であるが、そこは一応



隣「町」であった。が、町外れであり、交通の便も生活の便もここより良いとは言えなかった。一見して狭く暗い印象であった。

これまでのいきさつがどうであれ、少しでも芽ばえていた「私たちの家」を見に行く期待が、やっぱり、という思いと共に瞬時にしてしぼんでいった。「嫌だわ。こんなところ」「そんなことないよ。家がちゃんと完成すれば雰囲気も変わるしそれなりに住めるよ」だが私はもう譲る気はなかった。値



段もこの辺の相場からすれば少し高いし、彼がこの程度の物件で妥協しようと言うのなら私が探すわ。

その夜の話し合いで、契約金をチャラにするのは惜しいけど、それでもあそこは嫌だ。こうなったら、私も買うことには譲歩するから色々見てから納得のいく決め方をしようということに落ち着いた。

私の友人のご主人が測量士をしているので相談にも乗ってもらった。そして、これから一年間ぐらいの間に金利も下がるだろうしどんどん値崩れして

いくだろうから決して焦って買うことはない。近くで買いたいのなら心づもりしておくから——というアドバイスを受けた。

事実、このところしきりに、大都市周辺ではマンションを中心に値下がりしており、一戸建てへも波及するだろうということが報じられていた。

そうだ、やっぱりじっくり探した方が良いのだと、私は意を強くした。

が、彼は行く先々の不動産屋で話を聞くと、彼にその気になるらしく、すぐにでも手を打ちそうな気配である。彼は乗りやすいタイプなのである。

その度に私が、反対してみたりためらってみたりして引き揚げてくる。あるセールスマンには「まったくしょうがないね、この奥さん。優柔不断で、そんなに色々心配していたら何にもできないよ」と、まるで商談成立の敵とばかりに責め立てられた。

何となく屈強そうな数人のセールスマンに囲まれて、まるで今決めなければ人ではないような言われ方であった。

ご投稿のさい、次のことにご注意下さい

●住所変更や本のご注文など、事務連絡を原稿末尾に書いたり、びんせんに書いたものを同封することは間違いが起ります。必ず。

編集部では原稿と思って扱うので、見落したり、封筒に残って発見されなかったりします。何度か例がありますので、別便になさるか、同封の場合は表書きに「事務連絡同封」と赤ペンでお書き下さい。

●原稿用紙を二つ折にし、製本のように重ねて、ホチキスで二〜四か所もとじてくる方があります。二つ折ですと整理、割り付けが困難です。ホチキスを大苦心ではずして、開かなければなりません。原稿用紙は開いたまま、右肩一か所をホチキスなどで止めていただくと助かります。●投稿のさいはまず投稿規定をよくお読み下さい。

よりどりみどりで買える身分ではないからこそじっくり選びたいし、一生に一度のこの大きな買い物の過程だって楽しみたいからこそ慎重になるのだ。おあいにくさま。

（勉強不足を反省）

そして年が明けて一月早々、一枚の広告の物件に私の心も少し動いた。

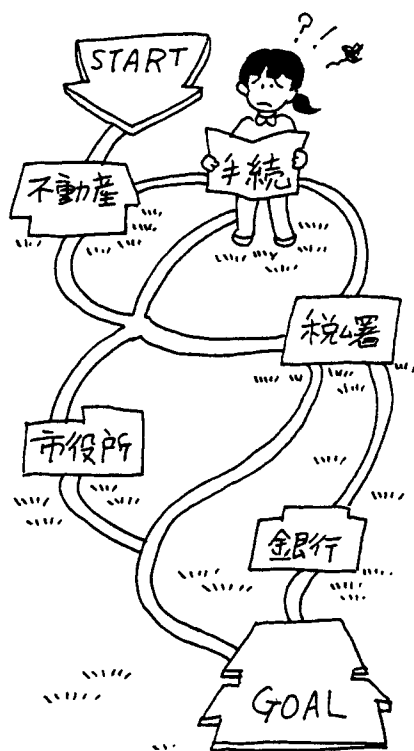
借家からそう遠くなく同村内のこととて、子供たちにとっては良いかも知れない。広さと値段も妥協できる範囲であったし、日当たりもまあまあとふんだ（これは後に見る目が足りなかったと悔やむことになる）。

見に行った日はちょうど雨上がりで、まだ完全に整地されていなかった庭は少しぬかるんでいた。が、同行した営業マンは「いい土を入れてますからね、水はけはいいですよ」と自信たっぷりと言いつつ。ダイニングキッチンがちょっと狭くて使いづらそうだったが樂觀主義の彼はここでも「住めばなじんでくるよ」と言いつつ、もうこの辺

で早く決めたいという気持ちの強いことを強調する。

今にして思えば、ここでもう一度悪者となっても一踏んばりすべきだったと後悔するのだが……。

かくして、私たちは建て売りを買う



ことにした。

さて、それからである。家を買うということについて何の予備知識もなく突入してしまったのだから、まず、あれやこれやの手続きの面倒さに驚いた。おまけに、最近こちらに支店を出した

ばかりの工務店の物件だったせいか、事務の方の応待もスムーズにいかないことが度々あった。役所からの書類にしても何度も足を運ぶことになったり、後から、何枚か不要な書類が出てきたりで慣れてないな——という印象だっ

た。ローンの組み方も年金と公庫と目一杯公のローンを使ったかったが、年金の方は抽選があるから必ずしも受けられるとは限らないし、それほどうまくみもないから——と、いつの間にか立ち消えになって（させられて）しまい、



何となく割り切れなかった。

小さな不動産屋はそれなりに地域と密着していたりして、良さがあるのだろうが、こういう事務的なことは大手の方がテキパキとしているし、諸々の手続き上のノウハウなどもできているだろうから、もっとスムーズに事が運んだのではないか、と思っている。

ローンの組み方にしても、大体の支払いについても、もっと事前に良く検討して不動産屋任せにすべきではなかった。こちらがその辺の仕組みや段取り

を熟知していなかったために、何となく押しがきかずあちらペースで事を運ばざるを得なかった。

後から気になって注意してみていると、このご時世、その手の情報はいくらでもあったのだ。公団が主催する売買のノウハウについてのセミナーも年に何度かあるし、住宅情報関連の雑誌にも結構詳しく出ている。

「頭金の外に、引越して落ち着くまでにはこれくらいかかりますよ」なんて細い試算まで出ていて、これを見ればオタオタせずに済んだのだ。

頭金を出してスッカスカカンの私たちは、やれローン手数料だやれ登記料だと、その度に泡食ってかき集めては差し出した。

そんなこんで引越越し費用も乏しくなり、ついに小さなワゴン車での引越となった。最後に大きいものだけトラックを借りたが、一体何往復したことか。これは近くだったからできたことで、不幸中の幸いであった。

かくして三月の末、めでたく引越

越しも済み、新居でのスタートは切られたが、事の始まりが始まりなだけに、ルンルンとはいかなかった。それでも子供たちの新学期も始まり、生活の歯車は何事もなかったかのように動き出した。

（大雨で庭が池に）

住み始めて、一箇所だけ取っ手がいづらいのと、工事中に職人さんの不注意で壊れたというフェンスの件はクレームをつけたが、一年が過ぎようといういまだに修理に來ていない。折あるごとに何度か言っているし、もうウンザリなのだが、忘れ去られてしまったのだろうか。おしなべて、「売ってしまったらそれまでよ、こちとら、もう次の物を売るのに忙しいもんね」みたいな雰囲気があった。

さて、先に一抹の不安を感じた水はけであるが、やがて梅雨の季節を迎えるにあたっていよいよハッキリしてきた。

昨年は、梅雨から秋の台風までの長

い間、実に雨の多い年であった。そして、その雨の度に我が涙で買ったマイホームの庭は、ドッボンドッボンの、まるで池と化したのであった。水はけの悪さこの上なかったのである。

なぜか――。

裏手が高台になっていて、地元の方とて境には塀もなく、上からの水を止めるものは何もない。そして下には同じく建て売り住宅が続くが、この境にはしっかりと基礎打ちをした塀が建っているから、我が家の水は下へは流れないのである。つまり、川の一箇所をせき止めたようなもので、上からはどんどん流れてくるの下へは流れない。そこで庭一面水をたたえ、ついに縁側の下までに迫ってきた。これではまるで床下浸水ではないか。

そのせいか実にかびが多かった。トイレなど壁紙の間から何やら黒いものが吹き出てくるし、なぜか、安い合板ものの家具の表面からもかびが露出してきた。もう少し排水を良くしてもらおうと掛け合ったが、実際に処理して

くれたのは十月になってから、それも、申し訳程度の処理の仕方ですれほど効果はなかった。

見かねたご近所のおじいちゃんが土木関係に詳しいらしく、「そのうち手入れてちゃんとしてやっから」と言ってくださったのでこちらに期待している。

「家を見に行くなら雨の日に行け」というそうだが状況にもよるから、この辺を見定めるのは難しいと思った。間取りについても、二階は皆それぞれに寝に上がるようなものだから、やはりポイントは、台所と居間の関係だろうか。居間が広く取られていて居心地の良いものとなっていれば、自然と家族も集まってくるものだ。

私も気を取り直して少しでも居心地の良い住まいにすべく、いまだに「美しい部屋」など繰ってみるが、何といっても美し過ぎて参考にもなっていない。それでも、まあいいや子供たちが建て直す時の参考にでも、などと何とも気の長い夢を追ってしまふこのごろであ

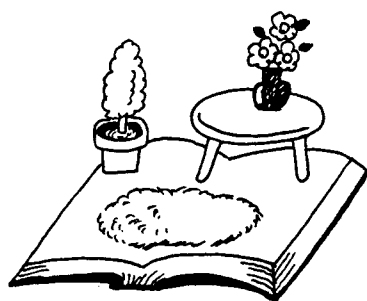
美しい庭



る。

失敗だらけのマイホーム作戦。

ウーン悔しい。今度は絶対失敗しないゾと力んでみても多分、今度はこないのでしょう。どうぞ、これから――と思っていらいっしやる皆さん、じっくり焦らず気の済むまで研究して探してください。「うん、これだ」という家との出会いがきつとあるはずだ。



マンション選びは 運と縁

匿名

（二週間で決断）

一九九〇年十月三十一日から十一月十二日まで。——私たち夫婦がマイホーム探しにかけたのは、このわずか半月足らずの間であった。

もともと夫婦共々大阪出身なので、首都圏で家を持つことはまったく考えていなかった。それが、九〇年の十月三十一日、夫は住宅情報を抱えて帰ってきた。急にマイホーム取得を思い立ってきたきっかけは——あと数年東京勤務が確実になったこと、三年以上社宅に住んでそろそろ社宅暮らしとおさらばしなくなっていたこと、回りで家を購入する知人が増えてきたこと——などいくつかあるが、夫としては、まあ参考までに情報誌を見てみよう、くらいの気持ちだったらしい。

ところが私は家の間取り図などを見るのが大好きである。あつという間にいくつかマンションをピックアップし、抽選の締め切り日に合わせて、次の土日はことここを見に行く、その次の

土日は……と、スケジュールを立ててしまった。

初めて見に行ったのは北浦和のマンションである。駅からバス五分、徒歩三分の好立地、全室フローリング、内装もよい。その場で申し込む。抽選は翌日である。今から思えば無鉄砲なことをしたものだ。倍率は三倍で、結果は見事三位であった。小規模マンションながら、オートロックでかつ管理人は住み込みだったので、もし当選していたら、今ごろは毎月四万五千円の管理費・駐車料に苦しんでいたはずである。

このあと三つのマンションを見に行った。あちこち見に行くと、だんだん目が肥えてくる。だから欠点が目について、買う決心がつきにくくなる。せっかく当選しても辞退して、結局都心からかなり離れた所にやっと気に入ったマンションを見つけて越して行った人を知っている。又、私の友人は、十何回落選したあとやっと手に入れた自分のマンションなのに、安普請だの何だ

のと、しきりにケチをつけていた。

私たちの場合、あまり数を見なかったで、かえってスムーズに運んだのかも知れない。

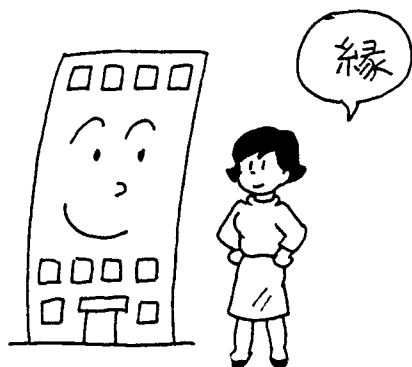
今住んでいるマンションも、抽選では外れてしまった。しかし、ちょうど中古マンションの値下がりが見著になり始めたところで、買い替え組のキャンセルがかなりあったらしい。「即日完売御礼」の垂れ幕がかかっていたが、実際は完成直前まで空室があった。

抽選のあった翌々日の夜、申し込んだのとは違う部屋がキャンセルになったのでどうか、と電話があった。夫と二人で悩む。不動産会社は今夜中に返事がほしいという。

部屋自体に不満はなかったが、付近の交通量があまりにも多いのが不安だった。小学校へは、片側三車線のバイパスを、歩道橋を渡って越えて行かなければならない。交通戦争真った中、という感じである。悩んだ末、契約することに決めた。下の子供が四月に幼稚園入園を控えていたので、どうして

もその春に引っ越しておきたかった。

三月末に入居できるマンションは限られているし、ここを断わって、ここ以上にはいいマンションに入居できるという保証もない。重苦しい決断だった。



マンション探しで楽しいのは、あちこちモデルルームを見に行つて、パンフレットを見比べて何だか言っている間である。決めた瞬間からのしかかる重圧感。これで本当に良かったのだ

ろうか、という迷いをふり捨てて、仮契約↓本契約↓入居説明会…、どんどんプログラムは進んでいく。このマンションに決めることになったのも何かの縁、神様がいいように取り計らってくださったのだ。と思うしかなかった。

（マンションの光と影）

夫の母は、私たちがマンションを買った、というのが少々不服らしかった。大体一戸建てなら固定資産税だけで済むものを、マンションだと管理費・駐車料で毎月三万円あまりのお金がかかってもらいたくない。マンションでは靴を洗ったり、ぞうきんを絞ったりした後汚水を風呂場の排水口に流さなくてはならないので気持ちが悪。…などなど理由は色々あるが、結局「庭付き一戸建て」が本当の意味でのマイホーム、だという意識が強いのだろう。

私自身は、おそうじ大嫌いな人間なので、外回りのそうじがいらぬマンションは大好きだし、カギ一つでさっと出かけられる気軽さも捨てがたい。でも、

一戸建ての実家へ帰省して戻って来ると、数日間は、マンションの白い壁、ホテルのような気密性の高い空間に息苦しさを感じてしまう。ずっと一戸建てに住んでいて、年をとってからマンションに住み替える、という場合は、結構適応するのが難しいかも知れない、と思ってしまう。

もう一つ、マンションが好きなのは、社宅や一戸建てのような、密な人間関係から逃れられる、という点である。実際、いつも人目が気になっていた社宅生活に比べると、格段に自由になった。

マンションは気楽でいい……。しかし、人間業をしようと思っただけから逃げても、必ず落とし穴があるものだ。初年度の管理組合の理事は抽選で選ぶのだが、何とその五人のうちの一人にめでたく当選してしまったのである。今まではずっとくじ運が悪かったのに、皮肉なものだ。

管理組合の仕事をする中で、マンションの影の部分がだんだん見えてきた。

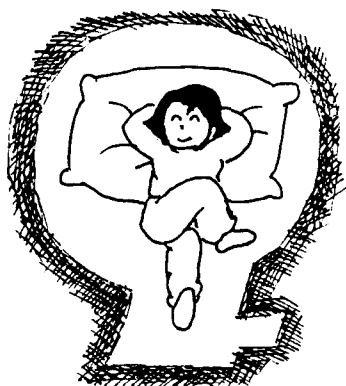
“マンションは管理を買うもの”とよく言われる。建物や内装がいくらよくても、それはハード面でのこと、“管理”というソフト面がうまく機能してこそ本当に良いマンションと言えるのである。ところが、新築マンションの場合、ソフト面については入居するまでまったく分からない。だから、この会社のマンションは評判がいいから、アフタケアもきちんとしていると思うだから、ということを決めたのだ。

実際住んでみると、管理人さんはとてもいい方だがしよせんは通勤。管理業務に入ることと入らないことをきちんと分けて、すべきことしかしてくださらない（それはまあ、ある意味では当たり前のことなのだ）。そして何より、管理会社が何とも頼りない。管理組合の理事もマンション初体験の人ばかりで、又抽選で選ばれて仕方なくやっているの盛りに上らない（私自身も責任を痛感するが）。住民からはクレームだけはどんどん寄せられる。板挟みで何とも苦しい一年間だった。

社宅時代、草抜きや雪かきが何度もあり、マンションに移ってやれうれしや解放される、と思っていたら、そういうのはどうやら予算に入っていないらしい。住民総出でやっているマンションも多いと聞くと、本当に毎月の管理費の支出が惜しくなってしまう。

前出の友人は、マンション自体に色々不満はあるものの、管理人さんはよくやってくれて助かるし、大規模マンションゆえの財政の豊かさか、手入れもすべてお任せで行き届いていて、住みやすいと言っている。

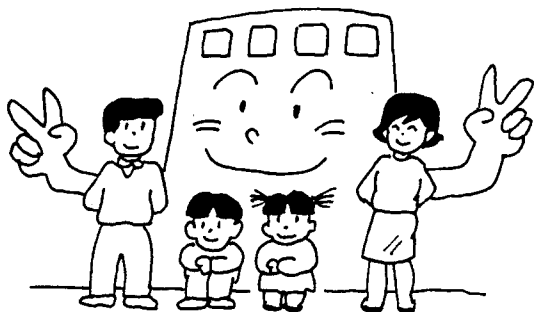
住んでみないと分からない……実にそ



の通りだと思う。そういった意味では、中古マンションの方がソフト面での情報が得やすくいいかも知れない。入居してすぐ管理組合の理事をさせられる、ということもないだろうし……。これから購入を考えていらっしやる方は是非御一考を。

楽をしようと思った落とし穴はもう一つあった。一戸建てなら自治会に入ればすむが、マンションの場合は、管理組合と自治会の両方に属することになる。おまけに当地の自治会は特に活動が盛ん、ときた。すぐ役員をしなければならぬ可能性も新築マンションならでだ。予期せぬことであった。

— マンションの南側にはせせらぎ公園ができ、周辺にはまだたんぼも多い。七階の我が家のリビングからは、新宿の高層ビル群や池袋のサンシャインビル、そして、富士山もきれいに望むことができる。キッチン私の大好きな淡いピンク（最初友人が訪ねて来てくれたとき、キッチンのカラーに入居者が自分の好みで選んだのかと思っ



たそうだ！）。自分の家だからきれいにしよう、と思うのか、社宅時代は何もしなかった夫が、昨年末は子供たちとガラス磨きなどしてくれた。

何はともあれ快適な、楽しい我が家。この家とともに、私たち家族も、年とともに、より強いきずなで結ばれていきたい、と思う。

（え・小宅昌枝）

★わいふバックナンバー

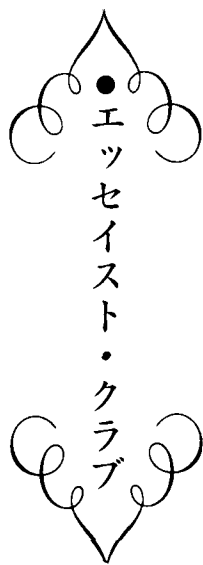
（在庫のあるもの）

各号特集テーマ

- 186号 お医者さんを診断する
- 189号 知的内職の落とし穴
- 209号 わがふるさととの現代史
- 213号 私の夫の労働人生
- 216号 海外赴任―その光と影
- 226号 セカンドハウス持ってみたら
- 227号 子どもの出現
- 230号 旅行記への挑戦
- 233号 私と学校
- 234号 父

定価二一八号までは四五〇円、二一九号より四六〇円。送料は実費負担で。

Tel〇三―三三六〇―四七七―
三三六〇―四七七三



うどん屋

千葉県銚子市 塚本 真理 (41歳)

堂々たる駅ビルを従える現在の荻窪駅からは、二十数年前のあの界わいを思い浮かべるのは難しい。

当時、駅の西口には、スーパーSストアのビルがこじんまりと建っていた。地階は食売り場だったが、あるとき、一角にうどん屋ができた。調理場を囲むカウンターに丸いすを十個ほど置いただけのもので、間仕切りものれんも見当たらない。

それだけなら珍しくもないが、めっば

うまいとなると、話は別である。母は買い物のついでに、高校生だった私は学校帰りに、少なくとも週一回は、その窮屈なカウンター席に座った。湯気を背にさい配を振るうのは、四十がらみの引つ詰め髪のおかみである。銀色に鈍く光るなべの周りには、若い衆が三人。いずれも、てきぱきとわき目もふらずに手を動かす。狭いが清潔な調理場には、一条乱れぬ手際のよさがあった。

食事どきではなくとも、客は次々と現われた。手間と費用をかけただろうツユのいいにおいが、空腹ではなくとも、ちょっと一杯食べていこうかという気をおこさせる。スーパーの片隅のうどん屋にしておくには、惜しい味であった。

夕飯の支度をしながら、母が言った。

「あれはただもんじゃないよ、きつと。元を正せば、名のある店の人たちじゃないのかしらねえ。今はよんどころない事情であんな商売してるけど……」

「よんどころない事情？」

「元は大きな店を張ってたんだろうけどさ、自家火を出すとか、なんか不都合なことをやって、世を忍ぶ飯の姿ってこと。店の名前に傷がつくといけないから、のれんもなんにも出していないのよ。」

だいたい、ああいいう店に四人もの手をかけるな

んて、普通はしないね。店を再建するまでの間、職人を遊ばせておいてもよくないってわけなのよ」母は想像力の人である。

世間知らずの私は、「まさかぁ」などと笑い飛ばしながらも、内心、母の洞察力に感じ入っていた。不本意な場ではあっても、プロの誇りにかけて誠心誠意やり抜いているというような気迫が、確かに彼らにはある。

店の人々が本当は何者であるのか、だれしも好奇心のわくところであらう。

あるとき、満員のカウンターに座っていた中年の主婦が、こんなお値段でこんなにおいしいなんてと、愛想よく褒めちぎり出した。にこりともせず聞いていたおかみさんはただ一言、「ありがとうございます」と懇^{いんげん}懃^だがピシャリと言い切った。次の言葉を飲み込んだ客の前に、あつあつのうどんがすつと運ばれてきた。

一年ちよつとで、店は突然なくなった。

大学生になってうどん屋から足が遠のいていた私は、母から聞かされて初めて知った。母は、「きつと、店の再建のめどがたったのよ。新しい店の場所がわかってたら、行って食べるんだけどね」と、勝手に決めこみ、ひとりで残念がっている。閉店のお知らせの張り紙もなかったそうなの。

数週間後、Sストアに行ったついでに地階まで降りてみた。うどん屋だったあたりは大幅に模様替えされ、焼きそばコーナーになっていた。カウンターの中にアルバイト風の店員が二人控えてい



たけれど、客の姿はなく、閑散としていた。

気がつけば、私もあのころのおかみと同じ年代である。彼女は六十を越えたらう。店の代を若主人に譲っていい年ごろだろうが、どうしてどうして、彼女には生涯現役が似合う。

久し振りに立ち寄った荻窪駅で、そんなことをふつと思つて、苦笑した。

私も母の娘である。

「死」を見た話

東京都新宿区

富永 柳枝 (23歳)

私はあれほど怖いものを見たことがない。

それはひと月前の、夕方の六時ごろだった。私は買い物帰りで、JR錦糸町駅の階段を上ってホームにたどり着くと、五十代くらいのサラリーマン風の男性が倒れていた。そのうち彼は、のろのろと起き上がった。酔っ払いらしい。もうこれ以上ないくらいふらふらしている。その人は、あちこちにぶつかっていた揚げ句、まるでゴムマリのようになり、ぼんぼーんとはねて線路に落ちてしまい、かばんだけがホームに残った。

その時は私も周りも、そんなにびっくりしなかったと思う。なぜなら、すぐに駅員が来て助けてくれると思ったから。まさかその後に電車が入ってくるとは思わなかったからだ。しかし、電車は来た。まるで申し合わせたように絶妙のタイミングで。線路に飛び込んだ所だけを見た人は、自殺だと思ったかもしれない。私はその瞬間、思わず遠ざかり「いやー、うそー！」と叫んでいた。

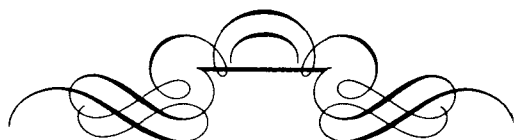
駅員が沢山やってきた。あつというまにその場

は人だかりで一杯になり、みんなホームと電車の透き間を競ってのぞきこんでいた。

「う、気持ちわるい」などと声が聞こえてくる。みんな線路に落ちた瞬間を見てないから、のぞいたりできるんだ、と思った。しばらく動けず、顔面そう白になっていた私は、それでも少ししてから、おそろおそろのぞいてみた。血が見えた。でも、それ以上はやはり見れなかった。じきに、彼は担架で運ばれていった。下半身に白い布がかぶせてあったから、足はぼろぼろだったのかもしれない。

なぜ私がそんなにショックを受けたかというと、もし私がああ男性の知り合いだったら、などと考えたせいもある。例えば、もし私が彼の奥さんだったとする。今朝も多分、いつもと同じ朝を迎え、いつもと同じように夫を送り出し、今日もまたいつもと同じ一日が過ぎていくのだという、なんの保証もない確信を持っているに違いない。それが今日の夜、根底から覆されるのだ。今まで毎日当たり前のように自分の目の前にあったものが、なんの前触れもなく、突然奪われてしまうのだ。こんなに恐ろしいことが外にあるだろうか。

その男性がどうなったかはわからないが、私は今までに、あんなに生々しく死を身近に感じたこ





とはない。もちろん、事故死などよく聞くし、葬式にも行ったことがある。でも、私は祖父の葬式の時でも、祖父が死んだとはにわかには信じ切れなかった。亡くなったという実感がないままに月日をへてきているような感じだ。それは多分、死ぬ場面に立ち会ったことがないからだと思う。現実味をおびないのだ。

私は多分、この世で一番恐ろしいものはと聞かれたら、死と答えるだろう。それなのに、たいいていの人は、それを考えないようにしている。自分がこの世からいなくなり、自分という人間がいたという意識すら消えてしまい、精神もその場で消滅してしまうのかもしれないという恐怖。どうあがいても避けられないもの。こういう私だって、もしかしたら明日にでも、不慮の事故で死んでしまうかもしれない。

しかし、ほとんどの人が、自分が死ぬなんてことは想像できない。若ければ若いほど、まるで自分の人生がこの先永遠に続いているかのように思っている。

若い時から死について考えることは、決していることとは思わないけれど、私が今まで生きてきた二十年ちょっとは、確かにあつという間だった。そして多分これから先の何十年も、あつという間

にすぎていくのだろう。それなのに、時間がまる
で無限大にあるような錯覚に陥り、やりたいこと、
やらねばならないことも、延ばし延ばしにしてき
た。それが今までの私の人生だ。

私は愚かにも明日死ぬとは本気では思っていない
けれど、もしかしたら私にはあまり時間がないの
かもしれない。自分のやりたい事をできるだけ実
現できれば、この先私に死ぬ日が訪れた時に、じ
たばたしないですむような気が、ほんの少しだけ
する。それとも、たとえ悔いがない人生が送れた
としても、だれもが死ぬ時は、往生際が悪くなる
ものだろうか。こんなはずじゃなかった、もっと
もっと生きたい、とのたうちまわるものなのだろ
うか。だれか教えてほしい。

かぶらずし

奈良県生駒郡

高松 恭子

「かぶらずし、できてるよ」

実家の母から電話があった。私は、待ってまし
たとばかりにもらいに行く。

かぶらずしというのは、夫の故郷、金沢の名物
で、冬の風物詩ともいえる有名な食べ物である。

いわゆる、すし飯を使ったすしではなく、一セン
チくらいの厚さの輪切りにしたかぶらの間に、ぶ
りの切り身をはさんでこうじに漬けて発酵させた
漬物である。

初めて食べたときには、何とも奇妙な味に思え
たものだが、なじむとやみつきになるほどのおい
しさなのである。金沢にいる夫の母が、年末にな
ると、我が家と私の実家によく送ってくれる。もっ
とも金沢にはこの外にもおいしいものがたくさん
あり、あれこれ品を変えて送ってくれるので、い
つもかぶらずしがくるとは限らない。好物とはい
え、催促して送ってもらうには、ちょっと気を遣
うほど、結構なお値段なのである。

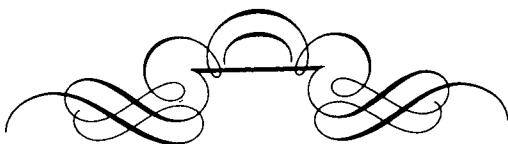
あるとき実家の母は、「これ、うちで作れない
かしら」と言った。

「ちょっと難しいんじゃない」

ところが、金沢を紹介するテレビ番組で、この
かぶらずしを作っているところが画面に映ったら
しい。それを見た母は、張り切って電話してきた。
「ぶりをはさんだかぶらを甘酒につけるとい
うのがわかったんよ」

さっそく作ってみるという。

まず、もち米を炊き、アツアツのご飯にこうじ
をまぜて甘酒を作る。完全に冷めるまで手を休め



ずませ続けるのが、おいしい甘酒を作るコツである。かぶらとぶりには塩をして二日ほどおく。甘酒の発酵具合をみながら、かぶらの水気をふき、ぶりの塩気を酢で洗い、それをかぶらにはさんでいく。そして甘酒につけて三日ほどのち……。

母の作ったかぶらずしはびしょびしょの水びたしといった感じで、中のぶりも生っぽく、金沢のものにはほど遠かった。

母は、甘酒がゆるすぎたのと、ぶりのしまり具合が足りなかったのが失敗の原因で、次は氣をつけようと言った。

材料費と手間は大変なものなのに、母はもう一度作るつもりなのだ。

そして、二度目、味はぐっと本物に近づいた。「うん、いける／＼」私の満足気な顔を見て、母は自信を得た。季節は、生のぶりが使えるぎりぎりの三月だった。

あれから二年、私はもう数回も母の作ったかぶらずしを食べた。母のかぶらずしは、かぶらを薄く切ったあるので食べやすく、薄塩なので塩辛くない。そしてぶりがたっぷり大きめなので、漬物の域を越えたおいしさがある。私には、そのまろやかな味が、加賀百万石伝統の味に、決して劣るものではないようにさえ思えるのだ。



私は自分の記憶をたどってみるとき、そこにいつも生き生きと家事をこなしていた母の姿を見いだす。母が五十年近くもこなしてきたことは、形に残らず、お金にもならなかった。しかしそれらは、まぎれもなく私の命をはぐくんできたのだ。私はたまに煩わしいと思うことはあっても、家事をつまらないものだ、などと思ったことは一度もない。

三三二号室

香川県小豆郡 広瀬サカエ

一月の下旬、母が腰を痛めて、入院した。レントゲン検査の結果、腰の骨にちょっとした圧迫骨折が認められたのだが、寝ているときはあまり痛がらないので、付き添った私はのんきに本などを読んで過ごした。

朝、病室のカーテンを開けると、山が雪化粧し



ていたその日から、緊急患者が次々と入ってきて、母は二人部屋から六人部屋に移された。

その大部屋の患者は、六十歳の人を除くと、母をふくめたあとの五人は八十代の人たちで、まる

でミニ老人ホームのようだった。

昼間は、検温、回診、体の清拭、室内の清掃など、病院側の用務のほか、患者の家族が様子をみにきたり、見舞い客があったりで、少しも落ち着かない。

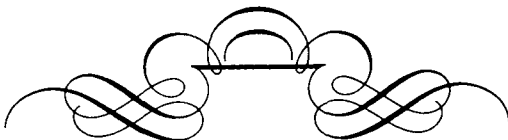
夜は九時の消灯時間を待たずに、八時ごろから、自分のベッドの周りのカーテンを引いて電気を消し、みんな寝てしまう。

二人部屋にいたときは、消灯時間が過ぎて、まくら元のスタンドの周りを新聞で覆って本を読み、看護婦さんの足音がすると、慌てて明かりを消して、たぬき寝入りを決め込んでいたのだが。

大部屋に移った第一夜は、母のベッドの下で眠れぬままに頭から布団をかぶっていると、安らかな寝息などと言うにはほど遠い、豪快なびきが聞こえてきた。

それはひとりひとりトーンが異なり、やがていびきの合唱となる。その響きたるや、女性も年をとると、かくも盛大な音を出すのかと驚かずにはいられないほどの音響である。

そのうち、私もまどろんでいたらしい。何かいびきとは別の物音によって目覚めた。それは、ベッドの下に置いてあるポータブル・トイレを使用する音だった。



エッセイスト・クラブ

その音は、あまり時間をおかずにあちこちから聞こえてきた。

寝不足な一夜が明けると、もう私は読書もテレビを見ることもあきらめて、同じ部屋のおばあさま方のウォッチングに決めた。

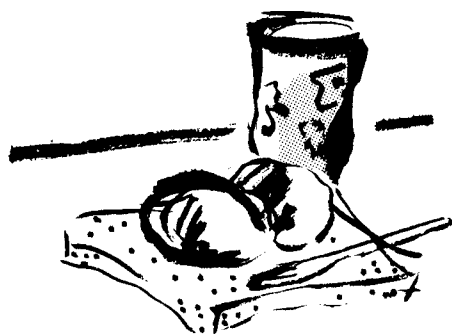
Mさん八十六歳 呼吸困難

Lさん八十五歳 脳いっ血

Sさん八十三歳 静脈りゅう

Kさん八十歳 心臓発作

Oさん六十歳 手足の骨折



それぞれの入院理由となった病名である。

Lさんは昨日の昼間、皆にバナナを二本ずつくれた。大柄でふくよかな顔をした人だが、そのバナナの皮が黒くなっていたので、

「中身が腐っていないかと、心配で心配で朝三時まで眠れなかった」と言う。

（そんなことないでしょう。宵の口から、老いたカラスが鳴くようないびきがLさんのベッドから聞こえてきましたぞ）

Mさんが昼食前に、自分のベッドの周りのカーテンを引いた。

すぐ横のLさんが尋ねる。

「なんでカーテンを引くんじゃ？」

「着替えをするけん」

「着替えをするのに、いちいちカーテンを引くことがあろうかの」

「見られたら困るが」

「皆、同じじゃ、隠すことはなからう」

「同じか違うか、見くらべてみなけりゃわからんじゃろうかの」

四時四十分、病棟の中央に、夕食をのせた台車が現われた。

「ごはんじゃ、ごはんじゃ」

色白で小柄なKさんが心臓病ものかは、病室

から飛び出していった。

そして、長い廊下を小走りに、アルミ盆にのつた食事を一人分ずつベッドまで、六人分運んでくる。

「前まで（病室の）来るのを待てばいいのに」と、Oさん。

「そんなに待っておらりようか、西の方の人はもう食べよる人がおるっちゅうのに」

そう言いながらKさんは自分のベッドに倒れ込んだ、何ともせっかちな人である。

Oさんは、お正月に八幡様で厄払いをしてもらった。帰る途中犬に出会い、犬がこわいOさんは後ずさりしていて道路の側溝におちて、足を骨折した。入院して初めて松葉づえで歩けるようになった日、病院の廊下で転んでさらに、左手首を骨折。一メートル四十八センチ、六十一キロ、まんまうい顔のOさんは、

「おはらいをしてもらったおかげがあった」と言って笑いこらげた。

Sさん、もの静かで、同室の人の話にはめったに加わらない。大きな旧家の出身とかで、元教師。三日前、のどの静脈りゅうの手術の跡を内視鏡で検査したばかりで、点滴を受けていたが、今日初めて流動食に近い食事が出た。

折あしく見舞い客が、おまんじゅうを持ってきたらしい。

「ね、先生にこのおまんじゅう食べてもいいか聞いてちょうだい」

「なにを言ってるの、今日が一番気をつけなければいけない日なのよ」

付き添っている娘さんがしかっている。

「口にいれたら、吐き出すから、ね、いいでしょう」

「吐き出すぐらいなら、食べなきゃいいでしょう」

「だって、今飲んだ薬がとっても苦いの」

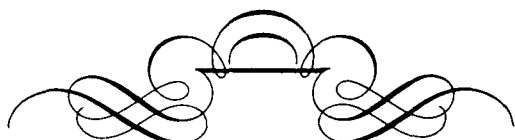
Sさんは、あくまで粘る。

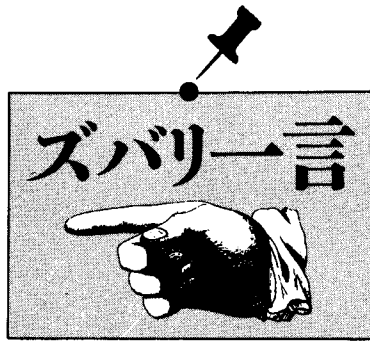
娘さんは、押し切られたかたちで、おまんじゅうを割ってSさんの口に入れている。しばらく口の中でもぐもぐしていたが、約束どおりSさんは、きちんと四つ折りにした奉書紙の上にそれを吐き出した。

日ごろ、みんなからけむたがられているお上品なこの人にして、かくのごとし。

繁雑な一日が終わり、三三二一室にまた長い夜がやってくる。

（え・カステラネンコ）





二枚の ポスターが 語るもの

東京都新宿区●宮本節子

エイズ予防のポスター

昨年暮れにエイズ予防財団が作成した二枚のポスターをめぐって、女性差別であるとの論議が

おこった。

初めに、このポスターの図柄を知らない人のために説明しておこう。

ポスターAのデザインは、バスポートで顔半分隠した男性、コピーは「いってらっしゃい。エイズに気をつけて」。ちなみに、この男はよく見ると笑っている。この笑いをにたたと表現するか、にこにこと表現するかは、これを見た者の性意識、異性観によってずいぶん違いがあると思われる。

ポスターBは、それらしいサイズに膨張したコンドームがでんと据えられていて、その中に全裸の女性の全身像が入っている。コピーは、「薄くてもエイズにとってはじゅうぶん厚い」さて、このポスターが発表されたのが、一九九一年暮れで、一九七五年の国際婦人年から十六年経過した日本、ということ

を踏まえて感想を述べたい。

差別の問題は究極的には、内在的な意識にかかわる問題なので、ことあるごとに、どこがどのようにおかしいのか、論じて論じ過ぎることはないと思うのだ。またかと、思わないでつきあってほしい。

ポスターによって 傷つく者

最初に、このポスターは、次のような日本の女性の心情を直撃し、無残に傷つけていることを明らかにしておきたいと思う。「夫の口から、海外の赴任地で買春をしていた」ということを聞いて「そうだろうな」と思った。……中略……

日がたつにつれ、私は混乱してきた。外の女性に触れたその手で、平然と私を愛撫する夫、私の中にはしつとというだけでは片付けられないこだわりが生

まれてくるのだった。

そしてもうひとつ。日本では考えられないようなわずかのお金で女性を買えることに「しめた！」とさえ思っているフシが感じられ、金の力に任せて何でもする日本人、という醜いイメージが夫に重なってくるのだった。夫の中にある男の持つ女性べっ視に思いがけず出くわした気がしてくるのだ。

つかの間、夫は私のそばにいたが、今は遠い海外で单身生活をしている。私はひとり相変わらず千々に乱れる気持ちの中で暮らしている。（匿名希望・主婦・35歳）（一九九一・五・一四 朝日新聞「ひととき」欄）



この女性は夫の口から、単身赴任先の海外での買春行為を聞いて、妻がいなければそういうこともあるだろうな、そういう状態であれば、女性を買うこともあまり後ろめたさもなく受け入れられているのだろうな、といったんは胸に納めたものの、心から納得できないでいる。

妻ある男の買春行為は、妻の側から言えば、明らかに不貞行為である。妻にとっては快いものではない。セックスツアーなるものが盛んであるが、この男たちの妻の肉声はあまり聞こえていない。

不満の声をあげれば、家庭が崩壊する危険をはらんでいるし、日本の社会は男の買春行為に寛容にできている。ちなみに、右記のような投書はいつも匿名である。

ポスターAは、セックスツアーを楽しむ夫を持つ妻の神経をお

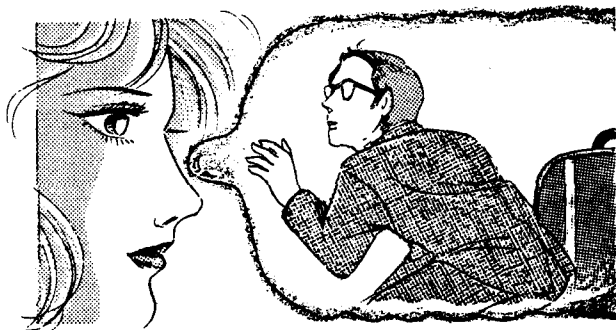
まりにも無神経にさかなです。声高に聞こえてこないからといって、無視していいものではないからに。

エイズ予防は、男にとっても女にとっても、等しく真剣に取り組まなければならない課題である。一枚のポスターから伝わってくるのは、男の卑わいさど都合主義であり、人類が今闘わねばならないエイズの恐ろしさではない、と私は思う。

また、この投書の女性は、我が身のつらさを嘆くだけでなく、買われる側の女性の貧しさにも思いをはせている。このことは後で触れたいと思う。

コンドームの中に 入るべきは男性

ポスターA（バスボートの男性）もポスターB（コンドームの中の女性）も、そのメッセージの送信先は日本の男性である。



無傷の男は、エイズを持った女から身を守らなければならない、というのがこのポスターの含意なのであろうか。

AとBのポスターが対のものとして作成されたものであるならば、Bの送信先は女性でなけ

ればならない。

Bの意味するところは、要するに性行為に及ぶときにはコンドームを使用しよう、というきわめて単純なことらしい。

それにしても、なぜコンドームの中には全裸の女性がいなければならないのか、その必然性が理解できない。女性を入れたことによって、見ようによっては前述したように、エイズ女性をコンドームによってくるんでしまえ、という余計な解釈が成立してしまうのである。

さて、Aの文脈（海外で遊んでエイズに感染する可能性のある男性）で、Bのポスターを日本の女性の側に置き換えてみよう。

海外で無防備に遊んで帰った男性の直接被害者となる可能性の最も高いのは、まず第一にその妻である。第二に日本の売春婦、第三にその売春婦の顧客で

ある別の男、そしてさらにその妻、という水平感染の経路が成立する。母体から胎児への垂直感染もある。

これらの経路を断ち切るために、コンドームの中に入れないければならなかったのは、バスボートの男である。

売買春は現に存在する。しかし、この問題をエイズ予防ボスターのような公の場で取り上げるとき、男性の側からのみ語られることに、国際婦人年というのは、結局、お祭り騒ぎ以外のなにもでなかったという、悲哀と無念さといふ立ちを感じるのである。

インターナショナルな課題

エイズはきわめてインターナショナルな課題である。日本一國で解決できる問題ではなく、各国との総合的有機的な連携の

下に対策が講じられなければならない。

ポスターでは、バスポートという小道具を使用することによって、エイズの課題に国際的な視座を与えている。ただし、国際連帯の共同作業の象徴としてではなく、日本のエゴイズムの象徴となっているのが残念だ。

さて、バスポートの男性が遊びに行く国の女性のことを考えよう。

たとえば、タイ、バンコクのパッポン通りの女性たちの状況について、私たちはきちんと知っているであろうか。

外国資本の合弁会社の工場で女工として働くより、歓楽街で春を売ったほうが収入になる現実、東北部の農村の若い女性や少女が、売られたりだまされたりして、半強制的に売春婦になる現実、自国の女性が外国の男の慰みものになっていることを

にがにがしく思っているかの国の男性たち、などなど、この地域では売春は貧困と深く結び付いている。

日本人男性観光客が女を買うことによって、かの国の経済に貢献している、などという鉄面皮なことはよもや言わないであろうが、国際的に言えば、バスポートで顔を隠さなければできないようなことはするな、ということではなからうか。

エイズ予防の呼びかけが、公の立場からのものであるならば、外国との協力関係をきちんと持てる発想が必要だったのだと思われる。

貧困と売春という、日本では古典的となった経済状況が現実のものである国々が存在している。現象的には、それらの国の貧しい売春婦と、金満の日本人男性を媒介に、エイズは広まるであろう。

それでは、なぜ「買春はするな」と明確に言い切って呼びかけることができなかったのだろうか。事態の進展の速度から言えば、そのほうが实际的だ。

ところで、バスポートの男に、「いつてらっしゃい……」と呼びかけているのはだれだろうか。女性だと想定されていたとすれば、それはおそらく男の妻であろう。「あなた、いつてらっしゃい」とにこにこ送り出しているのだろうか。それとも、先の投書の女性のように砂をかむ思いなのだろうか。日本人女性としては、どちらであっても、非常に悔べつである。

そして、一番やりきれないことは、日本人女性にとってはそれが悔べつになるということさえも意識していない製作者や、公表を承認した財団や、バック団体である厚生省の女性観である。

男とはそういうものだ、割り切って送り出している妻もいるかもしれないし、非常な屈辱感をもって送り出している妻もいるかもしれない。個々人の内



面にどのような葛藤^{かつそう}があらうとなかろうと、対外的には、女性でもなく男性でもなく、日本人が買春にでかける男を垂れ流している現実を容認している、と受け取られても仕方がない。
Aのポスターを許容することは、国際連帯の理念からはずれ

る行為だ。

二律背反の選択

にもかかわらず、気を付けなければならないのは現実的な課題である。周知徹底を図る必要性と緊急性はきわめて高い。ポスターの一件についての新聞報道があった二日後の朝日新聞に、「アメリカでは、売春婦や麻薬中毒者にコンドームや注射針を配布している。だからといって売春や麻薬を容認しているわけではない。今、日本で一番の課題は日本人が海外で感染することを防ぐことにある」という趣旨の投書が掲載された。

その通りだと思う。
エイズに関して、売買春にしても、麻薬中毒にしても、その行為は、既成の社会的規範から逸脱しているがゆえに、対策も現実と理念のはざまにあって二律背反する、厳しい選択を迫ら

れるのである。

ことの重大性、波及の範囲の広さ、緊急性などから、現実の施策としては、既存の社会規範に真っ向から対立する方法、例えば、麻薬中毒患者に注射針を配布するような、極端な方法を打ち出さざるを得ない。

だから、エイズ予防の第一歩としてコンドームを取り上げたこと自体は、正鵠^{せいこく}を得ている。ポスター掲載について、J R

東日本や営団地下鉄では、「子どもも見ると公共の広告としてふさわしくない」との理由で拒否したという。拒否した理由がコンドームにあるとすれば、エイズの時代状況は加速の一途をたどっていることを認識しなければならぬ。

現象的には、エイズと売買春とは深い因果関係で結ばれている。さらに、売買春は女性差別の象徴のような位置を占めてき

ている。

ことの重大さにかんがみれば、社会規範に対立するような施策を打ち出さざるを得ないことを肯定しよう。ただ、その施策は女性差別を肯定するような施策である必然性があるのかどうかの問題だ。

エイズの深刻さを考えれば、女性差別のなんのと言っておれるような状況じゃない、という論調をよく聞く。この論調には、あたかも、女性があのポスターに関して異議申し立てをするのが、不当なことであるかのような非難さえ込められているところがある。

エイズのような事態に人類はまだ立ち至ったことがないのだから、このさい男の身を守ることが先決である、という納得のいく結論であるならば、甘んじて差別的待遇を受け入れようと思う。

このことは、買春に出かける日本の男を「エイズに気をつけて」と送り出す対策が、エイズを防止するぎりぎりの選択であり、これしかないというのであれば、この悔べつの対策を受け入れようということの意味する。女は水平感染から我が身を守るためばかりでなく、垂直感染から我が子を守らなければならぬ生理を背負っているからである。

しかしながら、水平感染防止は自己責任であるとしても、垂直感染防止は、あくまでも、男女の共同かつ同等の義務があると思うけれども……。

エイズ予防対策として、買春男に「気を付けて」と送り出し、まずは女性をコンドームにくるんで無害化することが、現時点での最善の対策であることの根拠を、製作し発表した当事者に伺いたいと思う。

子供の数から何がみつかるのか

愛知県春日井市●高木妙子

昨年十二月の初め、NHKラジオを何げなしに聞いていて、「えっ、いまさら何を言うの」ととび上がった。

「……現代社会において子供の成長をはばむものに、一人っ子というものがあります。それは、子ども一人しかない」と、母親がその子ばかりに集中して、子どもの自然な成長と自立をおさえてしまうのです……」とこんな講演内容が聞こえてきた。あわてて新聞のラジオ番組をみると、「心の成熟をはばむもの」と書いてあった。NHK名古屋に電話すると、お話の主はA氏

であり、精神科医ということ。内容については名古屋ではわからぬため、東京のNHKに連絡してくださいと言う。

NHK名古屋の見知らぬ男性は、あなたの言われることはこれからのA氏にためになるかもしれないから、どうぞ東京へ連絡を、と言われた。でも私は、NHK東京へ連絡するより「わいふ」に書きたいと思った。

二十一年間、発達心理学の本を読み続け、今も心理学の講義をさせていただいているが、一人っ子がいけないという研究ばかりではない。長子と一人っ子は同じ性格といわれる。長子的性格としては、控え目、自制的、親切、依存性が少ない、自己中心的（わがままという意味ではない）、次子的性格としては、快活、甘ったれ、依存的である。今思いだしても、こんなに良

いところを長子や一人っ子はもっているのである。親の養育態度としては、サイモンズの有名な研究があるが、親が複数の子どもに対してどのような接し方があるかということであり、子どもの数にはまったく関係がない。子どもの数によって親の養育態度が変わるといえるのは、どんな科学的根拠があるのか。

子どもは、数の問題ではなくて、親の養育態度そのものに問題があるのである。児童心理学



者が何十年も言い続けていることがちまたの精神科医にとどかぬとは残念である。中国では一人っ子政策をすすめているのに、いいかげんにしてほしい。

駅で障害児と 出会って

神戸市東灘区●岩田佳子(55歳)

片町沿線の老人病院に入院中の夫の母を見舞うため、大阪環状線の京橋駅で乗り換えて片町線のホームへ向かう途中、ホームへ降りる階段口に小児まひの男の子を連れた母親が立っているのを見かけた。

男の子は四、五歳であつたらうか。大型のベビーカーにぐたりした格好で座っていた。母親はベビーカーごと子供を抱えて階段を降りるつもりらしく、階段の人波が引くの待っている

様子だった。

若くて体力もありそうな母親だったが、一人で、四十段ほどもある階段を、ベビーカーごと子供を抱えて降りきれるだろうか。その不安を母親も感じていくように思われた。私は彼女の後ろに立ち、母親に代わって子どもを抱えて降りてくれる男性が現われるのを待った。

片町線は別名学園都市線ともいわれており、沿線にはいくつか大学があるので昼間でも絶え間なく若者が乗り降りしている。この中のだれかが手伝ってくれることを願ったのだったが、私がつまっている間親子の姿をいぶかしそうに眺めて行く者はいても、手伝おうと声をかける者は一人もなかった。

階段の人波が途絶えると、母親はやおらベビーカーを持ち上げた。

「私でよかったらお手伝いしま

しょうか」

私は、おずおず声をかけてみた。

「あっ、お願いします」

若い母親から見れば、頼りなげな小柄な中年女である。断わられるのではないかとの思いがあったが、明るい笑顔でこたえてくれてほっとした。

「せーの」

声を合わせて母親が頭の方を、私が足の方を、いっしょに抱え上げたそのとき、階段の下から留学生らしい金髪の青年が手を横に振りながら駆け上がってきた。

彼は、自分が小わきに抱えていた本を私に預けると、ベビーカーを抱え上げたすと階段を降りて行った。

青年に預かった本を持って、後から追いかけるようにして階段を降りながら見た青年の後ろ姿は、意外にはっそりとしてい

た。

街角などで、車いすに乗った人の手助けをしているのは、たいてい西欧人らしい外国人の男の人である。体格のよさが力仕事を受け持つことにつながるのだろうと、積極的に手だしをしたがらない日本の男性を弁護する気持ちで眺めていたが、考えてみれば、いまではとくに若い男性は、外国人に劣らない立派な体格になっている。

片町線のホームに向かう人々の中にも、金髪の青年以上に肩幅ががっちりした日本の青年が何人もいた。

外国の見知らぬ青年がごくあたりまえのように、さりげなく示した行為に感激を覚える一方で、私は日本の将来にかすかな不安を感じた。

折から、私が住んでいるところからはさほど遠くない尼崎市で、公立高校に受かった玉置君

という少年が、入学を拒否され
という出来事が起こった。そ
の少年は不治の病といわれてい
る難病にかかっていて、車いす
の生活をしている。学校側は、
設備がないとの理由で玉置君の
入学を拒み、養護学校へ行くよ
うに勧めたのである。

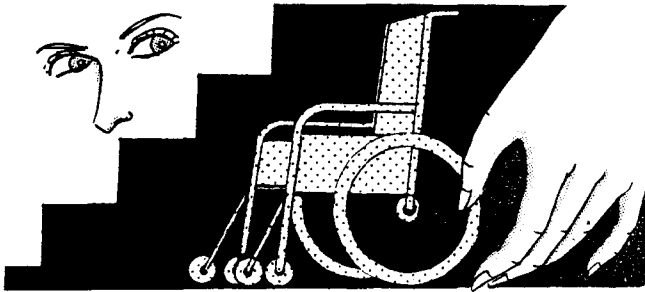
いわば、体の不自由な少年に
たった一つ残された能力を、そ
して望みを、公立高校の校長は
摘み取ろうとしたのである。

一年の間、浪人生活を余儀な
くされた玉置君はこの春、私立
高校の関西学院高校を受験し、
合格して入学することになった。
関学はキリスト教系の学校で
ある。

玉置君に良い結果がでて本当
によかったが、ここに至るまで、
玉置君本人はもとより、親御さ
んの精神的負担、裁判に費やし
た時間、経済的負担を思うと、
先進国の仲間入りをしている日

本の文化度の低さにたじろぐ思
いがする。

いみじくもだれかが言った。
障害者になったら、先進国の外
国に行つて暮らすんだ、と。



たらねち (足らね乳) の母

東京都練馬区●上谷亜育

母乳育児の声が高まってきて
いると思える日本、その一方で、
今、かつての日本のような「母
乳栄養が急激に低下している国」
が現われてきています。

アジア、アフリカの国々で、
日本のミルクメーカーがどのよ
うなことをしているか、人工栄
養病の犠牲児(ボトル・ベビー)
についてなどを、消費者リポー
トを出している日本消費者連
盟発行の「母乳VS粉ミルク」
で読むと、日本でかつて何が起
こったのか、推測することがで
きます。

お医者、保健所、おばあちゃ

私たちの「足らね乳」の合唱に
めけてしまった私でした。

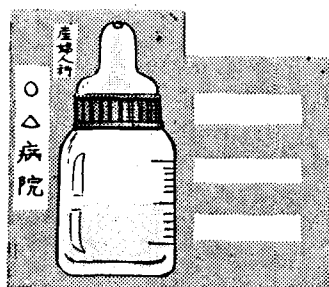
赤ちゃんたちにおっぱいを取
り戻すには……、岩崎さんが書
かれている「お乳はだれもが出
せるもの」という観点にたつて、
関係診療各科が協力しあえる態
勢」を私も切望しています。そ
のためにも、産院や小児科の中
からミルクメーカーはサヨナラ
してください……、これが、私
がミルク育児と母乳育児を試行
錯誤してたどりついた、もうひ
とつの結論です。

もちろん、ミルクが必要な赤
ちゃんもいるのでしょう、でも、
今は、あまりにも必要でないミ
ルクが与えられ過ぎています。

荻野さんが言う「奪われた新
米ママの決定権」はさらに踏み
にじられ、出産した病院では、
ものすごく痛いおっぱいのマッ
サージを受けました(その間赤
ん坊は早々とミルクを与えられ、

あんな拷問のような目にあわせておいて（桶谷式のように、痛くなくお乳が本当に出るようになるマッサージがあるのです）、結局おっぱいは出るようになります、ミルクの調乳指導とやらを受けて、退院のおみやげにミルクだなんて、あんまりです。

産院とミルクメーカー、それは病院と製薬会社の結び付きに



も似て、その間柄はなかなか別れ難いものなのでしょうが……。何とかならないのでしょうか？

女性団地役員 に起きた デキゴト

●矢張優子（39歳）

団地の集会所を出ると、私は急にムカッ腹がたった。あんな理事会新年会に三時間もつきあったりして、バカみたい。あゝ、時間をもったいない。

植栽の間の小道をぬけて、ほの暗いエレベーターホールに入る。エレベーターのボタンをエイトを押す。八つ当たりぎみにボタンを押すと、もっとムカムカしてくる。

ゆっくりとエレベーターのかごが降りてきて、ドアが開き、私はエレベーターに乗る。「閉」のボタンを、今度は静かに押す。団地の共有財産に八つ当たりし

てはいけない。エレベーターがゆっくり上昇する。

私とSさんが理事会の帰り、このエレベーターで手を握りあっているってか？ バカ言うんじゃないよっ！ 私ほね、この中で亭主とキスしたことはある。だけれど、Sさんとそういうたぐいのことしたことはないっ！

次の理事会や専門部会の打ち合わせの続きをやっているだけじゃ！

あんなネ、この一年間、いたい私の何を見てきたのさ。アタシヤ、まじめに理事をしてきたゾ！ 男に媚、売ったことなか、ねえゾ！ 同じ部署を受け持つSさんとフツーに、仕事してきた。それが悪いってのか！ 悪いはず、ねえだろ。

エレベーターは、七階で静かに止まった。「この始末、ちゃんとつけるからなっ！」エレベーターに、そ

う言い置いて、憤然と降りる。夫は「ごころうさん」と私を迎えた。子どもたちはもう寝ていた。ダイニングに座って、しばらくよもやま話をする。

「あのさあ、ちょっと相談があるんだけど……」

そう言っ、私は言葉をきる。夫は「ほら、来た」という顔をする。またいつものクセが始まったという表情と、今夜はどんな話がでるかとか期待の表情をしている。私は前言を訂正する。「やっぱり、相談じゃないな。私、決めたんだ。だから報告するわね」

あの初老の男が冗談っぽく、「矢張さんとSさんは、いつもエレベーターの中で、こんなふうには手をしっかり握りあっているんですねえ」

ゼスチャー入りでこうからかった。私は不快な顔をしたが、その男はまるで気がつかなかった。

だから私の憤りをみんなの前で伝えることにした。と夫に言う。

夫の口元が、ヒクヒク震えている。夫は感情が激すると、なにかひとこと言う前に表情がこうなる。もっと冷静に構えるかと思つてたのに、意外。

「理事会はサークルではありません／＼ 私はずいぶん仕事だと思つてやっています／＼ 一言だけ、そう言つてやれ／＼」

おっ、いいこと、言つじゃん。でもね、鈍いやつには一言じゃ効き目がないの。ちゃんと言わなきゃ、わかんないの／＼

二月の理事会は、午前中が団地内駐車場の抽選、午後が定例会。日曜日が一日つぶれる。昼食は幕の内弁当をそろつて食べる。

五十代の女性理事は、あの日のことを電話連絡のついでに話題にしたとき、「どうしても言

うなら、最後の理事会にしたら」と言った。でも、こういう絶好の機会を逃す手はない。

「ちょっと、いいでしょうか」幕の内を食べながら、私はここにこ笑つて、切りだす。

「お酒の席のことは、男社会では、聞き流すのがルールのようですけど、私は男ではありませんので、ちょっと言わせていただきます」

理事会の空気が緊張する。

あの初老の男は、私の席の延長線上にいた。残念ながら表情は見えない。かわりに理事長の顔がひきつる。あの日、理事長もすっかり酔つて、あの男と一緒にロシア民謡のオンパレードなんかをロシア語でやっていた。そんなことで、目くらまなかなたてないって。

「新年会で、どなたかが、私とSさんのことをエレベーターの中でどうかと、おっしゃった



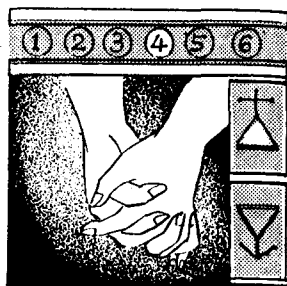
んですが、わたくし、そういう言葉に大腹が立ちました」

「どなた」だの「どうか」だの、あいまいな言い方をした自分に腹をたてる。私はニコニコをやめて、キツとなる。

「私とSさんは、一緒に専門部会の仕事をしました。それをふたりに下心があるからとおっしゃるのは、男と女がふたりで組んで団地の仕事をするな、とおっしゃっているのと同じです。

これからも女性理事は増えると思います。女性が男性と組んで専門部会の仕事をするたびにどうこう言われては、女が理事をしにくくなります。今、女性も社会参加という世の中になってきています。男性がたもそれを認めたような口ぶりをしています。

でも、私とSさんのことを、どうこうおっしゃるということを考えてみますと、利口なお口



ではなんとおっしゃっていても、本当のところは『女は世の中に出るな』とおっしゃっていることになるのです。

これが今ハヤリの言葉でなんというか。そんなことを申し上げなくても、皆さんにはもうよくおわかりでしょう」

私の向かいの五十代の男が、かすかにうなずく。

「でも、おっしゃっていたいでよかったと思います。私が今申し上げているのは、『そんなことを言っているのは、』ということではなく、『男と女が組んで仕事をする』ことを、そんな目で

見てもらっては困る』ということです。

理事は団地に住む者の趣味でも遊びでもありません。団地住民として、当然しなければならぬ役割です。すくなくとも私はそのつもりでやってきました。ですから、私は女同士でなければ困るとか、専門部会の長は私の手に余るとか、そんなことを言わずにやってきました。そこを誤解や邪推をされては、大変迷惑です」

部屋がシーンとなった。その雰囲気の中で、私は酸欠になりそう。しばらく沈黙がつづく。その沈黙の性質を、私は確かめる。

(だから、女は困るんだよね) そんな雰囲気は、ほとんどない。

(やっぱり、言ったか) 十二人のうち、そう思っている人のほうが多いような雰囲気。

細長いテーブルを四角く組んだその部屋で、私と同じ列にならんあの男がどんな表情をしているのか見えない。それがかえすがえす残念だ。

沈黙に耐えかねて、あの男と同じ年代の男が言う。

「いつか、私はこんなことを本で読んだことがありますねえ」何を言いだすのだろうと、私はちよつと緊張する。

「この幕の内というのは、日本の食の良いところがつまった食事だそうですね。いろいろなとりあわせで、季節感がある。だから外国から来た方には、必ず幕の内弁当をだすのだと、だれだったかな、そんなことを書いていましたね」

私の緊張がふつとゆるむ。それどころか、私の右隣に直角に座る彼に向けてニヤリと笑う。お氣遣い、ありがとうございませう。それでも彼は大まじめに、

最後まで話す。私など見えないような顔でまっ正面をむいて話す。

彼が話し終えると、また沈黙がある。

今度は私のなめ向かいの同世代の男が、私のほうを見て、にこにこしながら言う。

「いやあ、矢張さん。そういうの、言ってもらえるうちが花だよ。ボクなんかさあ、女房にも会社でもまったく相手にされないんだから」

彼の横のあの五十代女性が彼に向かつて言う。

「私もそう言ったんだけど、矢張さんはダメなの。純粹なのよ」 「そうかあ」

大変、お騒がせいたしております。が、私は、にこにこしながら何も言わない。

日本の食の美点がつまった幕の内弁当を食べ終わるころには、ぎくしゅしながらも、正常の

空気に近くなつた。

理事会の最後に、理事会の機構や任期の問題が話し合われた。私の意見に対して、あの男は「今、矢張さんがおっしゃったように」と、いつものようにやっている。シャアシャアとしている。私が言ったこと、この人、よく分かっちゃいないんじゃないかしら。

が、しかし。結果がどうであっても、言うべきことは、言わなきゃね。そう思いながら、私はひとりでエレベーターに乗る。Sさんとは、自然と時差帰宅をしている。そのうち、またSさんと平気な顔をして乗るからな。それをやって、セクハラ完全退治になるんだ。

私はモモタローみたいに胸をはる。あんまりそっくり返ると後ろにひっくり返るよ、と自分をひやかしながら、私は気分がいい。

「常識」「常識」 ていうけれど……

東京都江戸川区●米山眞梨子(31歳)

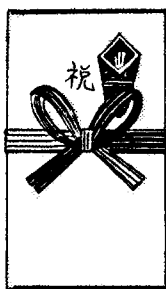
妹が結婚した。私と妹は六つ違いの二人姉妹。

結婚式、披露宴に、私、夫と二人の子ども(二歳と四歳)が招かれ、大阪の会場まで一家総出で出かけることになった。子どもも幼稚園に通っているし、夫も仕事があるからのんびりもできない。かといって幼い子連れで日帰りは無理な距離だし、一泊ホテルをとることにした。これが両親のげきりんにふれた。いわく、
「姉だったら、何日も前から来て、妹の結婚を祝ってやるのが常識というもんだ」

ちなみに先日、妹と彼は我が家に泊まり、おおいに飲み、食べ、話した。

そんなこと言われても……と
思いつつも、
「じゃ、都合をつけたから早めに行こうか」
と申し出ると、

「来れないなら無理しなくていい。ただ、長女としてそんなことも考えないのは常識がない、と言いたかったのだ」と言う。



姉のくせに和服も着ないなんて、とも言われた。こっちは幼児を二人抱えていて、しかも遠方から出かけて行くというのに。結局、ホテルに一泊し、洋服で参列したのだが、今度は結婚式

の翌日のこと。いわく、
「お祝いは包んでこなかったのか?」

私は妹の希望を聞き、ミシンを買って新居に送る手はずになっていた。

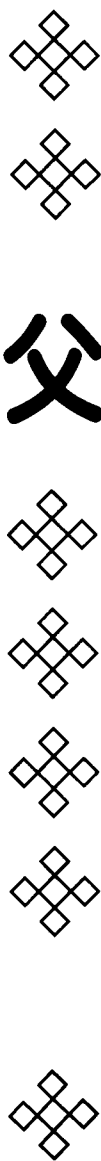
「お祝いを新居に送ったんだけど」

「それでも、別に包んでくるのが常識だ。あの子の友だちの○さんは電気スタンドをあげてくれて、当日も三万円包んできてくれた、××さんは……」

何はともあれ結婚式だ。姉として祝ってやりたい。が、「常識」を勉強しなければ実の妹の結婚も祝えないのだろうか。親がいろいろ言うてくることにうんざりし、妹の結婚そのものがすんでしまった。

でも、やっぱりこのくらいが常識で、私には常識がないということなのか……。

(元・梅村 菫)



暗い絵

匿名

初めて手にした二三号を読んで、うーん面白い、ひとつ私も、と思ったホヤホヤ読者は、しかし次号の特集テーマ「父」を見て凍り付いてしまった。
以来二カ月、一字も書けないまま私は二三号を待っていた。他人の父親って、いったいどんなだろう。

予想はしていたけれど、なんだほとんど「いい父親」ばかりではないか。藤沢照子さんの書き出しに、「何もここまで過激に書かなくとも」と思われるのは分かってはいるけれど、こう言わずにはいら

れない人間だっているわよね」と共感している自分を発見する。

私の父はアルコール依存症であった。

正確には、と思う、と付け加えなくてはならない。いまだ専門家の診断を仰いだことはないからである。しかし、毎晩酒を飲む。酔うとからむ。からんで怒る。暴力はめったにふるわないが、いわゆるヴァーバル・アビューズ——言葉による虐待——というやつをやる。七時には晩酌を始め、酔い始めると九時ごろから怒りだし、つぶれるまで——だいたい午前二時ごろであったが、その間、家族に眠ることを許さない。「おれの話を開け、大事なことだ」と教え諭しているつもりで、家族を罵倒し続ける。無視して寝ると、布団をはがされ、ひきずり出される。これが最盛期には、週に平均四回あった。

私が中学生のころである。

幼いときは、自分が悪くてしかられているのだと思っていたが、中学生ともなれば、こちらに理がある場合だってある。当時優等生稼業をやっていた私は、しばしば理路整然と反論したものだ、それは火に油を注いで、伝家の宝刀「養ってやっているんだから、絶対服従だ」が抜かれる結果となる。

そのころから私は、アルコール依存症に関する専門書を読みあさった。しかし、一番知りたいこと、つまりどうやって父を医者の前まで連れて行くか、はどこにも書いていない。本には「患者の過半数は、内心酒をやめたいと思っている」とあったが、父は酒が大好きで飲むのである。やめたいなんてこれっぽっちも思っていない少数派にはどう対処するのか、



どこにも指針はなかった。さらに、父は自分の飲酒に問題があることなど、まったく認めないのだ。保健婦も看護婦も教師も、「それは病気だから、一度お医者さまに見せて」と言うだけで、誰もその方法を知らない。酔いつぶれた父をタクシーに乗せてアル中専門病院に乗りつけようか、それとも休日に日当を払って専門医に往診を頼もうか、とまで考えたが、本人が協力しない限り問診すらできないのだ。

加えて、父の酒癖は遺伝である。それ

もはっきりとした隔世遺伝である。私の曾祖父にあたる人が、やはり酔っては怒って当たりちらすので、家族は夜な夜な近所の親類宅へ逃げ込んでいたという。祖父も大変な酒飲みだが、泣き上戸であった。私のいとこたちにも泣き上戸が多い。父の異母弟にあたる叔父が、若いころはそうひどい酔い方もしなかったのに、中年になって父そっくりの酒乱になったと聞いたとき、私は専門家に助けを求める考えを捨てた。(二年ほど前のことだが、精神科専門誌に「アルコール依存症は放っておけばよい。二十年くらいたてば死んでるか治ってるかどっちかだ」という趣旨の論文をみつけたときには、一瞬、頭の中が白熱した。その二十年の間に空費される家族の時間とエネルギーはどうしてくれるのだ)

父が酒を飲むのは、第一に、酒が好きだからである。だれかが酒の悪口を言おうものなら、テーブルが引つ繰り返され、酒瓶(ただし空瓶に限る)が飛ぶ。しかし、小心でストレスに耐えられないから、という点も理由の第二として認めなければ

ばならない。

本当は弱い性格であるゆえに、家族を支配することで自分の強さを確認しようとする。家族は、養い手である自分に感謝し、自分を賞賛しなくてはならない、という考えだから、家族が自分以外のものに注目することを許さない。母が、私と弟の学校のPTA役員を引き受けた年には、酔うたびに「やめろ」を連発した。父親に言われて始めた剣道が面白くなった弟は、熱心に練習するようになるやめさせられた。なんとか怒られないようにしよう、どうせ怒られるにしても、せめて自分はそのネタを提供しないようにしよう、と努力していた私は、何事も夢中にならないよう自主規制した。趣味もクラブ活動も、ほどほどにシラけておく。もちろん恋愛はひたすら隠す。子どもから熱中するものを取り上げる口実は、当然「もっと勉強しろ」であったが、私が本当に学問を志して勉強を始めてからは「高校やめろ」と言われるようになった。(もう外に取り上げるものは残っていないなかったのである)

ベック＝ゲルンスハイム／香川訳 出生率はなぜ下ったか

ドイツの場合 男女平等の上に築く
家族の未来を展望。3090円＋310

現代女性作家研究会 編 現代イギリス女性作家を読む

1. フェイ・ウェルドン／2. アニタ・ブルックナー／3. P. D. ジェイムズ／4. バーニス・ルーベンス／5. アンジェラ・カーター
46判上製カバー装・内容見本呈・隔月刊
全5巻 ①・②・③・④ 2369円＋260

国際女性学会 編

〈女と仕事〉の本 1・2・3

1945～1990年までに出版の本の目録
全3巻完結 ①②各2060円 ③2472円

E. ショーター／池上・太田 訳 女の体の歴史

イヴ以来の重荷から解放されるまでの女の体のドラマ。3296円＋310

伊奈正人・鮎京正訓 他 編 性というつくりごと

遺伝子から思想まで 女と男の関係や制度を革新する。2884円＋310

L. ストーン／北本正章 訳 家族・性・結婚の社会史

1500年～1800年のイギリス 結婚、夫婦、親子の関係史。5356円＋310

上村くにこ・西川祐子 編 フランス文学/男と女と

フランス文学の面白さ楽しさを女性の目で読みなおす。2060円＋260

*定価は消費税込みです。



勁草書房

東京都文京区後楽 2-23-15
☎ 3814-6861 (個) 東京5-175253

父のことを、弱い性格なのに強いストレスのかかる仕事をしている気の毒な人と分析するのはたやすい。同情するのもたやすい。しかし、許すのは難しい。なにしろ自分の仕事だけでなく、子どものスケジュールですら父にはプレッシャーと感じられるのだからたまらない。私は、大学入試も結婚式も、徹夜明けで臨んだ。大学生になっても就職しても、家を出なかったのは、「自分のシェアはちゃんと負担しないと申し訳ない」という思いからであった。母と私と弟と、三人そろっていれば、父のばとうのセリフを受け止めるのも三分の一、交替でトイレにも行けるし、父がもうろうとしてくれれば一人くらいうたた寝していても気づかれない。

これが二人になり、一人になったら——。が、手術をして内臓をいくつか失った体になっても飲み続ける父に、私はもう金輪際私の時間を無駄遣いしないのだと決意した。弟の方が先に家を出ていた。一人残る母はあわれだが、もともと彼女を選んで人だ。

テレビのホームドラマの家族だらんの光景をかいま見て、「あれは現実にはない理想の家庭、絵にかいたモチ、だからテレビになるんだ」と信じていた子どもであった私は、夫婦げんかで物がとぶドラマを見ては「あんなこと本当はだれもしないんだ、テレビだから超デフォルメしてるんだ」と信じていた子どもであった男と結婚した。幸いなことに、彼の体

はアルコールを受けつけない。そのDNAに期待して、私は子どもを産んだ。今は、眠たければ子どもと一緒に七時からでも寝てしまえ、大変幸福な生活である。

「実家の父は歯科医です」と言うと、突然まわりの空気が変わる。私を見る目が変わってしまうのだ。かなり親しくしていたと思う人でさえである。

「じゃあ、お金持ちなのね」

「何不自由なく育ってきたお嬢さんなの

歯科医の受賞

東京都三鷹市
豊城 智子(32歳)

ね」と言われることがほとんどである。

確かに、食べるものがなくて困ったというような思いはしていないが、大金持ちだったことは一度もない。

世間で言われている歯医者イメージと父とのギャップにあせんとするばかりである。

父はあきれるほど正直に、四十年以上も歯医者を続けてきた。いわゆる町医者なのだ。地域の医療ばかりに貢献してきた。我が家の患者さんには、老人・子供といったタイプが多い。実際には手ばかり掛かって余り利益には結び付かない。ところが父は、耳の遠いおばあちゃんにまで、懇切丁寧に病因を説明したりしている。歯の模型まで出してきて、「ここがエナメル質で……」なんてやっているのである。後の患者さんが待つていようといまいと彼のペースは変わらない。

十二月も押し迫ったある日曜日、夜の十時半に一本の電話が掛かった。現在診療所に居候している私がそれに出てしまった。歯が痛くて眠れないという。しかも常連サンではない。まったく初めての患

者さんである。

私はこの電話を自宅につないでいいものかどうかしばし悩んだ。

現在、医療のたらい回しが声高に批判されているが、それも時と場合によりけりである。医者だって人間である。もちろん生命に関わるようなときは、医療関係者は拒否してはいけないと思う。しかし大げさな病状を言って診てもらおうとする患者が沢山いるのも事実なのである。

うそだと思ったら、休日診療の救急病院を見てほしい。ピンピンしているお父さんなんか、七度や八度の熱で診てもらっていたりする。月曜日に悪くなると、会社を休まなければならないからというのだ。

また、世間では週休二日制がだいぶ定着してきたが、医者は大抵土曜日も半日は診療している。木曜日午後休診が多いのは、この日に学会やら会議が集中するせいだ、実際には休めないことが多い。父にとっては貴重な週に一回の休みの夜である。くつろいでいるに決まっているではないか。六十歳を越した父にとっ



て体力的にも夜中の急患はつらいに違いない。

散々迷った末、自宅に電話を回した。やはり決定権は父にあると思ったからである。傍で電話をきいていた夫は、

「ばかだなあ。そんな非常識なの断わればいいんだよ」と言った。それもそうである。私だって、父は来ないと思った。「痛み止めを飲んで、明日診療時間内に来なさい」と言って断わったって医療の良識に反するとは思えない。

ところが父は診療所によつてきた。びっくりする私に、

「だって痛いって言っているのだからしょ



うがないだろう」と言う。

真っ暗な診療室と、待合室に明かりをともし、暖房を付けたところにその患者さんはやってきた。もう十一時を回っている。

ひどい虫歯を放っておいたために、中が腐り、神経にまで達していた。口もきけない。奥さんがついてきて説明をしているのだがその横でウンウンうなっているだけである。

かなり面倒な治療を終えたときには夜中の十二時を回っていた。口もきけなかったその人は「先生有り難うございました」とひと言だけ言って帰った。

「お疲れ様でした」とねぎらう私たちに、「こういう患者さんは続かないんだよな」と寂しく笑って、父は自宅に戻った。

痛いときだけ駆け込んできて、後は近くの通いやすい歯医者に行くことが多いのだそう。そんなばかなことであるのだろうか。私たち夫婦は憤慨しながら眠りに就いた。

幸い、その患者さんは良識のある人で翌日も洗浄にきた。

「昨夜は痛みがまったくなくて、ぐっすり眠れました。本当に有り難うございました」と感謝している。父はそれでOKなのである。にこにこ笑っている。私だったら恩着せがましいことの二つや二つ絶対言ってしまう。

父はまさにかめである。一つのことをこつこつとじっくりやっていく。母や私が見ていると、歯がゆくてジリジリしてしまうことが多い。

母と私は性格が大変似ている。万事業領がいい。何をやらせても取りあえず平均点をとれる。何でもそつなくやるのだがその実何もできないのである。これぞ

うさぎタイプである。

歯医者という商売、正直にやっていればそれほどうまく回るものではない。例えば洗浄という技術がある。抜歯をした後や、神経を取った後などにしなければならぬのだが、これが医療点数で言うところと十二点。社会保険で家族だと三割の負担だから、三十六円。それを患者さんが一円玉を出すのは面倒だろうからと三十五円しか取らない。いまだき歯医者に子供のお菓子だって買えやしない。

こんな診療をしているから、決してお金持ちにはなれない。父はまさに「医は仁術である」を体で示してきた。医者としては立派だったと思うが、経営者としては失敗である。

父の性格では、助手や衛生士も上手に使いこなすことができない。父が働き盛りだったころは、日に八十人の患者をこなしていたので、人を使ったこともあるのだが、かえって気を遣って疲れてしまいうらしい。今では母と二人きりの三ちゃん歯医者である。父ちゃんと母ちゃん、

そしてたまーに顔を出す姉ちゃんの私ではある。

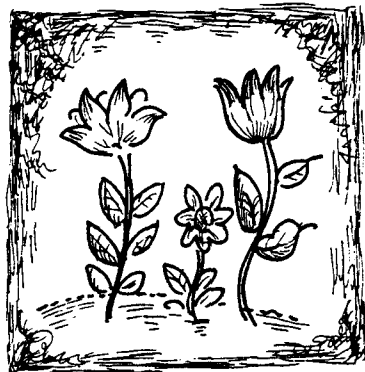
高校時代の同級生が歯医者になった。風の便りでは三十になるやならずの若造が、

「歯医者ってもうかるぜー」と言っていて、素晴らしいデンタルオフィスで、ブランド物の白衣を着せた女の子を何人もべらせて診療しているらしい。外車を何台も乗り回し、休暇は必ず海外で過ごすという。

何も自分の父親を立派な医者だと褒めたたえるつもりはないが、こんな歯医者もいれば父のような歯医者もいるのである。そんな父にこの秋、文部大臣賞が贈られた。歯医者なら厚生大臣賞だと思われるなられるだろうが、文部なのである。

父は三十年以上、校医を続けてきた。校医というのは割にあわない仕事である。もちろん報酬は出るのだが、家で診療していたほうがずっと率がいい。訳のわからない小学生が何百人もわあわあ言っている中で検診をしても一つもいいことはない。おまけに四月五月は何度も臨時休

診にして出掛ける訳だから、患者さんにはかなり迷惑を掛ける。休みを知らずに遠くから来てくれた患者さんには、いつ



さんが離れていってしまうことだってあった。

検診表を持ってくるのは小学生ばかり。待合室中駆け回って、ソファでトランポリンをして、雑誌をビリビリ破いて、ようやく虫歯の治療をして帰るのである。これじゃまったく割にあわない。

ある本を読んでいた「校医というものは地域のちっぽけな名声が欲しい人がなっているに決まっている」と書いてあってあせんとしたことがある。皆こんな仕事は引き受けてくれない。人のいい父は断わりきれなくて三十年以上も続けてきただけである。

そんな父に、今回の受賞が知らされた。地味な父の人生に、こんなに晴れがましい舞台が用意されていたとは、誰もが考えていなかった。世間も捨てたものではない。やっぱり見てくれている人はちゃんといるのである。

受賞の日、父は精一杯おしゃれをして、長年支えてきた母と奈良まで出掛けた。あんなに輝いた父の笑顔は初めてだった。

も母が謝っているのである。その内、「あの先生のところはいつもお休みだから」なんて言われて、いつのまにか患者

(元・山田京子)

サーブレシーブ

子供の寝る時間

仙台市宮城野区 西塔美恵子

二三四号の「子育て会議」を、わくわくしながら読み始めた。子育てまったくなかの私にとって、「子供の寝る時間」については、魔の時間であり、ひとつ間違えると首を絞めてしまいかねないほど悩んでいたから、期待していた。

本題は、まだかまだかと読み進むうち、おお、やっと本題に入ったぞ。そうか、そうか、やっぱりいるわけね、寝付きのすこぶる悪い子供って。それではどうしているのか一番知りたいことが、あれっ。あれ、ない。

のどもとすぎて熱さを忘れてしまったような話じゃ実感がないようー！

我が家には二歳半と九カ月の息子がいる。二人とも寝付きがすこぶる悪く、一時間か

かるのはあたりまえ、私はいらいらの絶頂を越えると平手打ちをしてしまい、ますます彼らは寝なくなる。しまいには泣いてひきつけまで起こすことがある。

雨でもふらないかぎり外へ連れ出すのはもちろんのこと、寝る前の本、歌も当然のごとくなのだが。昼寝をさせなきゃ、晩の食事はいつになってもできやしないほどぐずる。

どうすればいいの？ どなたかおしえてください。そのうち寝るようになるなんていう、わいふの会議の続きじゃなく。

それでも「子育て会議」が好き

大阪府枚方市 荻野菜穂子（28歳）

二三四号、サーブレシーブの高松恭子さんへ。

鋭いご指摘です。「なるほど」と思いました。子持ちの私は何の疑問も感ずること

なく愛読していましたが、ご意見ももっともだと思います。

しかし、私は「子育て会議」を続けてほしいのです。

どんな母親でも、自分の子供のことで頭が一杯だと思います。このコーナーは私にとって、自分の場合と照らし合わせて、子育てを冷静に見つめ、頭を冷やす良い機会なのです。井戸端会議や育児雑誌では、ここまでつきつめた本音は出てきません。

ですがどんなに公平になろうと思っても、自分の子供をひいき目に見てしまう悲しい母性が、どうしても見え隠れしてしまう。

そこで高松さんのような方に、このコーナーを読んだうえで、客観的なご意見を聞かせていただきたいと思うのです。

幸いなことに、子育てには興味がありとのこと。また「子供は社会全体で育てていくという意識が必要」という、母親にとってはとてもありがたい考えをお持ちでいらっしゃる。

育児は避けては
通れない

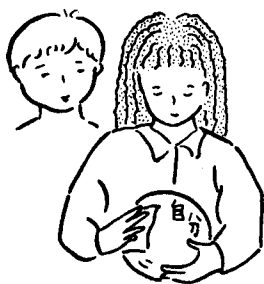
東京都江戸川区
米山眞梨子（31歳）

私も、座談会形式で子育てを語り合うというのには、どうしても井戸端会議的なものになりがちだという気がします。自分の子育ての経験から話す以上、話が「自分の子どものことで頭がいっぱい」のようになるのも当然です。他の人の子育ての事例を知ることが無駄とは思いませんが、どうせ個人差が大きいのだし、結局はある種の慰めになるだけでしょう。

その点、同じ二三四号の「子育てはつら

今後とも子育て会議を続けるなら、もう少し客観的な資料なども交えた（例えば何かのアンケート結果について意見を言い合うとかいう）ものの方がいいのではないかと
思います。

子どもを持たない人を排除するつもりは
ありませんが、女性が生きていく上で、子
育ての話題を避けて通るのは難しいのが現
実です。子育て中の主婦が子育てにだけか
まけるのには賛成しかねますし、私自身、
自分を磨くこと、自分の将来のこと、世の
中の色々な矛盾や問題を知り、それらにつ



けれども考えてみると、子どもを通して
見えてくることもありますし、自分の生き
方を考えるにしても、子どもや夫を含めた
周りの人々との関係があってこそ、自分
磨く価値もあるような気がしてきました。
そういう意味で、「どうして急に育児に取
り組まれるようになったのか」という疑問
はちょっと当たらないのではないかと感
じました。

共感します

横浜市緑区 板山美枝子

二三四号の「子育てはつらい」と「たちねの母となれども」を読んで、まるで数年前の私そのものだった。

妊娠、出産にはそれなりの感動もあったが、そのあとに延々と果てしなく続く育児



には参った。明けても暮れてもオムツの洗濯と授乳……。引越してきたばかりで、まだ近所に友達もいないし、孤軍奮闘の日々……。これが育児ノイローゼというものなのかな、と思う日々が続いたが、ある日突然、乳房が激しく痛み出した。

本で読んで知った桶谷式の相談所に電話して、早速駆けつけると、今の食生活を厳しくしたしめられて、赤ん坊は古小帯の手術を言い渡された。「たちねの母」の岩崎さんと同じようにオッパイとの格闘の日々が続いた。昼夜変わりなく一時間半ごとの授乳と食事制限……。これを破ると、私のオッパイはたちまち乳腺炎にゅうせんえんを起こすのだっ

た。

育児ノイローゼ気味だったところに食事制限のストレスも加わって、ついに私は爆発した。息子が一歳半のころ、私は初めて手をあげた。一度たいてしまうと、次からは当たり前のように手が出てしまう。次第に全身の血が煮えたぎるような怒りを、たびたび息子にぶつけるようになっていった。

今現在は二歳十カ月の第二子「女兒」がいるが、この子に対しては、本気で怒りを感じたことはあまりないし、たたくこともあまりない。下の子は手のかからない子で、育児が楽だし、育児仲間もいるし、よいローテーションで仕事もしている。子育ての良いい条件に恵まれて、ストレスどころか、育児の楽しさをたっぷり味わっている。上の子のときは育児に熱心になり過ぎて、自分を犠牲にしていたが、今は子供を多少犠牲にしても、自分のやりたいことをやるようにしている。手をかけすぎた長男は、依頼心が強くて甘えん坊なのに比べて、ほったらかしにしていた下の子は、しっかり者で気立ても良い。

夫婦の愛って何？

東京都 匿名

二三四号のわいわいがやがや「夫婦で愛し合ってますか？」の石井さんの文を読んで、「やっぱり、そうだよな」と大きくうなずいてしまった。

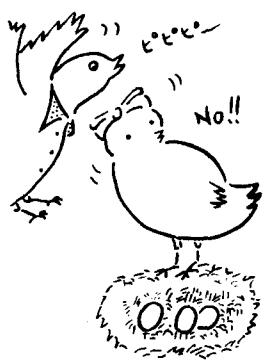
私たちも、現在一歳八カ月になる下の子を妊娠してからノンセックス夫婦になり、もう手を握ることもない。夫はそれが不満のようだが、私はどうしても譲れない。なぜ譲れないのか自分でも不思議なのだが、絶対、我慢してまでつき合おうとは思わない。

自分で言うのも変だが、私たちは仲の良い夫婦だと思う。たいがいの家庭がそうであるように、一日のうちで顔を合わせる時間は少ないが、そのわずかな時間は、世間話だけにとどまらず、心の状態を感じたことなども素直にしゃべれて、充実した会話をしている。夫を嫌いではない。心も冷えていない。だから、自分でもどうして嫌な

のかわからない。

夫が文句を言う、「そんなことしなくたって、こうして仲が良いんだからいいじゃない。私はこれで満足よ」と言って逃げる。

そう、それが私の本心でもある。三十二歳の健康な男性がそれですまないのはわかるし、心を許せる友達に相談すると、「我慢して夫につき合うべき」という人も多い。だけど「犠牲があつての幸せは成り立たな



いのだ」などとへ理屈をつけて、その解答には納得しない。でも今は、夫が犠牲になっているのかな。

そう思いながらも、この問題からはいつも逃げていて、考えないようにして、「夫がもう求めてこなければいいな」（もう最近はあきらめてるみたいだけど）と心の隅

で折りつつ、日々を送っている。そして、セックスレス時代の記事や、石井さんのような投稿があると、「そうそう」とちよつと安心するものの、「性の不一致は、結構、重大問題かも」という危機も予感している。

年賀欠礼で別居

東京都 匿名

年賀欠礼の葉書きが原因で、十六年間住んだ親の家を出ることになろうとは、夢にも思わなかった。

昨秋、私の父が亡くなり、夫婦連名で父〇〇〇が永眠いたしましたと印刷して出したのが、転居先不明で戻った一枚の葉書きをしゅうとめが見て、怒り出したのである。初めは、息子（私の夫）に怒りをぶつけ、夫は自分がしたことだと謝り、それで済んだと思つたらしい。

ところが後日、しゅうとめは「Sさん（嫁の私）からお父さんに謝罪しなさい」と言いに来た。私は少しも悪いとは思わな

かったが、頭を下げて怒りが鎮まるならば、と謝りに言った。

「K（夫）にとって父と呼べるのは、ボクだけです」「あれでは、お父さんは殺されたようなものよ」「Kは、いつ養子に行ったのだろうと親戚に笑われる」「四十過ぎて、こんな文を考えるのは非常識さわるる」「重大な過失だ」と私一人、夫の両親からクソミソに総攻撃を受けたのである。その場で私は、今まで張っていた綱がブツンと切れたような気がした。

そして嫁に来て初めて、「この家を出たい」と夫に言った。夫も考え方の違う親のそばにいるより、自分の家族を選び同意した。

「あの葉書きとても良かったわ。どなたが亡くなられたのかよく分かった」とほめてくれた友人もいる。同じ文章を読んでも、いろんな解釈をする人がいるということ、考え方も価値観も人それぞれ違うんだということが分かる夫の両親だったら、私たちも家を出るチャンスに恵まれなかったかも知れない。

（え・奥島千恵子）

総合学級

千葉県八日市場市 青木 利子

四月一日、辞令を手にして転任先の第一中学校へあいさつに行った。若い女の先生の案内で玄関わきの応接室へ通された。応接室の壁面には歴代の校長先生の写真がかざられている。その中で緊張した気持ちでしばらく待っていると、林教頭先生が元気のよい声で、

「やあ、お待たせしました」と、入ってこられた。私は立ちあがり、「こちらの学校へお世話になります青木です。本日は辞令を持ってまいりました。よろしく願います」

ていねいにあいさつをして辞令をお渡しした。

「青木先生には総合学級の担任をやってもらいましょう」

総合学級というのは精薄児の学級のことである。教科、生活の区別なく、すべての教育活動を総合して指導するという意図でつけた学級名だ。

私は以前に林教頭先生と同じ中学校で三年間一緒に働いた気安さもあったので、即座に、

「困ります。私は前任校の第一中学校で、精薄児の学級の副担任をしていましたが、私には力がなくて、とても受け持てないことがよく分かりました。どなたかほかの先生にしてください」

とおことわりをした。

「だって、もうそう決まっちゃったのだから仕方がないだろう。誰も受け持つ人がいなくて困っているんだ。不満なら、

今、職員室で新年度の打ち合わせをしているから、そこへ行って言えばいい」

私は、新しい学校で気分一新またがんばろうと勇んできたのに、このことですっかりしよげてしまい、涙がでそうになってしまった。私は特殊学級の免許状があるわけではなし、私が受け持たなければならないという理由もない。誰も受け持つ人がいないからと、まだ何も発言できない新任者にあててしまい、意見があるなら、職員会議をしているところで言えばいい、と言われたって、はじめてきた学校で言えるわけがない。ずい分冷たい学校だと、第一印象をすっかり悪くしてしまった。

家へかえってから夫にもそのことを

話し、「あんな不人情な学校へ行くのはいやだ」と、あたりちらしていた。私は、決められたことを決められた通りに指導する教科書先生なのだ。特殊学級の担任には、特技があり、応用力のある先生が向くようだ。なんとか自分に有利のように一人で考えていたが、解決の方法はなにもままに翌日出動した。

こんどは信田校長先生が私のそばへきて、

「青木先生、たいへんでしょうが特殊学級をもってもらえますか」ときいた。

「仕方がありません。この一年間だけやります」

と答えた。不平不満はたくさんあっても、受け持つように決まってしまった以上は、もう文句はいうまい。そして一年すぎたときには、せひはずしてもらおう。私はぐずぐず考えながらも案外あきらめがよい方なのだ。

第一印象

四月五日。はじめて私が受け持つ学級



に行った。今年はどんな先生に受け持たれるのかと、みんな不安げに黙って席にいていた。私はできるだけにこやかな表情で、

「私が、こんどこの学級を受け持つことになった青木です。この一年みんなで仲よくやっていきましょう」

と話し、一人ずつの顔をみまわした。三年生の男子が一人、女子が一人。二年生

は男子二人、女子四人の合計八人だった。一年生はまだ入学していなかった。みんな明るい顔をしていて、精薄らしいぼんやりした表情の生徒はいないので安心をした。紙を配り、それに氏名、住所、家の職業、家族のようすなど書くように指示をしたら、全員が書いて提出をし、字の書けることが確認できた。

四月十日。一年生の男子が二人入学した。これで十人全員がそろった。

入学したばかりの一年生に自己紹介をさせる。

森茂夫「僕は長谷浜からくる森茂夫です。よろしくおねがいします」

明るく、はきはきとして目も輝いている。外見では特殊学級へはいるような感じではない。二年生の竹之助、三郎、富美子、幸子と同じ小学校の出身で、小学校時代も特殊学級で一緒に勉強していたので知りすぎて慣れっこになっているようだ。教室にはいつてきたときからもう二年生と話をしていた。

大木秋男「名前は大木秋男。住んでいる所は、大寺八日市場市です」

住所は市から先に言うというのかわからず地区名から言って平気な顔をしている。鼻汁をたらし、動く態度などから精薄らしい感じがする。それでも発言は相手の気持ちも考えずに生意気なことを言



うことがある。

「このクラスの会長は三年生の林安次君です。みんなよく言うことをきくようにしましょう」

と私が言う、すかさず、

「この顔で会長がつとまるかな。会長をやっても一日くらいしかもつまない」

はじめて会った三年生に対して平気でないことを言う。それでいて入学式の日には、三キロメートルくらい離れた学校へ向かって一人で自転車を出たが、中学校の場所がわからず、学生服を着た学生のとをついていったら、中学校とは方向の違う高等学校へ着いてしまったという失敗もしている。

これから、こういういろいろな能力をもった十人ときあっていくわけである。

受け持って二ヵ月

今日も生徒をおこてしまった。おこったからといって、生徒はちつともよくならないが、あまりにも私のいうことをきかない。毎日の勤務に張り合いがなく、教員を二十年もやっても、今年くらいいいやな思いで学校へいくときはなかったように思う。毎日、今日も学校へ行かなくてはならない。どこか体の具合でも悪くならないか。休みたい。夏休みまであと何日だろう。カレンダーの日付を一

日ずつ消しては、休みになる日を数えているような状態である。

こういう気持ちで勤務している教員に接している生徒たちはかわいそうだとは思うけど、私としてもどうしようもない。総合学級の担任をして、つくづく自分の力のなさを情けなく思う。毎日、生徒にふりまわされて気ばかりあせっても、生徒はちつとも動かない。一日中遊ばせておけば生徒たちは機嫌はよいが、それでは私の良心がゆるさない。何か学習をしようとすれば、さわりだり、邪魔をしたり、やる気がなかったりで、私の気持ちをいらだたせる。私も気持ちの落ちついているときは「普通学級にいられない生徒だから、この学級にいるのだ。親切によく面倒をみてやらなくてはいけない」と、自分の心に言いかけせるのだが、いざ生徒にむかうと思うようにはいかない。このごろ、家へ帰っても気が晴れず、明るい気持ちになれない。息子たちにあたることがあるのだろう。息子たちが「おかあさん、このごろ笑い顔をしないね」という。とにかく、表面は平静をよ

そおっていても、こういう精神的苦しみを持って、誰かに訴えたい。総合学級の担任は学校に一人しかないの、お互いに慰めあったり、元気をつけあう相手がいない。

数学の時間

私は学級担任だから、生活全般についての指導、学級の管理などはもちろんしなくてはならないが、教科としては数学を教えることになった。このクラスの生徒たちは、自分に対して必要以上に劣等感をもっている。これを解消するために、一字でも多く読み書きができ、一題でも多く計算ができたらいい。そうなれば、いくらでも自分に自信が持て、人前で遠慮がちにならなくなるのではないだろうか。こんな考えから私は、数学の時間には時計の読み方、物の値段、物の重さなど、実用的なことから、頭の働きのよくするために計算練習をさせるように指導計画をたてた。

さて、いざ指導しようとなると、各人がどのくらいの力があるのか見当がつか

ない。一人ずつ面倒をみながらたしかめていった。

大木秋男の力。十までの数字が読めない。物と数が結びつかない。だから、一から十までを指を折りながら数えさせようとしても、指の折り方と口で言う数が合わず、十本の指を折りおわっても数詞は七までしかいかない。「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、く、じゅう」と指を折りながら教えていねいに教えた。それをなんどもなんども、練習をさせて、これならもう覚えたらうと思うころ、「もう覚えたでしょう。それでは『く』で指を折るのをやめてみなさい」と言ってようすをみていると、「く」を通りこして十本指を折ってしまう。なんどもおなじことをくりかえしてから、「先生、おれのに『く』はないよ」と言う。

「それなら先生といっしょに言いながら、親指から順に指を折りながらかぞえてみよう」とはじめたら、秋男は「九」のところは「きゅう」と発音している。なるほどこれでは「く」がないというわけだ。

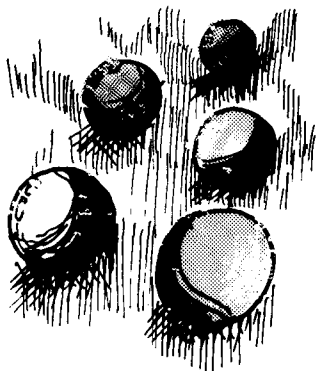


なん日かたってから、ビー玉をつかって数の練習をした。十個おいて「ひとつ、ふたつ……」という教え方で教えたが彼のおぼえているのは、「いつつ」の次が「このつ」「とお」となるのでビー玉が三個あまってしまふ。はじめ私は、秋男がふざけていると思ったがそうではなく、いままでこのように覚えてしまったのだ。彼には「いち」と「ひとつ」、「に」と「ふたつ」が同じということがわからない。私は、こういうことは小さいときに自然にいつの間にか覚えてしまひ、何の不思議も感じなかったが、この子たちにはひとつずつ教えなければなら

ないということを改めて知った。数字を読むにも「四」の「し」と「七」の「しち」をじきに間違ったり、形では「6」と「9」の区別がむずかしい。

時計の読み方の学習では「じゅういち」は「11」と書く教え、よく練習をさせる。次は「じゅうに」を書かせようとすると、口で「じゅうに」といいながら「102」と書いてしまう。

次はおかねの学習である。硬貨の模型をつかって、一円、五円、十円の区別をつけさせる。十円が五個で五十円と教える。一円が五個で五円、五円玉一個も五円と同じであること。一円玉七個で、七円はわかるが、五円玉一個と一円玉三個が七円ということは、一日の指導ではのみこませることができなかった。数日後、また復習をしてどうにかわからせることができたと思った。しかし、五十円硬貨一個と、十円硬貨を三個おいて、これでいくらだろうか、ときくと秋男は自信ありげに「これは『ごじゅう、さんじゅうえん』だよ」と答える。お金のことは知っている生徒が多いが、秋男は今まで店で



買い物をしたことがなかったのだろうか。秋男は特にわからないことが多いが、ほかの生徒も小学校二年か三年くらいの力で、能力は一人ずつみんな違っている。これをどのように指導したらよいか迷ってしまう。もちろん普通学級のように一斉指導はできない。そこで各段階のプリントを用意し、自分にできそうなものを選んで学習をさせ、わからないところを個々に指導しようとした。

しかし、このプリントの選び方をみると、易しく簡単にできそうなものを選び、少しでも考えようなのは、はじめから、自分にはできないものとあき

らめて手を出さない。これではちっとも進歩がないように思われてきた。自分では一歩でも前進しようという積極的態度はなく、いつも安易な方ばかり選んでしまう。この生徒たちとこのままだっていいのだろうか。私は先生らしく何か指導しようと思うほどあせりがでてきて、生徒たちとぶつかることが多くなってきた。一時間ごとに教えたことが何かしら効果があったり、あるいは、これだけ教えることができたという満足感がないと、どうしようもなく、いつもいらいらと腹立たしい気持ちだ。

しかし、この生徒たちにすぐにその効果をのぞむことは無理なことだ。あせらず一カ月後、あるいは一年後にでも、一字おぼえた、こんな計算ができた、こういうことをやるようになったとか、長い目で考えていいのではないか。普通学級の生徒だって、毎日何かしら身につけたかといえば、そうではないときもあるだろう。そんなふうのにん気に考えようと思うのだけど、一日中遊ばせてすごしたような気がして気がひけてしまうことも

ある。特殊学級の担任は「のんき」「根気」が必要であると言われたことを思い出す。

困ったこと

この学級の生徒たちは、自分がこの学級にすることが、はずかしくて、みっともなく、人に知られたくない。ことに下級生にはみられたくない。だから教室から外へ出るときも、くもりガラス戸を少しあけて外のようにすをうかがい、だれの姿も見えないときに、さっと出てこの学級なんか知らないという顔をしている。まるで犯罪者がようすをうかがっているようで、私はあわれになってしまう。

「みんなは悪いことをしているわけではないんだから、そんなにこそこしていないで、堂々と胸をはって歩きなさい」と言うと、

「先生はおれたちのように総合学級で勉強したことがないから、この気持ちから知らないだろう。近所の下級生に知られたらみっともない。近所じゅうにわかっでしまっ」

こういう考えだから、全校朝会に参加させるのもひと苦労だ。女子は世話がなぐよく参加する。

この組の男子生徒は言う。「中学校では外に出られないから、一日をもてあましてしまいおもしろくない」と。「外に出たって悪くないんだから、外へ出て大いにあばれなさいよ」「かっこう悪くて出られないよ。小学校なら一地区だけだからいいけど、中学校では四地区も集まっているから、おおぜいの人に総合学級にすることがわかってしまっ」

私たちからみれば、この生徒たちが総合学級の生徒だと特に関心をもっている人たちでもないだろうと思っているが、本人たちはそうではない。全校生徒が自分たちのことをみていると考えている。

普通学級へ

一学期も終わりに近づいたころ、三年生の安次が、私立の高等学校へ進学したから普通学級へかえてもらいたいと言いだした。父親と母親とで教頭先生の自宅へおねがいに行ったそうだ。そこで

校長先生、教頭先生、各学年主任と私の六人で判定会議をひらいた。

安次を中学一年でこの学級にいれるときに、強引にいれてしまったいきさつがあるらしい。同じくらいの知能偏差値でも保護者が強硬に入級をこばんだ稔は、普通学級でみんなとかわりなく生活できた。そしてバスケットの選手にもなり農業高校への、進学を希望するまでになった。こういうことから安次の家庭では「入級させられてしまった」という不満をもっていたのではないだろうか。学校側としても、人数を確保するために、いくら無理をして入級させてしまったというひけめもあったようだ。しかし反面から考えれば入級させたことによって個別指導をうけ、学力もついて、進学しようという気持ちにさせたとも考えられる。本気で進級を希望するなら、学校側でもできるだけ援助をしてやろうということになり、あいている時間をみつけて校長先生が国語、教頭先生が数学をみてくれるということで、安次は普通学級へかえることにきまった。はたして、おおぜ

いの友達の中で一緒にやっていけるか心配しながら手ばなした。

安次が普通学級へかえったことで、外の男子生徒がいくらか動揺し始めた。なかでも三郎は、

「おれも進学するといつて普通学級へもどろかな。でも家の人は進学させるかなんて言ってはくれないしな。だけどこの組にいるのはかっこう悪いし、学校へ来てもちっともおもしろくない」

三郎のおもしろくないという理由もわからなくはない。同じ小学校からきたのに、元気の良い竹之助、茂夫、富美子は浜育ちであり、三郎は丘の方だから一緒に話していても、ちょっとしたことですぐに仲間はずれにされてしまう。そして三郎をばかにして、私にこんな話をおしえてくれた。

「三郎は、小さいときに木から落ちて、気を失ってしまった。三郎のかあちゃんはおわてて、醬油を飲ませたんだって。そしたら気がついたから、その三郎を自転車、荷台にのせて病院へ行く途中、こんどは自転車からおとしてしまったんだ。

だから、三郎は頭は悪くなるし、色も黒くなってしまった」

私は教頭先生におねがいして三郎と話しかけていただいた。三郎の普通学級への希望が強かったのだろう。両親も来校し、ぜひにということで普通学級の二年五組でお世話になることになった。

その後、二年五組へ授業にでる先生方にようすをきいてみると、学習はみんなについていくのが大変なようだが、授業中にさわぐでもなし、邪魔になることもなくおとなしくしている。ということ、あの総合学級でのわんぱくぶりは、すっかりかげをひそめてしまったようである。私が廊下ですれちがったときに声をかけたが、知らないふりをして行ってしまった。総合学級の先生に知られていることは迷惑だという顔である。それ以来、私も親しそうに声をかけないことにした。夏休みもすぎ二学期の学習が始まった。こんどは秋夫が「この組にいるのはいいだ」と言い出した。理由は、

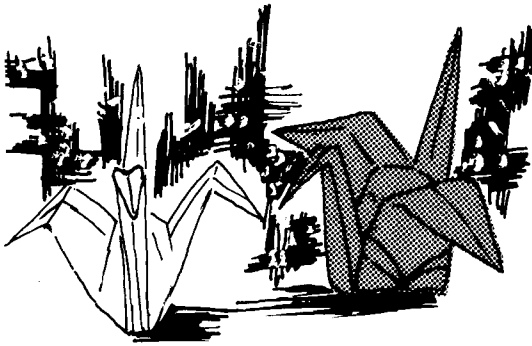
「かっこうが悪い。茂夫と竹之助に比べられる」ということだ。

私からみれば秋夫が一番総合学級該当者だと思っているのに。その秋夫がかっこう悪いと言いついたのには困ってしまった。それに秋夫は文字は読めないし、物を数えることもおぼつかない。平仮名も自分の姓名の字だけしか知らない。幸か



不幸か「おおきあきお」という名前では、仮名の「お」と「き」と「あ」だけおぼえれば姓名になるので、五十音図を見せ

ても三字しか読めない。これでは普通学級へ行っても困るだろうと思うが、考え方によっては、学問的なものを覚えられないのなら、おおぜいの中でもまれて、生活のけじめや人間関係のきびしさなどを、身につけることも大事ではないだろうか。こんな考えで、私は秋夫が普通学級へいくことは全面的に反対ではない。



母親に学校へ来てもらい、親の気持ちをきくことにする。

「私は秋夫がこの組にいた方が友だちがすくなくていい。普通学級へいったら、おおぜい友だちが家へあそびにくるかもしれない。それはうるさくて困ってしまう。でも、秋夫が、かあちゃんどうして普通学級へ行けるようにたのんでくれ。と言っているので、普通学級へやってください」

ということとで九月二十日から一年三組へお世話になることになった。

秋夫の親はまるで高校へ合格したような気持ちになったのか、本人がねだったら、学校への携帯を禁止している腕時計を買い与えたりした。残念ながら一学期いっぱい時計の読み方を教えたのに、ついに読むことを覚えないうまま手ばなすことになってしまった。

学級から生徒が減っていった手はかからなくなるが、いざ手ばなすことになる、今までにどれだけのことをしてやっただろうか、もっと親切に指導してやればよかったなど、申し訳ない気持ちがい

てくる。

あとに残った生徒たちも、ときどき普通学級へ行きたいと話したりしているが、今になって行っても勉強ができてはすかしいから、このままこの学級にしようとなる。

竹之助、茂夫、富美子は、海辺の小学校出身で欠席が多かったので、特に能力が低いというより学力がおちていた。その小学校で、はじめて特殊学級をつくったときに、該当する生徒がすくないので無理に入級させられてしまったということで小学校にたいして反感をもっているようだ。

生徒たちとときどきぐしゃぐしゃながらも、私も指導に馴れてきたし、生徒たちも私に親しんでくれ、家での生活や、地域のようなすなど楽しくはなしてくれた。ことに竹之助、茂夫、富美子の海岸地域の話はおもしろかった。また女子の家庭科を受け持っていたので被服製作やあみものなど、いくつもの作品ができたという成果はあった。

(え・田村幹代)

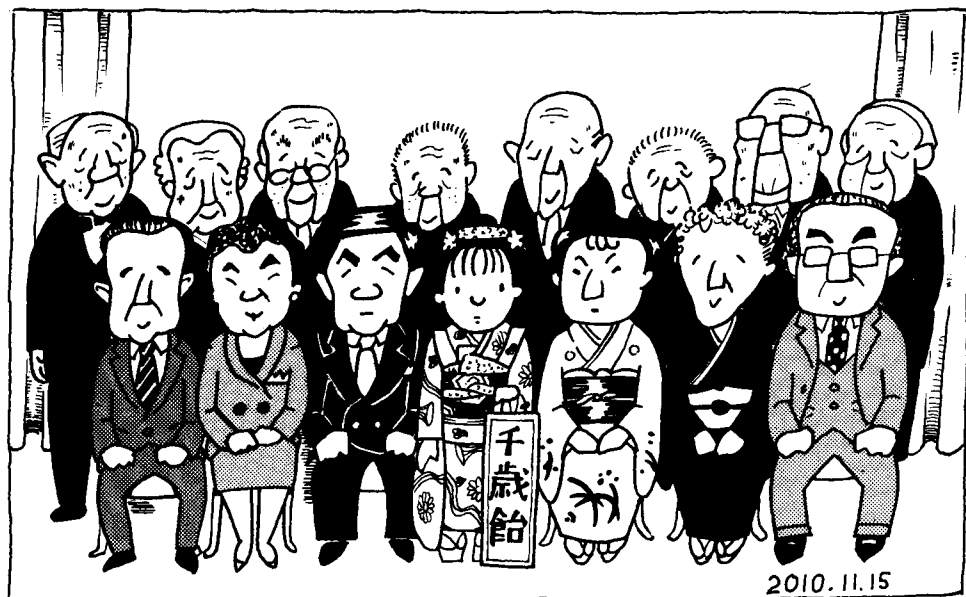
平成
おたけげん

① 出生率低下深刻に

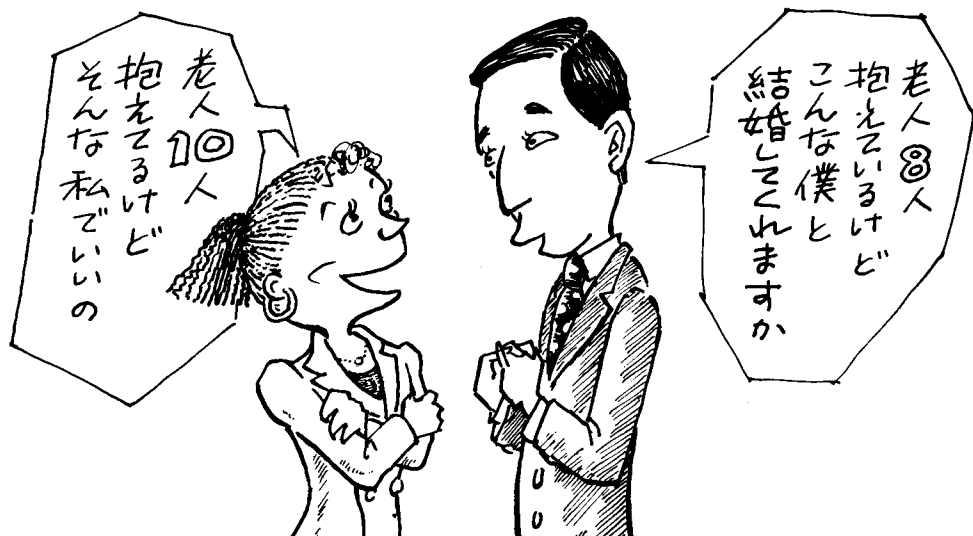
—子供1人に老人10人の時代くる

西田 淑子

その1. 七五三記念写真



その2. フロポーズ





私の転職 ストーリー

愛知県愛知郡●永作あや子(37歳)

現在私は、広告代理店にて求人広告の営業をしている。雇用形態が委託ということもあり、フルコミッションセールスの世界である。

さて、求人広告の営業といっても大きく分けて二つある。

①新卒大学生を対象にした企業展イベント。毎年五月〜八月にかけて六回くらい開

催。②中途採用のための転職フェアイベント、転職雑誌(「Bringing」"DODA" "とらばーゆ"など)、朝日・毎日などの新聞求人欄の広告とりの仕事である。

訪問先はすべて新規開拓。引き継ぎスポンサーは、正社員の営業マンが担当するから、私のような委託部隊に所属する者にとつては、ゼロからのスタートなのだ。だから、入社当時は販売補助費として七万円、交通費も全額支給されていた。そのときは、まだ自分がフルコミッションセールスという自覚はまったくなかった。

それが一年たって七万↓五万円となり、交通費がなくなった。また半年過ぎて五万↓三万、二年以上たった今では、販売補助費は二万円のみ。交通費だけでも毎月二万円以上かかっているから、ここ一年で自覚ができて当然といえるだろう。やるっきやないのだ。

また、この仕事は単に広告掲載の注文をとってくるだけでは、収入にならないのだ。

①注文をとり、②イラスト以外は自分で原稿を書き、③掲載誌(紙)を郵送、または直接届け、④反響がでているか聞き、⑤

集金・回収して、やっと歩合が入る仕組みなのだ。百日手形の企業もあるから、注文を受けてから四カ月くらいして、やっと収入に結び付くこともありうるのだ。

入金が遅れていると、自分で催促しなくてはならない。何らかのトラブルで回収できない場合、最悪自腹を切らなくてはならないこともあるわけである。おかげで、まだ始末書を書いたことはないが、同僚が書いているのを見ると複雑で「明日は我が身」と緊張する一瞬である。

このようにフルコミッションセールスは、お金に関してはとつてもシビアだが、いいこともたくさんある。組織に属さない事業所得者だから、出社義務、帰社義務がない。すべて自己管理。訪問先の選択、一日のスケジュール、値引き交渉、時間管理を上手にすれば、学校行事、仕事の合間にゴルフスクールに通うこともOK。実績はすぐ収入に結び付く(収入が不安定というデメリットもある)。

さて、私がどうしてこの仕事、この会社を選んだのか……。

今から七年前、再就職として地元新聞の

地域生活アドバイザーという仕事が出発点だった。これは一軒一軒の家を訪問して新聞の普及活動をするというものだった。この仕事を通して人間相手は面白いと実感したが、個人でなく企業相手に仕事をしたいと思った。

そこで電話消毒の仕事。これは一カ月に一回の割合で、決められた会社の電話機の消毒と集金をした。この仕事に慣れてくると、企業相手に営業したいと思うようになり、次はリクルートだった。

当時Wing課という女性部隊の「第一期生募集」企業トップに会える知的な仕事です」という言葉に引かれ「求人広告の営業」というこの世界に飛び込んでしまった。まだリクルート問題も起こっていなかったから、とても居心地もよかったし、営業のイロハをやりわりと教えてもらった。待遇面でも今思うと恵まれていて、フレックスタイム、週二十時間勤務で、固定給五万円、プラス交通通信費二万円、プラス歩合給だった。楽しいスタートだったが、じきにストレスを感じ始めた。

リクルートは媒体そのものだったから、

扱えるものがBoringしかないのだ。反響がなくても、また同じBoringを薦めるしかない。求人広告は、いくらお金をかけて、何人採用できたかを問われる宿命にあるのだ。

「もっといい方法、媒体があるのでは。お客にあったものを薦めたい。そのためにも、もっといろいろなものが扱える代理店に転職したい」と思って、今に至っている。

私の転職は無理がなかったと思っている。決して前の仕事を無駄にしていなかったから。

仕事は、楽しく、やりがい、自由、収入……をポイントに選びたいと思っている。約五年間営業という仕事をしているが、いまだに自分がこの仕事に向いているとは思わない。ただ分かっていることは、自分は内勤仕事、デスクワークに向いていないということ、レンゲやコスモスのように、一見控え目だけれど、しっかり大地に根付いた営業をするタイプであることが分かってきた。これからも、マイペースで、細く、長く、そして女性独特のしたたかさで、この仕事



を続けていきたいと思っている。再就職を考えている皆さん、営業は女性に向く仕事ですよ。転職は女の特権。しかし「隣の芝生がまっ青に見える」というそんな理由での転職はやめて、世の中そんなに甘くないよ。甘いキャッチコピーを考える私が言うのだから信用して。

退職したい

新潟県中蒲原郡●小林 智枝(50歳)

働く毎日が当たり前の生活を長い間続けて来た。定年退職の前に、みずからの意志で仕事を辞めるということが、女であつてもこんなに大変なことだとは、思ってもみないことだった。

この一週間、私は真剣に仕事を辞めようと考えた。しかし、現実の問題となつたとき、心の準備期間が必要であり、もう少し頑張らなければならないと思ひとどまつた。

私が新潟県農林水産部の予算担当になつてから十カ月が過ぎた。ハードな仕事に追

われて、体力と能力の限界を感じ、自信を失つていた。仕事は、公共事業の七十億円もの予算を組んだり、補助金の申請をしたりする事務である。工事にかかる国の補助事業というハード部門は、私には最も向かないものであり、苦手なパソコンで、これでもかこれでもかと計算したり、事業課と財政課の間につつて、取り仕切らなければならぬが、私には消化できないものだった。

そのうえ、若いころから目が疲れやすくて苦労していたが、一月中旬ごろから、文字や数字が非常に見にくくなった。県庁前のバス停から、国道を挟んだ向かいの酒屋の大きな看板が見えなくなった。メガネをかけているのにぼやけている。これはただごとではない。疲れ目とは違う異常なものを感じた。

両方とも白内障ですね

眼科の診察室はどうしてこんなにうす暗いのだろう。先生が目光を当てて診察するためだけでなく、目の悪い私には一層見にくい。普通だったら気も動転する白

内障という医師の言葉なのに、私はそのときそれほど驚かなかつた。夫が十年前に白内障の診断を受け、思ったよりも進行が遅いせいかもしれない。

「緑内障やそひと違って、白内障は心配することはありませんよ。手術をすればいいんですからね」

医師は私の心配を和らげようと優しく言つた。

視力は裸眼では〇・一で、一番上の大きなマルがぼやけている。ぼやけたマルの斜め下にもぼやけたマルがだぶつて、ゴチャゴチャして見える。

私が初めてメガネをかけたのは二十八歳の時だった。乱視のために、仕事で目が疲れる時だけかけていた。視力は少しずつ落ちた。メガネを常時かけるようになったのは、一年くらい前からで、老眼もでてきた。

一年前に買ったメガネをかけて、当時一〇だった。昨年の十月に〇・七となり、一月には〇・四に落ちていた。急激に目が弱つていた。十月に受診した時も、目がアレलगギーを起こしているので、できるだけ目を休めるようにと言われていた。



しかし、今、目を休めるという状況ではない。目が痛くとも、パソコンをしたり、細かい数字の羅列にチラチラしても、まちがわないように細心の注意を払いながら、仕事をしている。

「先生、このまま仕事を続けていると、目が取り返しのつかないことになるでしょう。仕事辞めた方がいいのでしょうか」

医師はカルテを見ながら考えていたが、静かに言った。

「仕事を辞めないと、取り返しのつかないことになるということはないでしょう」

四十代の働き盛りで、眼科の名医と言われる医師はさらに続けた。

「白内障の進行は個人差があって、急速に進む人と、ゆっくりの人といますので、小林さんはこれからどうなるか、様子を見ないとわかりません。ただ、目に負担がかかっていますね。視力が落ちているのは、残業などで体が疲れていると、目も弱ってぼやけて見えなくなるからです。体が元気になるれば、目も元気になるように見えます。上司に相談して仕事を替えてもらった方がいいですね」

とうとう恐れていたことになってしまった。この弱い目がいつかだめになるのではないかと、と心の中で案じてきた。それは、いつか、という漠然としたものだったが、思ったよりも早く現実のものとなってしまった。

冷たい風の吹く暗い道を歩きながら、涙が悪い目を洗うかのように、とめどなく流れた。ただただ悲しかった。

仕事を辞めよう

もうだめだ。これ以上この目が悪くなったらどうしよう。仕事はだれでも代わってできるが、私の目は私だけのものだ。三月で仕事を辞めよう。この十カ月間の張りつめていた忍耐の糸がブツンと切れた。

そのうえ、一年前にぎっくり腰をしてから腰の調子も悪く、悩んでいた。

私は二月に五十歳になる。新潟県では、五十歳以上になると肩たたきが始まる。それは形式的なものであるが、勧奨の対象となったのに、今の仕事について一年以内で配置替えなんて、受け入れられるとは思えない。上司に相談しても無理な話で、にがい結果となるのではないだろうか。それならばいさぎよく辞めた方がいい。

このとき、私の心は感情に流されていた。単身赴任中の夫が帰って来た。

「この三月で仕事を辞めてもいいでしょうか」

目の状況と今後の生活設計を話しているうちに、また涙が勝手にあふれてきた。私は涙せんがたるんでいる。

公務員で五十歳で仕事を辞めようというのだから、人が聞いたらもったいなくてあされる話である。

夫が私にもう少し働いてほしいと考えていることは分かっていた。しかし、もうお金なんてどうでもいいから、塩をなめても仕事を辞めたいと私の心は傾いた。それに、八十四歳になる母に親孝行したかった。私が働いている限り、母の緊張感もとる事ができないからだ。もうらっくりさせてやりたかった。

「分かったよ。今までよくやってくれたね。分かったよ。ご苦労さん」

夫が初めて口にした言葉だった。その言葉の重要性とは別に、不思議な感覚をもって私の耳に入ってきた。こんなにも大事な言葉が、いつもの何げない会話のように通るすぎるなんて、どういうことだろう。

しかし、クリアしたはずのこの言葉から、私は大きく揺れることになった。

「もう少し考えてみるわ」

三月に辞めるとしたら、常識的には二月下旬ごろまでには申し出なければならぬ。わずか一週間くらいしかない。

考えようにも一度切れた心の糸は、自由な生活への誘惑へと変わってゆく。

家庭に入ったら、やっと心の底からカラカラと笑うことができるだろう。本を読んだり、文章を書いたり、花や空や雲や、庭の木々をゆっくりと眺めることができるだろう。忙しさからなおざりにしてきた色々なことが、ゆっくりとした時間の流れの中で取り戻せるじゃないか。残業で母を独りぼっちにするかもしれないし、夢のような自由な生活を考えただけで、私の心は明るさを取り戻せるような気がした。

早計な結論はやめよう

私の心は九〇%退職しようとしていた。しかし突然、一〇%の心が両手を広げて立ち上がった。

私が明日退職を申し出ると言ったところ、夫に念を押された。

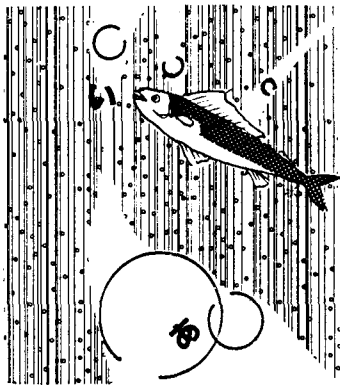
「本当にそれでいいんだね。辞めたとたんに、別の悩みが始まるんじゃないだろうね。この一年間の苦労は心配していたよ。でもそれまでは、自分の良さを仕事の中で発揮して、周囲の人にも信頼されて、総理大臣

表彰まで受けたり、社会の中で輝いていたのに、突然家庭に入ってボケてしまうじゃ困るよ。いきいき生きてくればいいけど、だめになってしまふんじゃないかと心配だよ」

「だめになりたいわ」

口では言ったけれど、避けようとしていた潜在意識を大きく揺さぶる言葉だった。

一週間くらいで突然辞める決意をして、本当にいいのだろうか。今の仕事から逃げたいという気持ち少しでもあるとしたら、自分に負けたことになる。せめて一年くらいかけて、退職後の心の準備をしてからでないと、きっと後悔するかもしれない。私の心はコロコロと変わる。それだけむづかしい問題なのだろう。仕事を辞めることが、



テレビで出演でんまひ記

東京都足立区

遠藤 肖奈 (26歳)

まいこんだ出演の話

「テレビ朝日ニュースステーションの生野と申します。『わいふ』の田中さんからご紹介をいただきました。出演依頼のお電話を差し上げました。また、改めてお電話いたします」と留守番電話のメッセージ。出たがり屋最大の処方箋、テレビ出演がこんな形でやってくるとは……
「わいふ」に参加しててよかった。なんて。

もう子供は産まないと考えていること。これが今回、私が出演するテーマ。育児雑誌の投稿でも、ことあるごとに「もう子供はいらない」と言いまくっている私には、まさにビッタリの条件。ただ私の

勤めるタウン紙がY新聞系列で、今回の出演は朝日系というのが少し引っかけたが、どうってことないだろう。本社から援助金をもらっているわけでもないし、系列会社でもないから、と軽く考えた。
さて、最初の打ち合わせ。例の生野さんというディレクター自らご出陣という。あの留守番電話から随分たって連絡してきたのに、明日じゃないと上司に企画書を出すのが間に合わない、勝手なことをぬかす。

でも、私はちょっといじわるく「いま締め切りで忙しいんですよ。明日は出張校正だし」と困った顔、いや声を出す。「いやあ申し訳ありません。どこにでも行きますから、どうか明日にお願い

しますよ」

品川の喫茶店で会う。開口一番「若いんですね。電話からすると三五歳くらいかと思いましたよ。やけにテキパキして、バリバリのキャリアウーマンってかんじで……もっとギスギスした人かと思った。良かった。絵になりますよ」初対面からガンガン話してくるのと、カタカナがやたらと多い話しかた。

帰り道、要は私のプロフィールを聞きただただだけなのかな。それなら電話でもいいのに、どうして会いたいと言ったのかしら。などと、つらつら考えていたら思いあたった、もしかしてただ「顔」を見たかっただけなんじゃないか。ハハッ
そういえば「絵になりますよ」って言っ

てたわ。私の容姿はとりあえず及第点なのか。そうかそうか。と一人電車のなかで納得した。

おかげで退職に

日程が決まったとなると仕事場も写したいと言っていたし、そろそろうちの社長にも許可を得なくてはいけない。テレビ出演に舞い上がっていたけれど、社長のことを考えると頭が痛い。

Y新聞の冠を後生大事にしている彼が、朝日系のテレビ出演にいい返事をするとは思えず、なんとなく言いにくい。それにこの人とはどうもソリが合わなくて、私が本名で投稿したりしているのも「ペンネーム使わないの」と遠回しにけん制していたし、いつも「この仕事は黒子にならなくてはいけないのだ」とのたまっている人だから。

そんな矢先、編集長が「社長がテレビのことで聞いてきたよ。朝日系だからどうのとか、地域で生きている私たちはどこに行っても『Yのなにになに』と言われるんだから、メディアで論を述べるべき

じゃないとか。一応遠藤さんのプライバシーな部分ですから私に言われても……って濁しておいたけど」と話してくれた。やっぱりね。でもせっかくのテレビ出演。これを逃せばいつくることか。

ここで素直に許可を得ていれば、後の大騒動に発展しなかったのだろうが、この時「仕事場を映さないようにしてもらおう。そうすればプライベートな部分だけになるから、向こうも文句をいうまい」と甘い予測のもとに無視してしまった。

忙しく働いている間に取材日前日。生野さんから「保育園のなかも取材したいが、どこへ撮影許可を得に行ったらいいか」と電話がある。いつもお世話になっている区の報道課に電話するように言い、私の名前を出してもらってもいいと話した。これが社長に知られることになってしまった。

彼は私からも一向に話がないので、テレビ出演は流れたものと思っていたらしい。それが報道の人から伝わったものだから、怒りが爆発。報道課の人がなにげなく「テレビに出るんですって?」と聞

いたことを、自分が知らなかったことも彼のげきりんにつれた。



東京・足立 '91秋

モラルの問題だの、「わいふ」の投稿に関しても女性総合センターでいろいろ言われただの（女性総合センターは、「わいふ」の蔵書がある）と言い出した。黒子に徹しなければという彼の持論にも反するというわけ。

でもそこまで拘束するのって人権侵害だよな。仕事は仕事、プライベートはプライベートだもの。と、聞いているうち

にだんだん腹がたってきた。

「社長の言うこともよく分かります。社長がY紙の遠藤としてモラルを持って欲しいということも。でも私はY紙の遠藤よりも、一個人である遠藤肖奈を大切にしたいと思っています。地域紙に関わる者が投稿もできないというなら、私は辞めさせてもらいます」

給料が安いのだ、待遇が悪いのだ、社長がケチだのと言ってたし、最近転職しようとは思ってたから、根が楽天家の私は辞めることを「ラッキー」と思うことにした。強がり二割だったけど、不思議と寂しさは感じなかった。

いよいようつされる

取材当日。まずは保育園のお迎えシーンから撮影に入ることにして保育園に向かう。車の中でコードレスマイクを付けてもらい「とにかく普通に、自然にいつも通りにしてください」と念押しされる。そりゃあいくら普通になっていわれても天下のテレビだもん。あたしゃ初めてテレビにでる小市民なんだからね。



撮影開始は私が保育園に車で乗り付けたところ。ライトに照らされながら車を降りて、保育園の門へ向かう。たった三〇秒ほどこだけ、もう足立区村じゃあどつと人がたかかった。「テレビだあ」と騒ぐガキ、「誰かいるの(有名人のこと)」とのぞきこむおばさん、「なんだ普通の人じゃないかつまんない」と言う中学生。あたしゃ三〇秒でもう注目の的。これは気持ちがいいというより「こっばずかしい」。その間、保育園のお母さんたちに「遠藤さんじゃない。どうしたの?」と聞かれるのを必死で無視して、私撮られる人。

保育園の正門をくぐって園庭で遊ぶ娘に声をかける。いつもは「ママ」と駆け寄ってくる子が「なんだこりゃ」とげんそうに私のもとへ。ここでひとまず「カット」。

すごく疲れた。やっぱり緊張するわ。カメラたちは外のお母さんや子供を撮るために、私はこでしばし待機となった。カメラを目で追いながら、なんとなく保母さんたちを見てみると、あれえちゃんとお化粧してる。いつもは当然のことながらスッピンでいる保母さんも、やっぱりテレビとなると化粧か。ここがカットになったら、私うらまれそう。

その後買い物したり、家に帰ってからドタバタを撮影して七時でおしまい。明日の昼の友達との撮影、だんなとの撮影の打ち合わせをして彼等は帰っていた。

次の日。昼に友達が二人来る。この二人とは子供を通じての付き合いで、もう三年越しの仲。レポーターを交え、ディスカッションのかたちで撮影が始まる。いつもの調子で、「共働きして家ひとつ



満足に買えない世の中にしといてなにが子供産めだ」「もつと子供産んで欲しかったら、経済成長を止めても亭主を定時に帰せ」「小手先だけの児童手当改正でこまかすな」などなど。三人で言いたいことと言った。終わったあと「これだけ言えば文句ない。あとはどれだけカットされるかだよ」と私を含めた三人は、テレビという電波によって私たちの思いがどこまでのお偉いさんに通じると、大きな期待をふくらませた。

次は夫とのシーンの撮影。二人で椅子に座りレポーターの質問に答える。夫との出会いから今までの生活状況、彼の家の

生育児参加について、私と彼の意見の相違……と、ここでも心のうちをすべて言葉にできた。撮影が終わったあとは「大満足」。死ぬわけじゃないが「言い残すことはない」の心境。

次の日、夫は会社の同僚とのディスカッション。私は仕事している雰囲気と、公園の池の前で「私が子供を産まないわけ」の前段階、一人目はどうして産んだのかを撮影。ディレクターは「一人目はなにも考えないで産んだといった感じのことを言ってください」と注文をつける。

「べつになにも考えなかったわけじゃないんですよ。一人目も欲しくなかったんだし。ただ世間の常識に負けただけで。それにだんなは欲しがってたから」と口答えをするが「でもとにかく産んだということは、子供がいて初めて家庭といった意識があったわけだからね。同じですよ。今回の遠藤さんのところは『どうしても産まないのか』ですからね」
ちょっと待ってよ。一人は欲しくて産んだけど二人目はいらない、と、一人目も欲しくはなかったけど、世間の常識に

負けたのとは随分違うんじゃない？ てもしよせん私も小市民、なんとなく釈然としないながら、ディレクターの意図と自分の意見の交わりそうな言葉を探す。結局テレビというしきの御旗に「はあ」と平伏してしまった。

そうこうしているうちにラストシーンの撮影も無事終了。三日間の撮影も終わってみればあっけない。あとは放映を待つのみ。

あげくに夫婦ゲンカ

放映日。時間がたつのももどかしく、ビデオをスタンバイして、テレビに見入る。やっとこき特集が始まった。どきどきわくわく、小市民は自分の映像がいつでくるかと胸もつづればかり。はっはじまった!!

「きえゝあたしってこんなブス?」「実物よりいいかもよ」夫と会話をしつつ、自分の姿に顔がほころぶ。ところが顔のほころびが直らないうちに、私の日々のシーンの映像が終わり、ラストに「私が産まないわけ」夫の非協力」というテロップ

プが出てまとめられてしまった。

「これだとおれがなんにもしないみたい。ちよっとひでえぞ。こんなこと言ったのかよ」と早速夫が抗議してきた。

「こんな単純なことってないわよ、／＼」
「だいたい私はあんたは子育てに関してはまだあよくやってくれるけど、なにせ仕事から帰宅が遅いし、限度があるっていったのよ」「だってもう外の人が出てんぞ／＼」「このあときつとそれが出てくんではよ、あたしのせいにはしないでよね／＼」
テレビに出て夫婦ゲンカしてどうするのよ、ちよっと生野さん大丈夫なんでしょうね。

それから夫が同僚と、私が友達とディスカッションしているシーンが出る。ところが、肝心の論を述べているシーンはまるつきりカット。

あたりさわりのないくだらないところだけ残されて放映されている。夫の側もしかり。

「げげっ終わりじゃないの。これじゃあ私はただ忙しいって言ってるわがままやろうじゃない」「ったく、おれが言った



こと久米さんにしゃべらせんなよな。おれが同じこと言ったぜ」

放映が終わったあとは、夫婦して文句の言い合い。私が一番張り切っていた、夫とのシーンもすべてカットされていた。それに加えて「子供を産む」夫の協力が「不可欠」と簡単に結論付けしてチャンチャン／＼ 随分失礼だな。

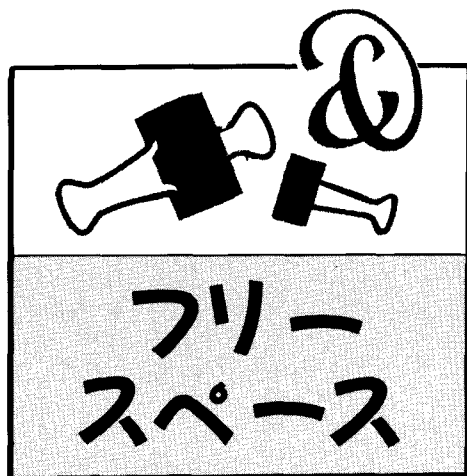
次の日ディレクターから電話がある。本人にとって不本意でも、あっちにはそうではなかったらしく「どうでしたか？」の声ははずんでいる。「だんなが怒ってましたよ。おれ一人悪者って」「あはは。テレビは強調しないといけないんでねえ。だんなさんには謝っておいてくださいよ。でも僕らはよくできてたと思ってるんですよ」

でも私、このテレビ出演で職を失ってんのよね。

職を放り出してやるほどの価値があったならともかく、論はたところ全部カットされてるんだもの。そのうえ三日間のギャラはなんと二万六千六百九十一円。

あーあ職探し手伝ってよねっ!!

(写真提供・筆者)



お年玉が もらえるなんて!!

東京都●匿名

一九九二年は元旦早々の思いがけない出来事で幕開けとなる。

お雑煮を食べようとしていると、「今年はお大人にもお年玉があるぞ」と夫から手渡

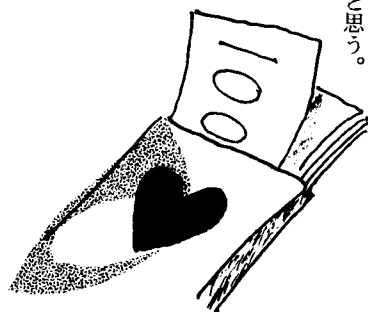
される。袋の厚みが一センチほどあり手帳ぐらいの大きさなので、「ウソでしょう、銀行からもらった手帳でしょう」と言うと、「本当に百万円が入っているぞ」との返事。それでも信用することができなかった。

すると、義妹二人と義弟の三人分としての同じのし袋を取り出しながら、「この通り、みんなに百万円のお年玉だ」と言う。このお年玉はしゅうとめからの生前贈与のことである。

しゅうとめは、これといって食べたいものはなし、着たいものはないという堅実家である。年代的に「ゼイタクは国の敵」という考えが、しっかりと身にしみているらしく、お金は大事にしている。このような常日ごろの金銭感覚の人から、百万円のお年玉とは信じ難い。

だが、のし袋の中を確かめると「一万円札が一束にして封印してある。冗談ではなく本当である」と体で震えが来てしまった。これをもらうと何か交換条件がありそうで、後が恐ろしい気がしたので、その場は「今晩一晩考えさせてください」と言うておく。

私はもらう筋合いではないのであり、このお年玉をもらったばかりに義妹たちからしゅうとめの世話することが当たり前と言われて、私一人が遮二無二、しゅうとめの面倒を見ることになっては、とんでもないことである。基本的には夫と共に世話するつもりではいるが、義妹たちにも手助けを求めたいと思う。



その晩に、この話をすると思妹たちがお年玉と交換条件に面倒を見るようにと言うはずがないと言う。なぜならば、このお年玉は私がもらったものではなく夫がもらい、子供たち二人と共に家族四人のものであるという。だったら、いかにも私へのお年玉のごとくしゅうとめの前で手渡しすること

はないし、キチンと事情を話して欲しかったと思う。

てっきり、私一人でもらったつもりであったので、初めての海外旅行ができそうであり、どこへ行くかしらなどと一瞬考えたりしたが、もらわない方が良いと思い夫に返すことにする。すると、私名義で貯蓄することにして、ムダ遣いをしないようにと念押しする。

夫と私との金銭感覚には、だいぶギャップがある。私はフトコロに余裕があれば旅行がしたい、洋服を買いたい、時には高価な料理も食べたいなどと、少しでもゆとりのある生活をしたい。それがムダ遣いとは私は思っていない。夫は旅行だといって、わざわざ遠くまで出かける必要はなし、洋服がタンスに入り切れないと騒いでいながら買うことはない、食べることは安いものを工夫しておいしくする知恵が必要であり、高価な料理はおいしくて当たり前だという。利率が少しでもよい金貯蓄か中期国債ファンドを私名義でするように、と強く言う。私の偏見だが、証券会社と郵便局は嫌いだ。証券会社は現金の引き出しの時は前

日に電話をする必要があり、この点が面倒で嫌い。郵便局は以前よりはましになったが、無愛想でサービス精神が不足しているのが嫌いである。貯蓄するのであれば銀行がよいと思っている。五十万ずつにして、それぞれを銀行と証券会社へ持っていけばいいと思うが、なかなか折り合いがつかず、約十日間ほどはうり出してあった。

その後、夫が私の好きなリチャード・クレイダーマンのコンパクトディスク三枚を買い、プレゼントだという。CDプレイヤーがないので、夫のプレイヤーでラジカセテープに録音を頼むと、あのお年玉で買えばいいと言う。この言葉には驚いてしまった。夫にはこのことはムダ遣いではないらしい。結局、十万円を手元におきCDラジカセを買うことにし、残額九十万円を銀行のスーパーMMCの三カ月据え置きタイプの私名義で預金することに落ち着く。

当初の思わくが外れて十分の一になってしまったが、お年玉とはあげるばかりでもらうものではないという生活を数十年続けてきたので、十万円のお年玉がプレゼントされたことは全く思いがけないことである。

東京へ行って服を買おう？

神戸市西区●重住麻悠(34歳)

初めて「あこがれの東京」へ行ったのは、受験勉強に突入する直前の、高二の春休みであった。

上京して一日目に、アンアン、ノンノなどであつぷりと研究していた「原宿」で、ひらひらとフリルのついたアンティークなワンピースを買い、次の日からはさっそくそれを着て行動した。神戸から着てきた服のままでは、東京では平凡すぎると思ひ込んでいたのである。

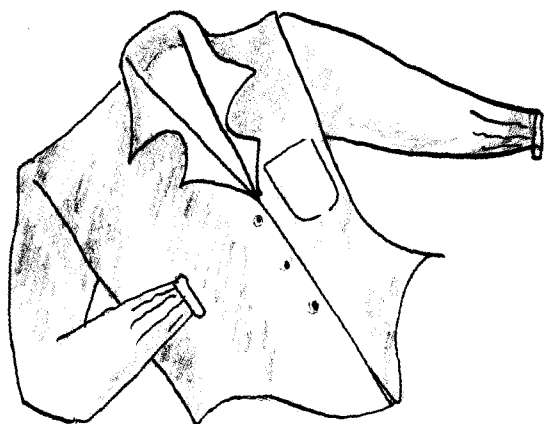
しんせきに「得だから」と勧められて、東京都内の「周遊券」を買っていたのだが、これは失敗だった。原宿の駅で乗り降りするたびに「ワー、周遊券が来たぞ」、と大声でかかにされたからである。

日常からは程遠い、ひらひらとすその長いワンピースに周遊券とくれば、まさしく「おのぼりさん」以外の何物でもなかつた。

たのだ。

しかし、私たち三人は、そんなことに気づく余裕もない。高校生だというのに、超一流ホテルに泊まり、一万円札を数枚握り締め、三日間というものの、原宿、渋谷で「東京でしか売っていないような服」を買いあさったのだった。

五年後卒論も仕上がり、大学卒業までの



ひととき、再び「東京見物」に行った。

もう二十歳もすぎ、前回のようにはいしゃぐ気にはならなかったけれど、青山のバズショップですてきなシルクのシャツを見つけたときは、やっぱりうれしかった。

就職してからは、一年おきぐらいに上京していたが、それは友達と会ったり、ライブを見たり、研究総会に参加するためだったりして、「服を買うこと」は、だんだんと、忘れていった。

そして今回、長女を産んで以来五年ぶりに「東京」へ一人で出かけた。山手線や中央線で見た「東京」の人々の服装は、ずいぶん質素だった。つい数日前に乗った阪急神戸線の、華やかな奥様方とは対照的だった。

若い人たちがおしゃれなのは、どこの街でも当然のことだ。気になるのは、自分より上の年代の人々の服装である。自分の将来の姿に重ね合わせてしまう。その点では阪急神戸線は楽しい。襟もとのスカーフから靴、バッグに至るまで、思わず「ウーン」とうなってしまうほど、おしゃれにコーディネートしたおばさまが多い。何しろ芦屋川

沿いの「いかりスパー」に行ってみると、ちょっとした夕食の買い物のための外出に、毛皮やレザーのジャケット、ツイードのスーツなどを着込んで来ないと気がすまないような人種もいるのだから。

東京で夫や子供へのみやげは買ったけれど、自分の物は何一つ買わなかった。時間のスキをぬって、渋谷や新宿を歩き回ったけれど、欲しいと思える物がまったくなかったのである。関西にも、東京の多くの店が進出しているし、売っている商品の種類はずいぶん豊富になった。いや、むしろ落ち着いたデザインの物なら、神戸の方が恵まれている気さえした。それに、外食費が関西の約一・三倍ぐらい高いことを考えあわせると、服飾品だって同じように高い地価や人件費のツケが含まれていることは予想できる。何も東京まで来て高い服を買わなくても、というのが主婦の結論である。

もうあと東京に残された魅力といえば、文化と情報の多さであろうか。

そういえば、今回の上京の第一の目的は、少しばかり興味をもった、シュタイナー教育についての情報を得ることだったのだ。

單車考

大阪市鶴見区●家守恭子(61歳)

二十代に四輪の免許をとったころは自動的に二輪の免許も付随していた。

まったくのベーパードライバーで三年ごとの免許更新を繰り返していたのが、あるいきさつで五十に手のとどくころ急に五〇ccの單車を乗り回すようになって、はや十余年になる。

乗るにあたっては一応の安全を考えて黄色の車体を購入し(なに、自転車よりこがなくて楽だしスピードがでる)、と市中の車洪水のド真ん中へ乗り出たのは、いま思えば無知無謀としか言いようがない。

自転車は歩道や一方通行を反対に走ってもよいが、單車は四輪なみの交通法なのを知らなかったり、二輪(小型)は不可の標識を見落としてバイパスや陸橋を通るなど、初歩的なミスでたちまち違反点数を重ね免許停止に至るのにさして時間はかからなかった。

一カ月の停止期間もさることながら、そのつど支払った罰金の高額に泣き、丸一日缶詰にされて講習を受けてからは違反は絶対にするまいと覚悟を新たにした。

單車は駐車に困らない。また道路が渋滞してもその間を縫って走れば渋滞は免れ、ほぼ正確な所要時間で目的地へ着けるのは大きな利点である。

しかし、暖冷房のガードなしで長距離を走るのは実にきつい。冬は骨の髄まで凍り、ストープに当たっても容易に菌の根は合わない。夏は風を切つてと思いきや、太陽と熱風のため脱水状態に近くなる。まあこんなのは極端な例であって、摒越しに咲く白梅に春が待たれ、桜並木の花だよりを確かめに回り道をしたりと、市内近郊を縦横に走るのは格好の気分転換になった。

小さな單車は車道の左端をゆっくり走ればよいからといえどさにあらず、左端に駐停車中の右ドアを不用意に開けられると單車で走る者はモロにぶつかってしまう。それを避けて道路の中心あたりへ出ようものなら後の車のクラクションに攻められる。片側二車線の場合、並行に走る隣の車の左

想像して下さい!
30年後の日本を!

団塊の世代が高齢者になる頃
年金は? 国保は? 人手は???

今、うてる手はうっておきたい!——南立介護費用保険です。



くわしくは「わいふ」ありて
電話で資料請求して下さい

お住まいの指定代理店

お問い合わせ先・お申し込み先は「当選受取の通知書」

南立介護費用保険株式会社

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

折点滅は単車には見えにくく、交差点で直進の単車を遮るかたちでの左折には肝を冷やす。

単車はどうしても事故が多い。四輪と違い、石くれ一つくぼみ一つも転倒しやすいのと、わずかの接触でも人身事故につながるからである。

かつて二度軽い人身事故を経験した。いずれも相手の四輪の落度であり、治療費用



および営業補償金まで受け取ったが、よくよく考えてみると、そのとき心配事があり気持ちが奪われていたことと、いま一つは約束の時間に遅れそうで慌てていたことが思いあたる。

常に整備を怠らず、よく乗りなれた車に、

欲をいえば知った道を、穏やかに平常心を持って運転すれば、加害者にはもちろんならず被害者になるのも半減すると信じている。

今はおもに通勤に乗っている。夕方のラッシュに巻き込まれながら夕やけこやけのメロディーで「今日も一にち日がくれたー、あせらずゆったり走りましょー」などと歌って油断を戒めている。

若者の単車族はそれなりにファッションをキメているが、実務のみに利用するにはすべてを安全につなげている。まず車からして最初の黄色の通称ラッタッタは簡単に取られたので、二台目以降は盗難の恐れがないカブにきめている。タイトスカートは

ダメ、靴はビニール製ローヒール、ジャンパー風コートをいつも羽織り、ヘルメットにカラー軍手とくれば耳にも指にも修飾はしない。

チョッピリ残念なのは、これではアフター5に具合が悪い。職場からの帰途、コンサートホールへ単車で駆けつけるが、雰囲気になじまず一瞬足がすくむ思いがする。

今年の二月、むこう三年間の自賠責保険に再加入契約し、来年五月の免許証更新もするつもりでいる。そして四台目のカブにも多分乗り替えるだろう。

やさやかな闘病記

東京都足立区●橿原晶子(40歳)

私の子宮が、持ち主に断わりもなく「筋腫」という異物を作ってしまった。おかげで私はいやおうなく開腹手術を受けるハメになった。

それでも、今どき子宮筋腫など珍しくもなし、今まで手術など受けたことがなかったから、好奇心も半分手伝って気軽に入院

した。思えばこれが間違いのもと。

あけてびっくり、エコーに映らなかった所にも二個の筋腫がくっついていて、癒着がひどく、私は手術室で二時間も、歯の根が合わぬほどふるえていなくてはならなかった。しかも下半身麻酔で意識は明りょうなので、医師の声や物音のひとつひとつが恐ろしいこと。

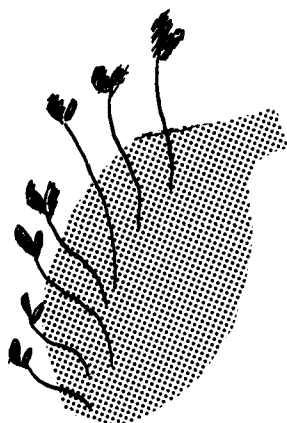
手術は無事に終わったが、回復が悪く、微熱が十日続いた。もともと弱かった胃腸は、突然なくなってしまうた子宮のスペースに、うまく納まることができないらしく、腹痛と食欲不振が二週間続いた。

そのうちに、見舞い客がやって来る。PTAの役員をやっているので、やたらに人が多い。部屋には花が絶えず、くだものや菓子があふれる。私は、点滴だけで保っている体をおこし、微熱にうるむ目で応対する……。純白で豪華な個室で、花と義理の客と見舞いの品々に囲まれながら、私は徐々にノイローゼぎみになり、まったく眠れなくなった。

退院が延びた。こんなありふれた病気に、さりげなく勝てない自分が情けなかった。

それにもまして、見舞いに来た実の言葉「あんたにもしものことがあったら、子供たちは引き取るから、栄司さん（夫のこと）には再婚してもらおうね」

うせろ。クソじじとクソばばめ。こん



なところで死んでたまるか。うちの鉄砲玉息子たちが、あんならの手におえるものか。第一、あんな中年のうすらハゲと、今さら再婚してくれる物好きがあるものか。

そんなこんなで一カ月、私はめでたく生還した。うすらハゲと鉄砲玉息子と、心温い友人が、その後の私を見守ってくれている。

ミシグ君

埼玉県草加市●佐藤玲子

お正月気分の抜けた一月十五日、成人式に出席する長女に振りそでの着付けをしてやるため、私は朝から大わらわだった。長女のえつ子は今年短大を卒業して就職をする予定である。長女を成人式の会場で夫が車で送っていき、のんびりお茶を飲んでいると、電話が鳴った。

「もしもし、草加の花屋の〇〇です、板橋のYさまからえつ子さまに花キューピットの依頼がありましたのでこれからお届けします。ご住所の確認をしたいのですが……」

花キューピットとは依頼者の希望に応じて花を届けるシステムのことである。Yさんから長女のえつ子にと聞いて、また？

と私は一瞬考えこんだ。Yさんとは、大学のサークル活動を通じて知りあった長女のボーイフレンドの名前である。

また、というのはこのところ彼から長女に対してプレゼントが続いているからだ。大みそかの三十一日には真っ赤な大粒のい

ちこの詰めあわせが宅配便で送られてきたし、クリスマスには赤いバラと白いかすみ草の花束を胸に抱いて帰ってきた。去年の秋の誕生日にはサーモンピンクのバラとやはり白いかすみ草の花束をもらい、その前は盛夏に、大きな甘いスイカが二個、やはり宅配便で送られてきたのだった。

母親である私が知っているだけで、こんなにあるのだから、もしかしたら外にもネットクラスやブローチなどのアクセサリーの類も、プレゼントされているのではないだろうか、という気がする。

若いころはもてたつもりだった私だが、ボーイフレンドからバラの花束をもらった経験はない。女ならだれしも一度はバラの花束を贈られて情熱的に愛の言葉をささやかせたい、と内心願っているものだ。

成人式に花を贈ってくるなんてなかなかいきなボーイフレンドだなあ、と思っていると玄関のチャイムが鳴った。ドアをあけると、花を配達にきた花屋さんだった。花屋さんは大きなビニール袋から慎重な手つきで、かごに盛られた花を取り出した。受け取った盛り花を一見して私は思わず目を

みはった。色彩の華やかさと美しさにため息がもれる。

しずしずと手にささげ持ち、居間のテーブルの上に飾ると、甘い香りが部屋中に漂った。ピンクのバラ、赤いカーネーション、黄色いフリージア、スイートピー、白いレースフラワーなどの香りのある花をあつめて盛られている。花の間に、成人式おめでとう、Y、と書かれたカードが立ててあった。

カードのサインを見ていると、以前、留守中のえつ子にかかってきたYさんの電話の声が、私の脳裏によみがえってきた。あのときの彼の声は甘い響きの低音で口調もきびきびとしていた。いかにも頭の回転の良さそうな若々しい話し方でもあった。もっとも私はすてきな声の持ち主だというだけで、好感を抱く傾向にあるのだが。

うーん、これが今若者たちの間ではやっているというミツグ君なのだろうか。若いうちは女って得だなあ、とつらやましくなった。

二十歳になったばかりというのにもうミツグ君が出現したなんて、さすがは我が子だ、と変なところで関心しているうちに、

各地で文章講座を

東京とその周辺で、これまでしばしば「ねいふ」文章講座が開かれました。編集長田中、副編集長和田が講師で、公民館の主催です。

東京以外の各地でも、おそらく要望があるのではないかと思いますので、読者がお住まいの地域の公民館に申し入れて下さるよう、お願いいたします。

一回の講義ですが、どうすれば素人の文章の持つ力を引き出せるかを中心に、初心者のためにわかりやすい添削の実例も取り上げて指導いたします。くわしくはハガキまたは電話で編集部にお問い合わせ下さい。要旨を書いたものをお送りしますので、それを見せたい公民館にお申し入れいただくとよいと思います。



ふとひらめくものがあつた。

もしかしたら、Y君はミツグ君どころか、夫候補生かもしれないと。

なにしろ、Y君は某大学医学部に在籍している医学生なのだ。そのうえ、お父さんとお兄さんがお医者さんで、お母さんは薬剤師という医学部一家である。I県にある実家はその地域ではちょっと名前が知れて

いるらしい。

Y君が将来、医師になるのが確実なら、高学歴、高収入。身長はしらないが、多分普通の身長はあるだろう。おまけに彼は次男である。うん、何といっても次男というのがいい、と単純な私は、Y君をえつ子の夫候補生に仕立ててしまった。明るい展望の予感に、なんとなくウキウキして日中を過ごす。

都心のホテルで友人とディナーを楽しみ、夜遅く帰った長女は、Yさんからの盛り花を見ると当惑した表情を見せた。

「ね、すごいわね、きれいでしょう？」と私。

「ふーん、Yさんからね……」

「Yさんってリッチで気がきく人なのね」「うれしいけど……」

長女の表情はどこかさえない。手放しで喜べない様子である。

「ね、Yさんって、あなたにかなり気があるみたいよ」

「でもさ。私、太ってる人ってダメなの、いつもおいしいもの食べているらしくて彼、太ってるのよね。私、生理的にダメな

のよ。」しんらつな長女の言葉に私はがっくりした。輝かしい未来が一瞬にして崩れ去る。

そ、そうなの、でもね、一応キープしていた方がサ……と私はあきらめきれずにつぶやいた。

案ずるよりは産むがやすい

岡山県津山市●餅原ひろ子(42歳)

夕方仕事を終えて帰ると、犬小屋の中から見知らぬ顔が、こちらをうかがっていた。まるでアイラインを入れたかのように、黒くふちどりされた、つり上がっている目が、私をにらんでいる。

「なんなんだ。この恐ろしい犬は」

おっかなびっくり犬小屋をのぞくと、頭と足は茶色、胴体は黒色という何ともみっともないしば犬の雑種らしいのが陣取っている。

それだけならまだしも、彼女のお腹には、産まれたてらしい、ぶよぶよとした、黒と

茶二匹ずつの子犬がへばりついている。

見ず知らずの犬にねぐらを奪われた、我が家の血統書つきの雄のしば犬テリーは、いったい何がおこったのやらと、小屋のわきでボカンとしている。

夜遅くなんても、つり眼の犬は、子犬が乳を飲みやすいように体を横たえたまま、狭い犬小屋から一步も出ようとしない。

家族三人かわるがわる犬小屋に近づくと、見知らぬ人たちから逃げだしたいのに、下半身のお荷物のために一步も踏み出せない犬のくやしさがよくわかった。

だから彼女は必要以上に目をつり上げて、私たちをにらみつけているのだ。

でも、いとおしそうに小犬をなめている様子を見ると、お腹がすいているだろうにとかわいそうになった。

うなり声こそ出さないものの挑戦的な目つきに、手を差し出すのはこわくて、菓子パンをさつと小屋に投げ入れてやった。

するとしばらく様子をうかがってから、首だけ動かしてパンを取りあげ、ガツガツと食べ始めた。

「目があいて動きまわるようになったら、

情が移って処分しにくいから、早いうちがいいよ」と好意的だった近所の人たちも、だんだんと「子を持った親犬は気がたっているから近くで子供を遊ばせられない」と批判的なことを言うようになってきた。

夫に「何とかしてよ」と言っても、いつもは即断実行型の夫がいつこうに動くとうとしない。

「ええい、こうなったら、私がやるしかない」、私は決心した。

二週間ぐらいたったころ、母犬は私たちに少しずつ警戒心を解いてきていた。昼間は用足しとえさを食べる時ぐらいしか、めつたに犬小屋からは出ない。そのほんの少しの機会に母犬をつまかえ裏庭につないだ。

そして、まだ目も開かず、動き回りもしない肩を寄せあった四匹を、犬小屋に敷いてあった毛布ごと、一気に段ボールに入れた。

保健所へ向かう車の中で、私は涙ぐんだ。そして何もかも我が家の飼った犬テリーのせいだと思腹がたった。

隣の奥さんが、時おり外をうろついているあの犬をかわいそうに思って、夜残り物

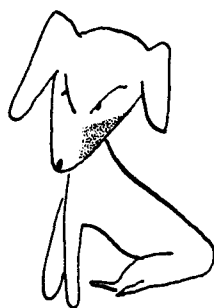
を外に出しておいたという話は後から聞いた。

彼女は、「あー我が家で産まなくてよかった」と私にうちあげたが、まったくテリーがもつときせんとして追っばらつてくれていたら、何も今私がこんな思いをしなくていいのだ。

保健所の窓口にはいかにも公務員というイメージ通りの、年配の女性が座っていた。用件を告げると、後ろの席に向かって、「ほうきけんの係の人」

と面倒臭そうに、大声で呼んだ。

あー放棄犬なんて言葉があるのだ。何も迷わず持って来たらよかったのだと思っていたら、学校を卒業したてのような青年が



現われた。野犬狩りとか作業服とか想像していたのだが、まだ社会人の顔になりきっていない真新しい背広を着た青年だった。

差し出された帳面に名前と住所を書く。彼は「ご苦労様です」と、ていねいにおじぎで引き取ってくれた。それでそれまで持っていた四匹の命を奪う後ろめたさが、少し救われたような気がした。

家にもどると、所在なさそうに犬小屋に座っていた母犬が、皮肉なことに初めて私にしっぽを振って迎えてくれた。

母犬はそれから当然のように犬小屋で寝おきし、とうとう我が家に居すわってしまった。

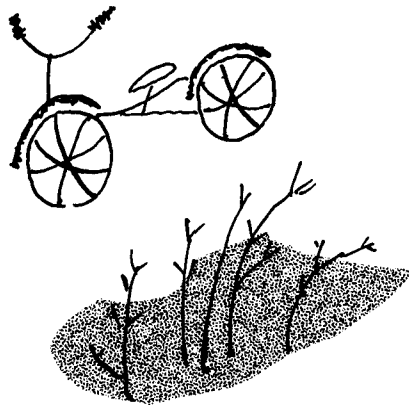
名前は全員一致で、ノラ犬のノーちゃんが決まった。また、決して頭が悪いわけではないが、ごろ合わせの良いところから、ノータリンのノーちゃんとも呼ばれている。

自転車

東京都府中市 ●小松智子

三男を保育園に預けるまで、我が家では車を買わなかった。それだけに自転車と子育ては切っても切り離せない。

長男がお腹にいるときは、大事を取って、一度も自転車に乗らなかった。当時、我が家を中心にして一キロ四方に、店といえは、



スーパー、豆腐屋、パン屋、夕方だけ道端に品物を並べる八百屋が各々一軒ずつしかない、という東京としては不便な地を、交通機関は二本足という、明治時代並みの生

活を送っていた。出産後、自転車に乗って買い物をした初めての日、なんて便利なのだろうと、感激した。

次男妊娠中は、自転車を手放せなくて乗り続けていた。が、さすが予定日が迫ってくると、股を開いて自転車をこいでいるうちに、子どもがごろがり落ちてきそうな気分になって、出産一週間前まで自転車はやめた。

三男のときは、ころがり落ちるなら落ちていい、てなもので、出産予定日に自転車で駅まで行って、電車に乗って、産院まで歩き、その日の夕方生まれてしまった。

このような親の元で、長男は自転車に乗れるようになるやうに、どんな危ない道でも親の後を懸命にこいでこざるを得なかった。私が渡ったときは青だった信号が、長男が渡る時には赤になっていたり、例のごとく自転車の前と後ろに次男と三男を乗せ、たくさんの荷物を持った私は、遊歩道のくいに自転車が挟まれた形で倒れた長男を助けおこすこともできずに「自分で起きるのよ」と怒鳴ったり、よく交通事故に遭わなかったものだと思う。

ある冬の夕方、三人の子を引き連れて自転車ですぐのバスターンに疲れ、十分間だけ四歳と二歳の下二人を家に残して長男と出かけ、戻ってきてみると、二人が私の後を追って行方不明。四十分後、バジャマ姿ではだしの二人を見てジン……。

今年の春には三男も保育園を卒業する。そしたら、後ろについている子ども用の座席をとって、独身みたいな顔をして、さうと自転車走らせよう。

私は農家の お嫁さん

三重県四日市市 ●高島直子(28歳)

小学生のとき、大草原の小さな家のお父さんにあこがれていた。強くて優しいローラの父さんはとても素敵だった。どんなに大きな問題が持ち上がったって負けることのないたくましさ、温かい思いやりのある人柄に理想の男性像を見た。私もあんな人と結婚したいと、友達と語り合ったものだ。

アメリカの広い大地も魅力的だった。どこまでも続く草原の中に、私自身の身をおきたかった。牛を飼い、乳を絞る、チーズを作る。刈り入れどきともなれば、家族総出で畑に出て額に汗して働く。何てすてきなんだと、労働の大変さも知らずに想像にふけったりした。

現実的なことには無知な子供時代が過ぎ、農家の生活というものは甘いものではないということが分かってきたころには、そんな生活にあこがれていたことさえ忘れかけていた。封建主義と、男尊女卑世界の象徴であるかのように農家をとらえ、そんな職業をなりわいとする男性とは絶対に結婚したくないとさえ思っていた。

高校を卒業して、名古屋の銀行で働きました私は、数字と時間に追われる生活になった。コンクリートと機械に囲まれる毎日、私の神経をすり減らした。くる日もくる日も現金を数え、どんな嫌な客にも笑顔で応対し、気の合わない上司の下での毎日は最悪だった。落ち込むことがとても多くて、あまり思い出したくもない。

そんなある日、一人の青年と出会った。

市の勤労青少年ホームでボランティア活動をしていたときである。彼は子供相手の人形劇をしていた。素朴な、いかにも優しいので、それでいて非常に個性的なユニークな人物であった。

「実は、たんぽがあるんだ」

初めてのデートのとき、突然彼の口から思いがけない言葉が飛び出した。建設関係の会社に勤めている、普通のサラリーマンだと思っていた彼は、兼業農家の一人息子だったのである。

現在の私は、四世代同居七人家族兼業農家の主婦である。結婚して九六年、今では四歳と二歳の二人の男の子の母親になった。

嫁いだころは、カルチャーショックをずいぶん味わった私であるけれども、今は生活にも慣れ農家の暮らしはいいものだと感じている。何よりも、家族が多いというのはいい、けんかもずいぶんしているけれど、毎日いろんなことがあって面白い。

今年八十五歳の祖母は、「きんさん、ぎんさん」に刺激され、ますます元気が良い。自給自足の生活を、暮らしの中に生かしている貴重な人物である。しっかりしている



ため、相当しんらつなことを言う。だけど、根は優しい人なので、少々口論しようが気にならない。

夫の両親。四人の弟妹たちの面倒をみて、すべて独立させた。人情家の母は、そうとう気の強い祖母の下で苦労してきたようだけれど、「江戸の仇は長崎で」と、嫁の私をいびりもせず優しい。私は運が良い。父は、ちょっととぼけたところがあり、怒ったところをめったにみせない。私からみると、似たもの夫婦といったところである。

そんな三人の大人に育てられた夫は、「ぼんぼん」である。苦労知らずで、おっとりしている。二人の子供たちは、夫に姿かたち、性質をも受け継いでいるようで、穏やかでどちらかというと気が弱い。長男

は夫の幼いときのように、友達の家遊びにいく勇氣さえ持たないところまで似てしまった。

大勢の家族に囲まれて過ごす毎日忙しい。農繁期の春ともなれば、非農家から嫁いだ私とて種まきやら、ハウスの水やりやら手伝う。物珍しさが手伝って、わりと楽しくやっている。だけど将来は母屋の嫁として、家のすべての切り盛りを任されることになる。そのことが楽しみでもあり、不安でもある私である。

二人組の宅配便屋

東京都世田谷区●萬匠範子

「わたし、今月末からアルバイトをするの」と友人T子から電話があった。T子は四十歳。短大卒業後、銀行に勤め一年もしないうちに、十歳も年上の人と結婚した。子供はなし。都心の広い庭つき平家（／＼）一戸建てに、夫としゅうとめと、結婚してない夫の兄と住んでいる。四人の年齢の合計はなんと二三〇。結婚いらいずっと模範

的な専業主婦をしている。何か仕事をしたいという気持ちは前から持ち続けているが、少々ボケもみえてきたしゅうとめを一人残しては働きにもでられず、かといって一日中昔話をするしゅうとめの相手は、ストレスがたまるばかりである。

「ヘーッ。何？ 伊勢丹ストアの検品中」と私、T子がたまにするのは、このスーパーの在庫調べのアルバイト。スーパーの閉店後だから夜の二〜三時間の仕事で、今のT子に許される数少ない仕事のひとつだ。しゅうとめは夕食後は、早く休んでしまうし、兄が帰宅している。

「ちがうの。デパートの配送」

「えーっ。クロネコヤマトみたいの？」

「年末だけの季節労働者よ。一カ月だけ」

「で、おばあさんは？」

配送所に行ってきたT子の話を聞いてみよう。

なんといっても年末は人手の欲しいとき。T子のような普通の主婦の力も大きな戦力となる。配送所の責任者は大喜びしてT子を歓迎した。T子の愛車に荷物をのせ、宅配することが決まった。そしてT子はこう

尋ねた。

「あのー。同乗者がいてもいいでしょうか」
「同乗者？」と責任者は少々とまどいながらきかえた。

「イヤー、乳幼児はちょっとねえ」

「いいえ。家の母なんですけど……」

今までに小さな子供をのせて宅配する人は、ごくたまにいたらしいが、年寄りを助手席にのせ仕事をした人はいなかった。でも丁子の誠意と家の事情を分かってくれてOKとなった。ただし会社は何があっても責任は負わない、という条件つきである。

しゅうとめは明治生まれの八十五歳。薬剤師の資格を持つインテリ家つき娘である。お嬢さまがそのまま年をとったような人。絵も書もりっぱなものをかくが、中途半端な趣味はブライドが許さないのか何もしない。近くの年寄りとおしゃべりしたことなどは皆無である。楽しみは洋画のビデオをみるこゝと、そしてドライブ。助手席から外の景色が変わるさまをみているのが好きだ。家のポストに入っていた宅配のアルバイト募集のちらしをみた丁子はピンとひらめいたのだ。

はじめはぎげんで車に乗っていた。ちょっと想像しても愉快ではないか。師走の昼下りの住宅街に歳暮の包みたくさん積んだ臨時宅配便屋の乗用車。何気なく車の中を見ると、和服をビシッと着て、背すじをピンとのばした老婦人がニコリとめせず助手席に座っているなんて。

でもなんでもすぐあきてしまう年寄りのこと。途中で車を降り、「私は帰る」と方角もかまわずスタスタ歩きだしたり、「今日はいもう行かない」とすねたり、そのたびになだめたり、すかしたり、たいへんなことも多かったらしい。

そして、とうとう十二月二十七日。無事終了。

収入は、しめて二十五万円あまり。お金をもらうのはもちろんうれしいが、働くことへの喜び、充実感を感じた一カ月。

「今日で終わったの。あの地域のことはもうプロよ」と自信に満ちた声で、電話をくれた。

おめでとう丁子。年寄りをかかえていたって考え方次第ではできないことはないのだ。寝たきり老人をかかえている人からみれば、確かに丁子は恵まれている。しかし自分の現在の状況を嘆き、あきらめているだけでは何も始まらない。その気さえあれば、新しい道は必ず開けるのだ。

いびき

大阪府豊中市●中松ミナ子(56歳)

カーテンのすきまからさし込む朝の光の中で娘は「まあ、お母さんのすごいイビキ。よくお父さんは三十六年間文句も言わず一緒に暮らしてくれたもんだわ、私なんかおかげで眠れなかったんだからア……」と露骨にあきれ返った口調で言った。

一月末、娘は赤ちゃんができたらしい、とうれしそうに告げたが、直後切迫流産の恐れがあり、そのうえムコ殿が一週間の出張だからと、家業に忙しい私をウムを言わず緊急召集しておいて……。今までささやかな家族旅行以外一人旅の経験をもたない私が、新横浜までのひかりの中で、どれほど心細い思いをしたことか。二つの乗り替えを経てようやく娘の家にたどり着いた

時は心からホッとしたものだ。その夜、多少のイビキは大冒険ゆえの疲労からのものだったに相違ない。弁解につとめたのである。しかし娘は、

「違うわよ、あれは相当年期が入っている。Ｙさん（ムコ殿）もイビキはかくけれどお母さんには完敗よ。ほんとよく言えば豪快、その実体は下品と言うほかないわ。離婚もされず一度とて外泊しなかったお父さんの忍耐に感謝しなさいよ」

内心ギクリ、

「……そうお、そんなにひどいの？」

「そうよ、すごかったんだからア」

眠ってのちの我が身の行動（？）だけに一切知るすべもないこの一件、いかな私も次第に落ち込み始めた。

「そうだ、今夜お姑さん^{かみ}に報告しよつと」「ちよつと、何も母親の恥を吹聴することないでしょう？」

「ダメ。私を睡眠不足にさせたバツッ」

「でもオ、一人で上京するつてこと私のような箱入りババアには大変なことなのよ。だからすぐく疲れてたからイビキかいたのよ。今夜はかかない、きつと！」

「いいえ、今どき小学生だって目と口と耳を使えば日本中はおろかアメリカだって一人で行ってしまうわ」

と娘は憎にくしく言うのだった。

夜、ムコ殿の母上から定期コールが鳴った。まさか私がおなかを痛めた実の娘が、母親の恥をさらすとは思ひもしなかったが、なんと娘は「お姑さん、母ったらすごいイビキなんですよ……。いいえ、Ｙさんよりずっとずっとすごいんです……、いいえ、そんな疲れてることないですわ、ひかりで座って来たのですから……ハイ。もうあきれ果ててるんですよ」

と私のことをコケにしている。義母を相手に母親のイビキをサカナに会話を楽しんでいるのだ。（こん畜生！）

とうとう私も開き直って横でゲラゲラ笑いまくってやった。あちらへ聴こえるように。やがて出張から戻ったムコ殿は、

「おかあさん、ここ（杜宅）は狭いからボク駅前のビジネスホテルに泊まってきます、だから母娘でゆくりしてください」

と気を遣ってくれたが、

「そんな一晩ぐらいいいじゃない、それに

今日はゆくりさせてもらったからイビキかかない自信があるのよ」

すでに告げ口されている私は気楽に恥じらいもなく断言した。

ムコ殿ニヤニヤしながら「そんなこと気にしないでください」と如才なく言い「狭くてすみませんが、それなら大きな川の字で寝ますか」と押し入れからふとんを引っ張り出してくれた。

翌朝、娘の第一声「お母さんすごかった！」（ヤレヤレ……）。私はその日の午後、そそくさと帰阪した。

「ごくろうさん」と夫に迎えられて思わず「ごめんね、三十六年間騒音に耐えてくれて。昼間はしゃべって笑ってやかましく、眠れば大イビキかいて……」

「ハハハ。しゃアないなもう慣れてるよ。まあ今じゃ横でゴーゴー聞こえなかったら淋しいくらいや、心配するな」

なんという寛大さ、なんとという優しさよ。これでこそ私の背の君である。せめて明日からは昼間の騒音だけはつつしむことにして、イビキの治る方法を研究しようと思に決めたのである。

読・ん・で・み・ま・し・た

ヒモのはなし

作品集「いつも心に太陽を」より
つかこうへい 著

埼玉県浦和市

佐藤

乃麻(32歳)

くだらない、実にくだらない、よくある恋物語。分かっているのになぜだか不思議に泣けてくる。

難しい理論も問題提起も、心にしみる恋愛論さえも、その恋物語の中には見当たらない。

ただ流れ続けるのは「連れて逃げてよ」「ついておいでよ」ってなわけで、何の因果か一緒になった男と女。前に進むことも後ろを振り向くこともできないで、袋小路の中をはいつくばるようにして生きる、こっけいでやり切れないほど切ない二人。

ストリップバーの明美^{あけみ}さんは男をささえることに酔いしれながらも、たくましく明るく開き直り、ヒモの重^しさんは惨めさを力にしながら、最後の男の砦^{とりで}を守ろうとするかのように小銭をためる。

自虐的で情けなく、哀れで優しい浪花^{なな}節。傷つくことだけ上手になって。

だけどこういう感覚って、認めるのは嫌だけど、自分の中にもどこかで流れているような気がして、重さんの赤い貯金箱に小銭を入れない。

確かに、極端すぎる話だけれど、この情けなさ^いが愛^{いと}しくて、この切なさ^いが分かる

るような思いがして、胸の奥がしんと泣けてくる。

ちょっと退屈だけど幸福、それなのにセンチに泣いてみたい、そんな夜には読んでみて。

この本を読んだからって、楽しくなることも笑いたくなることも、ましてや元気になるなんてことも多分絶対ないだろうけれど、しみりと切なさ^いが胸に広がり、悲しさと一緒に優しさに包まれて、大事なだれかの帰りが待ち遠しくなるに違いないから。

いつも 心に太陽を



角川文庫

角川文庫 四七〇円

アリーテ姫の冒険

ダイアナ・コルルス作
グループウィメンズ・プレス 訳

勝浦恵美子

原題を“The Clever Princess”と
いう。

美しさゆえに王子の愛を得て幸せになれる……というお姫様物語のパターンに反発したイギリスのフェミニストの創作童話である。日本で出版されて二年、たかが実験、とトライしなかったが、六歳の双子の娘たちに贈られたので読み聞かせてみた。すると、二人の瞳はページを追うごとに輝き、私まで一章、もう一章と引き込まれてしまった。

父王の思惑とは反対に、賢く、有能に育ったアリーテ姫はなみいる求婚者を退散させる。が、宝石に目がくらんだ父王は魔法使いボックスに姫との結婚を許してしまう。「もし三つの問題が解けなければ姫の首をはねていい」という恐ろしい条件付きの結婚である。これに姫が従

わなければならぬ設定には無理があるが、以後は常識破りのストーリー展開だ。

苦境に立った姫に魔女ワイゼルは「三つだけ願いのかなう指輪」を渡して励ましてくれる。ところが、地下室に閉じ込められた姫は指輪に、絵の具や布地や糸やノットなどを出してもらったのだ。これらは姫の危機一髪を救うには何の役にも立たない。ただ、閉じ込められた姫の無為と退屈を救ってくれるのだ。お陰で姫は捕らわれの身でも人間らしさを失うことなく、指輪の助けもいらぬほどの、持ち前の知恵と実行力をええさせないでずんだのだった。

優しさで荒馬を乗りこなしたり、逆境にあっても身の回りを気持ちよく整える姫の能力は、「男にできることは女にもできる。男が苦手なことも女はできる」

という作者からのエールだ。おまけに姫の助っ人は、ワイゼルも料理女アンブルも小さなヘビも全員、女性を象徴している。

姫の後ろ姿しか描かれていないことは娘たちもすぐ気付いた。「かいてあげる／アリーテ姫のお顔」と口々に言う娘たちは、やはり姫が「未摘花」ではないと信じたがった。

幼い読者の為欲を言うなら、父王の男尊女卑のせりふを、念のためすぐ否定しておいて欲しかった。逆説のせりふであることが即座には理解できないであろう娘たちに、ひょっとして生まれて始めて耳にする女性蔑視の言葉を聞かせるのは、母として痛々しく、ひやりとする思いだったと付け加えておく。



おじいさんの戦争は終わつたか

近藤泰年 著

東京都八王子市 和田 好子

高齢化が進んでどこへ行っても老人の姿が目立つ。夫婦二人連れで美術館やデパート、公園とゆったり歩いている七十年代前後の人たち。

日本の高度成長を支えた世代といわれるが、この年齢の男性は戦中派なので。企業戦士であるのみならず、本当の戦士として戦場に出た人が多いのである。

彼らが一体そこで何をしてきたのか、現在の平和な表情からはうかがい知れないけれども、実は恐ろしいことをやった人も混じっているに相違ないのだ。

この本は、一九五二年に生まれた息子が、一九八四年になって、父親の戦争体験を聞いて書いた「聞き書き」である。「おじいさん」、つまり著者の父親は一九四二年、日米開戦の翌年に二十一歳で召

集され、中国に送られた。着いてすぐ、上官から「お前たち何のために戦争に来た?」と問われ、初年兵たち口々に「天皇陛下のおんために」と答えたところ、「それは間違っではおらん。しかしこのことはよく覚えておけ。お前たちは人を殺しに来たのだ。殺さなければ殺されるのだ」と訓辞される。

軍隊はウン(運)隊だという。戦場で凄惨な死闘を演ずる者がある一方で、後方に留まり酒を飲んで軍歌を歌っただけで、帰って来る者もいる。「おじいさん」は運が悪く、上官に推せんされて憲兵になり、スパイ容疑者の中国人を拷問したりした。所属の隊が十二人の容疑者を死刑にしたので、戦後戦争犯罪人として逮捕されてしまう。十二人が殺された日、

彼は上官と喧嘩(けんか)しすねて仮病をつかい、入院していた。アリバイのおかげで死刑をまぬがれ生還したものの、久しく戦争裁判の恐怖に悩まされて逃げ回った。

中国人の首を切り、またびくびくしている胴体にとどめを刺すというような、平和な社会なら凶悪犯罪としかいえないことが、日常の「任務」、しごとだったという世界。「おじいさん」にも罪悪感はないのである。

貧しい農民であり、ごちそうが食べられるから軍隊はいいと思い、ただ要領よく立ち回ることしか考えなかった「おじいさん」。こういう庶民に悪事をさせる政治というもの。我々は監視を怠ってはいられないし無知であってはならない。

農山漁村文化協会 一二〇〇円



第四回子育て会議

子供の自由をどう認めるか

出席者

明田 珠美子

浅田 節子

春日井美美子

南 千歌子

山下 富代

山本 真理

編集部

和田 好子

司会

田中 喜美子

司会 今回は「子供の自由をどう認めるか」っていうのがテーマです。子育てをしているとき、親がそれをどう受け入れてやるか、ってことが非常に大きな問題になってきますよね。

今まで子育て会議では非常に細かいことを扱ってきたんだけど、あまり細かすぎて面白くないんじゃないかという声があった、ではもっと大きなテーマにしてみようということで、今回はその第一弾として、自由の問題を扱うことにしました。

皆さんの、私はこうやってきたという体験を踏まえて、具体的な話を交えながらおっしゃっていただきたいと思います。それじ

ゃあ、山本さんからお願ひします。

自分の言いたいことは
言える子に

山本 うちが上が小学四年の女の子で、下が四歳の男の子です。二人ともゼロ歳から保育園に通ってますので、しつけに関してはプロにおまかせ、という非常に楽な育て方をしてきました。泥んこ遊びにしても、親ができないくらいドロドロにさせて、ワイワイ遊んで家へ帰ってきたらあとは寝るだけ、という生活。

当時私もフルタイムで働いていたし、連れ合いも私も市民運動までやっていたので、

どっちかが必ず十一時過ぎて帰ってくるという綱渡りのような生活をしていて、子供の自由なんて考えないでやっていった。

上の子は小学三年までは学童保育に行っていて、その枠の中で一応心配しないで楽しんでたんです。ところが学童保育がなくなったらこれは大変で、娘の一日を把握できていないことがいっぱいあって、宿題は一切しない、忘れ物はする、というんで、最近ハタと慌てるところです。保育園、学童クラブという枠がとれちゃったら、実際には自分でできなくなっちゃう。例えば、朝起きる、顔を洗って歯をみがく、これができない。ガミガミ言わないと。保育園へ行っているときは時間がないんで親が先回りしてダッダッダッとしていたけど。

意識してしつづけているのは、食事に関しては厳しくやっています。

司会 どういうう？

山本 たんぱく質、色の濃い野菜、色の薄い野菜、この三つを必ず食べる。自分のお皿に取ったものは必ずきれいに食べる。それくらいは意識的にやっていると、あと学校の先生に関しては、私は権威は必要だ

と思ってますので敬語は使います、子供の前で話すときに。そんなとこかな。

司会 なるほど。じゃ、明田さん。

明田 うちはずっと私が育てているわけですけど、いま小学校一年生の女の子と、四年生の男の子、五年生の男の子の三人です。かなり子供の意志とか感情は尊重して育てています。

特に遊びの確保というか、自由な遊び場所、遊ぶ時間は確保してあげる、という感じで、何かにつけ自分の意志でさせるということを尊重してきたつもりです。ただし、厳しく怒ったのは、人を傷つけること、「バカ」と言うとか、そういうことについてはしつこく言ったら、カミナリを落としたりもしました。

遊びを確保してあげるといっても、子供の言いなりになってるんじゃないくて、こっちのわがままも一応あるので、つきあってられないときには子供と話をつけて親が遊びにいくとか、そういうことはしてきています。

あと、小さい子供でも泣くのは自由だと思うんですね。男だから泣くとか、そう

いう言い方はしなくて、そしたら一年生になっても廊下で大声で泣くような子になってしまつて、泣くことが全然恥ずかしくない。これはちょっと失敗したかなと思つて。彼が泣くのを耐えることを覚えたのは三年生くらいなんです。通信簿に、感情の起伏が激しすぎて情緒不安定と書かれてますけども。

司会 ほかのお子さんとの差はないんですか？

明田 うちの子は三人ともわりとマイペースですね。表現意欲がおう盛で、みんなしゃべりたくてしょうがない。まず、自分の言いたいことは言える子にしたいと思っています。

外との攻防戦

山下 小学二年の男の子と幼稚園年中組の男の子、二人の母なんです。二十三歳で子供を産みましたので、親子という感覚はあまりないんじゃないかと思うことがあります。一緒に生活している仲間という感覚があって、母親づらするのはあまり好きじゃないし、強制的な言い方はしたくない

と思ってやってきたつもりです。

もちろん子供の自由は認めますけれども、私の自由も認めてくれ、と。自宅で添削の仕事をやってますので、子供のやりたい気持ちも尊重するけど、私のやりたい気持ちも尊重してほしい。そういう感じだと思います。

司会 それはある程度大きくならないとなかなかできませんね。おいくつぐらいのときから？

山下 上の子が八カ月くらいから仕事を始めて、二歳ごろぐらいで分かったように思います。真剣に目を見て話しますから、彼らも分かってくれる。

春日井 私は、中学二年と小学五年の男の子二人ですけれど、男の子でよかったなあと思います。女の子だったら同性でイビられて、母親としてすごい点数をつけられていたんじゃないかと思うんです。

まあ、子供もだんだん大きくなると、食べるものがあればよい、といった感じなので、えさだけはあると思って気をつけています。私は結婚するのが大っ嫌いで、結婚しないでずーと逃げてきたんですが、自分の意

見なんか出せない家庭に嫁いだものですから、結婚十五年目にしてやっと自分の時間ができたかなというところです。

上の子は私の意見はほとんどなくてみんなで育てたものですから、ヘンテコリンになっちゃった。登校拒否をおこしたりしました。下の子はハッキリした子で、自己主張が強くイヤだったら学校へ行かない。

今日も風邪ひいていましたし、学校へ行きたくないと言うので、まあ、たまにはいいかと思って「休んだら？」と言ったら、みるみるうちに顔が明るくなったんですね。

でもこの子は明日は行く、ということが分かるんです。大人の圧迫をあまり加えなくても。いま学校が大変だからせめて家の中ではノンビリさせよう。落ちこぼれちゃうかな、という危険もあるわけですけど、落ちこぼれても参考書はあるし、落ちこぼれの子を対象の学校もできるだろうと思うし、まあ、そういうところへ行けばいいと思って育ててきました。

司会 次は南さん、どうぞ。

南 うちはいま、二十一歳になる男の子と十八歳になる女の子がいます。



南 千歌子さん

私は結婚したとき、すぐくうれしかったのね。親の支配下から逃れて、冷蔵庫も洗濯機も全部自分のものだと思ったらくれしくてね（笑）。子供を産んだときも、この子も自分のものだと思ったもんで。子供のために自分の時間がなくなっちゃう、メチャクチャになるとは思ったんですけど、すぐ気をとり直して、子供の犠牲になるもんか、まず自分の生活が大事だと思ったわけ。それで、朝昼晩と生活を食事で仕切っていたんですよ。

上の子がものすごい自己主張の強い子で、私も相当強いから、これは大変だね、お互いの自由を確保するために下の子が八カ月になったころ、砂場をつくってやったわけ。



浅田節子さん

自分で穴を掘って囲いをつくって、放し飼いをするわけですよ。朝早くから子供を外で遊ばせて、すごくうれしいわけ、私も子供がまとわりつかないから、食事の支度とか本を読むとかできる。雨の日はおふろをたいといてね、むこうがくたびれたころ親も一緒になっておふろへ入って。

こちら自由になりたいけど、向こうも自由にしてやると満足で、夜も良く眠る。

では、何から自由がむしばまれていくか、親子のいい関係が壊れていくかというところ、食生活からすごく乱れてくるわけ。友だちと遊ぶようになってその子の家へいくと、お菓子をもらっちゃう。これといかに対決するかという問題があって、食べさせない

というのは相手の好意を無にすることだし、子供がやたらよその家にあこがれるようになる。困るから、お菓子は子供の食事がすむまで横においといて、食後に食べようというところ、少しでも非常に満足するわけ。おなかいっぱい食べるとお菓子があんまりおいしくないから。

そうやって外との攻防戦をやってきたわけ。

自分が自由になったかったら、子供のやりたいことは状況を設定してうんとやらせてやって、私も自由になる、そういうふうにしたんですけどもね。

子供の才能を伸ばすのは親の役目!?

浅田 みなさん、お若い方ばかりで年を言うのが恥ずかしいですけど、子供が三人、長男が三十四歳、長女が三十二歳、次女が二十八歳です。うちは育てるときは苦しかったけど、いまはすごくもうかっているんですよ。小さいころ、ふすまとか壁とか空いているところに全部紙を張って、クレヨンで子供に好きなように落書きをさせ

たんです。その間私は好きなことができるわけ。でも、張り替えるのが大変なの(笑)。もう面倒くさいなあと思ったところに幼稚園で講演があったんです。子供のせつかく出た芽を摘み取ってしまうのはほとんどの場合母親である。子供は自由な遊びの中から何かを自分のものにし、学んでいくと聞いて、落書きの中から何かを与えようと決心したもんだから、それから喜んで張り替えてあげるようになったんです。

まず子供が学校から帰ってくると、落書きしなさいね、いっぱいかくところつくってあるわよ、と言うんです。それから宿題をやるのよと言うと、ハァーイなんて喜んで一生懸命落書きするんです。

司会 みんな絵のうまい子供になりました?

浅田 そしたら次女が美人画をかくようになってちゃったんですよ。

一同 あらァー、ウァァー(感嘆の声)。

浅田 小さいころお母さんが落書きさせたのがいますごく役立ってます、って。

司会 こりゃ、「わいふ」の会員の間で落書きがはやるかも。

浅田 だけど忍耐ですよ。すぐ一杯になっ

ちゃうんだから。張り替えがすごく大変だったけども、それがいま喜びになって返ってきているわけですよ。だから答えが十年後、二十年後に出てくるんです。

長男もね、小さいころプラモデルやオモチャを、壊しては組み立てていたことが役立って、いま、ハーレーといって、オートバイを組み立てて自分でデザインすることやうってんのね。来月、初めてショーに出すんですけど。

息子の部屋へ入るときはスリッパをはかないとけがするの。部品だらけで。そりゃ忍耐ですよ。掃除したいのをグツと我慢するわけですよ。

その子の持っている何かを見つけてあげるのが親の役目なんですって。

南　うちの場合はね、音楽がとても好きだったんです。こんなちっちゃな二千八百円というプレーヤーを買ってきて、童謡なんかを聴かせてたわけ。そのうちいろんな曲を聴かせるようになって、ベートーベンの「運命」とかハチャトリアンとか、子供の喜びそうなものを買ってきた。そしたら夫がすごく怒るわけ。高いレコードだから

こういうプレーヤーでかかせるのは駄目だと言っただけけども、子供はガチャガチャと持って歩いてすごく満足するのよ。

いまではね、音楽でお金をとってるんです、作曲料で。専門の勉強は全然しなかったのに。

小さいうちって、やりたいようにやらせると、それが自信みたいなものになって、大きくなるとそれを足がかりに社会からお金とってくるような気がする（笑）。

自由の責任

和田　そういうハッキリした傾向のない子ってたくさんいますよね。そういう場合はどうなんでしょう？　落書きをした子がみんな画家になれるわけじゃない。そこらへんが……。音楽とか絵の場合は非常に分かりますいけれども。

山本　うちの場合は、絵がうまいと先生には褒められる。じゃ絵が好きかというところではなくて、家へ帰ってポケーッとテレビを見ている。これでいつも私と怒鳴りあいになる。

和田　子供の自由を積極的に認めるとし

たら、テレビが大好きだったらどこまでも見させていいものかどうか。それはどうです？　山本　絵をかくとか工作をやるのと、テレビを受動的に見るのとでは明らかに違うと思う。

和田　好きなものがそういう良いものじゃなくてね、ヘンなこと、例えば、動物をいじめるのが好きだった場合、どうなんだろう？

山本　やっぱり反社会的行為が好きな場合は困るよね。

明田　才能だけの問題じゃなくてね、自由にさせてやるってことは、自分の世界を持たせるということで、自分の世界の中で遊べる子なんですよね。才能が花開く以上に大事なことは、その子自身が自分のしたいことを自分でできる、という自信を持っていることだと私は思うんです。それはすごくその子にとって一生の宝じゃないかな、と思いますけど。

司会　それはね、言葉でそういうふうに言うとは非常にいいことなんです。だれも否定できない。

ずっと前「わいふ」の投稿でこういうの

があった。絵が大好きで幼稚園へ行くまえに絵をかいている。もう行く時間だよと言ってもやめない、イヤ／＼ これをかいてちょうと子供は言うわけ。いま行かなかったらバスに乗り遅れるというので親は引立てた

いんだけど、連れて行こうとすると泣き出す。この場合、子供の世界を広げるために絵をかかせているべきなのか連れて行くべきなのか、それ皆さん、どう思われますか？

明田 それはもう、親の考えだと思う。

山本 そうそう。

明田 私の場合、子供は親とかご近所、外の子に迷惑のかからない限りにおいて自由なのであって、私に迷惑のかかることはしてほしくないです。

司会 でも、絵をかいていて幼稚園へ行かないというのは他人の迷惑にはなりませんよ。

明田 お母さんにとっては迷惑ですよ。その子が決まった時間に幼稚園へ行くということでお母さんの生活のリズムがあるんだから。

司会 じゃあその子のことはあまり念頭になくて、お母さんの都合でいいこと、悪

いことが決まるわけ？ そこをハッキリさせたい。

山本 それは抽象論でね、子供の自由とか言い出すと、いくらでも良いことは言えるわけ。私なんかの場合、保育園に来る偉い先生は「子供に早くしなさい、は禁句です」とおっしゃるけど、現実には早くおふろ



山本真理さん

へ入って早く寝てくれないと仕事ができない、というのがある。そんなこと言っちゃられない。子供をいかにこっちの都合にあわせるか、ということをやってるんですよ。たかが子供に自由なんかあるか、という気もするし。

整理整頓ができない、忘れ物が多いということについては、親が急ぎすぎて子供

が自主的にやるのを待たなかったせいかなと思って、子供に悪かったと思いますけど。

和田 私の場合、二人ともある程度自主的にやるのを待ったわよ。で、上の子は何年か待ってそれがいい結果になった。二人目のときもそれで行こうと思って待った。ところが、それがまったくうまくいかなかった。そして重大な結果を招いちゃった。

彼は時間通りに学校へ行けない、非常に遅刻が多いということで付属の大学へ行けなかったんですよ。先生のところへ行ってもお願いしますって言えば、行けそうな感じではあったんだけど、私はそれをしなかった。彼に責任を取れと言って、大学へ行かせなかった。そのために青春の初めにおいていろんなざ折をしちゃったわけね。

でも本人は全然後悔していない。平気なのね。そんなに重大だとも思っていないし、自分のやりたいことは外にもあるし。ところがまた、自分のやりたいことでも失敗した。その原因というのが彼に判断力がないこと、それから現実感覚がない。こうしなければこうなるといふ、二手も三手も先を読んで動くことができない。いまようやく



山下富代さん

現実感覚が身に付いてきたって感じがするんだけど、二十六歳ですよ。

だから私、いったいこれをどう考えていいのかわからないのね。つまりね、自由を与えればうまくいく、ってもんじゃない。あべこべにしたいことを彼にできるだけ自由によらせなかったら、これまた大変なことになってたと思うのよ。こっちのレールに乗りなさい、なんて言ったら大変なことになる。だから彼は失敗すべくして失敗したのよ。

山本 本人が納得できてればいいんですよ。回り道でも。

和田 まったく納得してるのよ。

浅田 三十すぎたら大丈夫。うちの息子

にもそういうところがありました。

和田 やっぱり子供と親はまったく違う人間なんで、性格により運命はつくられるし、子供がどうこうなっちゃうのは子供の責任だというしかないって結論ですね、私は。

常識的な生活

山本 私の場合はうちの母が支配的な人で、よく言えば母性的なんだけど、ともかく私立の女子校から一流大学へという自分のレールに私を乗せなきゃ気のすまない人で、私は途中で落ちこぼれて登校拒否になって高校を中退してうよ曲折したんだけど、そういうところになげに乗ってしまいうちはいる。やっぱりそういうタイプっていうみたいですね。親にひたすら従ってしまうタイプ。

明田 うちの主人なんか、親の望むようにスーと生きてきてる感じがします。人間はどっかでボキッと、自分は何だろうってところに必ずブチ当たるはずだと思うんですね。うつ病になっちゃったしね。そういう意味では、二十代であっちへ行きこっ

ちへ行きするほうが、自分で納得した人生でいいんじゃないかな？

和田 だけど、それはサ、親としてはものすごい迷惑なことですよ。私が思うには、こうしたからこうなったということが言えない、子育てに関しては。

南 でも、これが要^{かな}だったってことは言えますよね。

和田 私はそれも言えない。だってあんなに食事のことに気を遣ったのに、いったいそれが何に役立ってたか、私、分かんないしね。健康には良かったでしょうけど、それ以外のことは分かんない。

南 それとね、親がライフスタイルを持っているというのを子供に分からせたほうがいいと思うんですよ。

和田 それはどこの家だってそれなりのやり方があるって、それ自体はそんなにめっちゃくちなものではないと思うのね。朝ごはんをまったく食べさせないという家も珍しいだろうし、常識の範囲内でやってるだろうと思うのよ。でも私は、こうやりましたからこうなりました、って言われることに非常に疑問を持ってるわけよ。

司会 今までの議論というのは、プラス方向に結び付く自由の与え方というのを論じているんであって、マイナス面のこと、例えばこれをしなかったためにこうなった、ということが相当あるんじゃないかという気がする。

和田 それ、どういう意味？

司会 つまりマイナス面というのは、子供がお母さんをブン殴ったりたいたたりしても平気でニヤニヤしている場合がわりにあるわけよ。そうすると、人間はぶったってたいたっていいやと子供は思うようになるでしょ。

浅田さんは紙を張って落書きをさせただけ、ふすまにじかに落書きさせたり、穴をあけて向こうへとんで入るとかあるわけ。非常に極端だけど。

和田 私の娘のとき（二十年以前）にそれがはやったですね。

司会 自由にやらせたほうがノビノビ大きな人間になるんだって感じてね、やらせたい放題のお母さんっているんですよ。だけどその子がよそへ行ってもそんなことしたら、社会生活の面ではマイナスになる

でしょう？

山本 ただまあ、偉い先生方はそういうことを言いますよね。小児科医とか教育学者は子供の味方なんですね、親の味方じゃなく。親と子というのは利害が対立するから。

和田 それからやっぱり、学校へ行く時間とか寝る時間とか、食事の時間は規則的でないと社会生活ができなくなるわよね。

私は親が積極的に何かをやったことの効果については疑問を持つようになったけど、常識の範囲内で親が生活してれば、そして子供に馬鹿にされるような人間でなければ、なんとかいくんじじゃないかという感じは持ってるわけ。親が馬鹿にされちゃうと、子供は頼るものがなくなって、自由なようだけど不安になると思うんですよ。だけどそれ以上の場合、積極的にこうしたからこうなったという多くの場合、それは幻想ではないか。

山本 はたして常識的な生活とは何かというとな、例えば保育園へ一緒に行ってるお宅でも、とんでもない家がけっこうあるんですよ。だから一日三食食べて夜は寝る、

という以外、常識的に守るべきことって何かあるかなあ。

南 お金の使い方。

和田 それは大きい。テレビの見方もそうだし。

南 あのね、テレビなんですけどね、うちの子はわりと外で遊んでたし、テレビもあんまり好きじゃなかったから、見ないほうだった。一日中ついてるなんてことは絶対なかったわけ。けどやっぱり夕方になって、雨の日とか冬の日とか見たいわけですよ。これでテレビのベースにはまりこんだら困るなあ、と思って、テレビに布をかけてたんですよ。そうすると、布をあげてチャンネルひねるわけですよ。これはよく考え



明田珠美子さん

て見るものだ、みたいになって、よかったなあと今でも思いますね。

司会 しかし、テレビの教育力って、スゴイですよ。学校教育の比じゃない。社会の教育力と言ったって、そんなに家庭の中に入ってこないし、親の影響力もホントにないと思うけど、テレビはモロに家庭の茶の間に入ってきて、自分の子供を教育してくれちゃうんだから、コワイよねェー。

核家族のこわざ

司会 この間、子育てで悪戦苦闘している若いお母さんばかり集めて話し合ったのね。

そしたら本当に平井信義さんの論を実践した人がいてね、しからない、強制しないで感じてやった。電車に乗ってどこかへ行くというときに、子供が「嫌だ、もっとここにいる。乗りたくない」って言うんだって。で、乗らないわけ。二台目が来ても乗らないで四台目にやっと乗った、っていうの。それを二、三歳までやり続けて、そりゃ本当につらかった、っていうわけよ。ずっと耐えて子供の言いなりにやってたわけ。

ところが三歳になったらホントに素直ない子になりました、っていうわけよ。みなウーんとうなっちゃってね。

ところがかたや違う人がいて、私は親の都合で、サッ行きましよう／＼というふうに引きずり込んでやりました、そしたら三歳になったらけっこう素直に言うことをきく



春日井英美子さん

子になりました、って言うの。結果は同じわけよ。

山本 だったら私、楽なほうがいいなあ。
司会 私も。

和田 うちの娘の場合、「何でも反対、社会党」で、親の言うことをききやあしない。イタズラもひどくてね、実に困ったんだけど、子供って一個の人間で、それなり

の傾向を持つてるのね。だから親がこっちの方へ持っていこうと思ってもそうはいかない。たまたまうまくいった場合というのは、子供本来の傾向の方にいったんだらうと私は思うのよ。

司会 この育て方だから良かったんだと、ある一つの説を強調してる方があるのだけど、たまたま子供に当たった、ということ、母子の組み合わせが良かった、ということがあるのではないかしら。

春日井 偶然性はあると思いますね、やっぱり。

和田 子供の傾向というのは、確かに小さいときからあるわよ。だから、子育てとは子供をどうするかじゃなくて、とにかく親がどうあるか、ってことでしかないんじゃないか、って感じがする。

司会 でも、それもまた危険なのよ。つまりそれは、親の後ろ姿でしつけを、ってヤツなのよ。

和田 後ろ姿で、とは言わないわよ。

司会 でも、親の心がけ、生き方が子供に反映するからしつけはしないでもいい、とこっちのほうへくるのよ。どうですか？ 皆

さん。

春日井 いまはあまりにも生き方とか育て方のノウ・ハウがはん濫しているから、いっぱい情報がある中で混とんとしてね、もう育て方がわかんなくなってるんじゃないかと思うんですね。結局、あっちが良かったからあっちをやってみようという感じで、毎日が。

ホント人間で、地震とか津波とかあった場合は防衛するけど、戦争も今とこないし、本当に平和の中で子供を育てている。今日明日の食べ物がないわけじゃありませんしね。子供たちなんかも、何の楽しみがあるのかなあ、と今日も「わいふ」に來ながら思ったんですけどね。そんな状態ではいくらでも論じられるわけだけど。

四十にして感わず、って孔子が言ったというけど、あんなエライ人でも四十まで感ったんだと考えればね（皆大笑）。

和田 それはいいね。

春日井 いま公民館の託児を引きうけているんですけど、本当に子供はみんな違うんですよ。また、はしにも棒にもひっかからない大人もいっぱいいる訳で、それが一

応、お父さんづら、お母さんづらしているね。

だから子供もいっぱい折して、自由にやっていけばいいのかなあ、と思います。山本 核家族のこわいところは、私みたいに母親が、それ行け！というタイプだと、一家一丸となってしまうのね。しゅうとめ、しゅうとがいて意見が分かれているなら、子供も世の中にはいろんな意見があるなと思えるんだけど。だから親の外に逃げ道があったほうがいいかな、という気がします。

和田 逃げ道というより、もうちょっと広い判断のモノサシね。

司会 ちょっと自由の問題から色々話が広がりましたね。自由って本当に難しいから、なかなかこれで分かったなんてことはないんだけど、これで終わりにしたいと思います。

（まとめ・宮前 和）

・次回の子育て会議については、一四二ページをご覧ください。

自費出版は

“わいふ”へどうぞ！

“わいふ”編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いと思います。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょうか。



時代を生きる女性たち

江戸から東京へ、女性400年史



加太こじ 文・絵

前半は女性史としての通史である。作者自身あとがきで「この女性史の部分には、私の母と妻の生涯が秘められている」と述べている通り、明治生まれの母は、内職仕事に紙袋を一日手が痛くなるほど張って一万枚、それで米一キロ半買うという生活をしながらも亭主関白の父を尊重していた。そんな長屋暮らしの中で、母を助けて紙芝居を

書き始めた作者の目は名もない女性たちに限りなく優しい。後半は時代を一身に具現した女性たちの生き方だ。
千姫、出雲の阿国、津田梅子、樋口一葉、与謝野晶子に並んで落語に登場する女性たちがあり、高橋お伝、都はるみ、果てはオバタリアンにまで言及する。
特筆すべきはテレビ論で「現代の日本人の考えを左右するの

はテレビの娯楽番組である。時代物の水戸黄門や、遠山の金さんなど常に事件をさばいて民衆に平和で楽しい生活ができるようにするのは天下の副将軍であつたり、奉行である。民衆、庶民はさばかない。いつも助けられて喜んでいる」
ハッとさせられるところの多い本である。

あけび書房 一五〇〇円(N)

子ネコはかんごふさん

森のお医者さん①



竹田津 実 著

読んでというよりまず見てほしい本。北海道の野生動物のための森の病院に子猫が仲間入り。野生動物と仲良くなり、やがてその猫たちが入院中の動物の子の、本来ならその親がする「なめる動作」をしてくれるようになる。いつのまにか助手の役目、つまり看護婦さんになっていたというわけ。

猫とたぬきや北きつねの子が一緒に丸まって寝ている写真、

猫と雪うさぎやリスが一つの器でおいしそうにミルクを飲んでる写真など一瞬現実を忘れて心が和む。動物が大好きで獣医師になった出発点は著者と同じだが、街の病院の我が家とは仕事の内容が違い、どのページも新鮮なことばかり、同じなのは小さいころから動物に囲まれて暮らしてきた子供たちが動物の世話を手伝うところだ。後半は森の病院が忙しくなるだけ自然

が少しずつ壊されていることが書かれている。

人間が楽しく便利に生きていくため知らないうちに野生動物を病気にさせたり傷つけたりみなしにしたり。環境保護――言葉や頭で理解していても実行できなかったり、日々の忙しさについて忘れがちに暮らしている私たち……。未来を担う子供たちと一緒に読みたい一冊である。

国土社 一四〇〇円(S)

チャレンジはおもしろい



金森トシエ 著

読売新聞社の婦人部長、さらに神奈川県立の女性センター長として満四十年を職業人として生きた著者が、折にふれてつづいた文を収録した一冊。
結婚後七年、何となく受けた試験に合格して著者が新聞記者

となった時代には、女性の解放とか、自立とかいう言葉は世の中に存在していなかった。そんな中で自分の歩みを語る著者の言葉は淡々としてはいるが、柔軟なチャレンジ精神とあたたかさに満ちていて共感をそそる。

一九五〇年代からスタートしてつい最近まで、様々な今日のテーマと、歴史的視点をないまぜにして編まれているこの一冊は、戦後日本女性の生活の変化が感じられて興味深い。
ドメス出版 一七五一円(K)

見えない戦争



斎藤千代 著

一九九一年三月。著者はイラストをおとなう市民調査団の一員として日本を後にする。
様々な危険を冒してバグダッド入りをした彼女が見たもの。それは、水道、電気、道路など、あらゆる生活基盤が完全に破壊された社会だった。

一見無傷に見える建物の内部も、実はピンホール爆撃でくまなく破壊されている。医薬品も乳幼児に与えるミルクも、経済制裁の名のもとに手に入らない。今もなお人々の生活は悲惨の極みにある。これでいいのか。
巻末に収録されたアメリカの

元司法長官によるブッシュ大統領の告発は、この戦争がアメリカの意図によって起こったものであることを明らかにしている。ずっしりした内容のつまったこの本を、平和を願うすべての女性に読んでもらいたい。
BOC出版部 一五四五円(T)

中学生の国語勉強術



内藤俊昭 著

「国語の勉強の仕方が分からないくてどうも自信が持てない」という受験生が意外に多い。確かに国語は外の教科に比べて、日ごろからの読み、書き、考える習慣づけがものをいう分野だけに、ただ教科書通りに勉強する

だけでは成果はあがらない。そんな悩める中学生に向けて、この本は国語攻略法のコツを実に要領よく、しかも具体的に分かりやすく教えてくれている。ゲーム感覚で面倒な文法も簡単に覚えられそうな気にさせると

ころなど、さすが教え方のプロという印象を受けた。
親の方がまず一読しておくて我が子へのさりげないアドバイスに役立つこと請け合いの一冊である。
日本書籍 一二〇〇円(M)

私が訪ねた戦後の湾岸



参加者を 募ります

自分の言いたかったことがまったく違ってとられたことはありませんか？

“アラ”と思いながらそのことについて確かめることもなく、日常生活は流れていきます。

十人ほどの小さなグループの中で自分と他人の関係について考えてみようとしている成長グループにぜひ参加してください。

■期間 四月二十三日～七月九

日 毎週木曜日 全十二回

■時間 昼 午前十時～十二時
夜 午後六時十五分～八時十五分

■参加費 全回で二万四千元

■場所 朝日カウンスリング研究会 成長グループ事務局

■連絡先 〒151渋谷区代々木一五十四一五1301号 Tel 〇三三三七〇一三三七〇

東京ヒューマニクス

研究所の ゲシュタルト療法を 体験しませんか

「何かやりたい」と思いながら一歩踏み出せないでいる方、自分の新しい能力を探索している方、ゲシュタルト・ワークシヨップ（体験学習）を通して、自分の可能性をみつけませんか。

人間関係、子供の問題などで悩んでおられる方も、問題解決

のためにぜひご参加下さい。

▽日時 毎週水曜日午後七時から九時（随時受講可）

▽申し込み・お問い合わせは、

東京ヒューマニクス研究所
〒141品川区西五反田二一三一
十一一九〇四 Tel 〇三三三四九二二二八三八

“ぐりーむ”を 読んでみませんか

投稿誌“ぐりーむ”ではライターさん（購読者）を募集しています。三月発行の十号の特集は、「ボクの、私のアルバイト体験」。面白いアルバイトの体験談が満載です。外に自由投稿のページや書評欄などもあります。投稿誌ですが、投稿は強制ではなく、読むだけの方も歓迎。原則としてボツなしでやっています。奇数月十五日発行の隔月刊です。読んでみたい方は六十二円切手同封で下記あてご連絡

絡ください。折り返し案内書をお送りします。見本誌ご希望の方には一冊五百円（送料共）でお分けします。（当方の郵便振替口座宛ご送金下さい。「見本誌希望」と通信欄に明記のこと）。

〒251神奈川県藤沢市大鋸一〇一四一四一〇三 上野方 投稿誌ぐりーむ編集部 郵便振替口座 〓横浜五一一三〇一二 加入者名 〓投稿誌ぐりーむ

ワープロを ゆずって下さい

中古のワープロでお使いになっていないものを求めています。お安く譲ってくださるかたがありましたら、わいふ編集部まで一報ください。

なお、ワープロをお求めになっていらっしゃる方、こちらからはご連絡いたしませんので、編集部までどうかお電話くださいますように。どうぞよろしく。

ダイエット経験募集

婦人画報社から出す予定で、
ダイエットの方法オールガイド
という本を作っています。

何らかのダイエットメソッド
を試みた方、成功失敗は問いま
せんので経験をお聞かせくださ
い。ぜひ、お電話を「わいふ」
編集部と和田まで。

昼・〇三―三三六〇―四七七―
夜・〇三―三三三三―五六八四

こんな本を 書きました

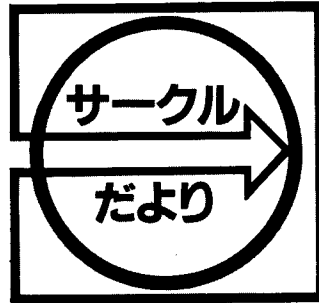
四国、「いつかは行ってみた
いね」の私の言葉に主人も同意。
はからずも希望が一致したのだ
た。しかし子育てに忙しく、実
現したのは九年後。

NHKの「花へんろ」にあこ
がれ、霊場八十八カ所の巡礼に
旅立つ。まとめた旅行記、読ん
でみたい方はご連絡を。送料共

一二五〇円。

Tel〇四八―七八六―七四二六

鈴木春江



福岡サークルからの お知らせ

学校五日制・指導要領改訂を
めぐって子どもの環境が揺らい
でいます。今回の例会は、「子
どもの教育」に視点をあててみ
たいと思います。

■日時 四月二十三日(木)

十時―十二時

■場所 久留米市勤労婦人セン
ター(西鉄久留米駅下車徒歩十

分)

■連絡先 島村雅子 Tel〇九四
二―四三―八七二九

取手サークル 一月例会

。出席者(隅屋、四方、広瀬、
佐賀、綿貫、藤田、神谷)
。"わいふ"二三二号合評
実り多い(?)雑談となりま
した。話題になった作品を簡条
書きにしておきます。

△能力が劣る子には勉強は必要
ないのか

△怖い男と住む女たち

(この作品については好みがあっ
きり分かれていろいろな感想が
でした)

△議会びつくり日記

△車いすから世の中みると

△生きていた三歳児神話

その他色々脱線の繰り返して
したが体験談も出て、面白い合
評会でした。

●情報コーナー

もっとご利用を

情報コーナーは皆さんのコ
ミュニケーションのための
ページです。もっともって
ご利用下さい。

お友達を求める、ゆずりま
すあげます、本探し、求職
求人、臨時のお手伝いを頼
む、など、いろんなことで、
読者相互の助けあいをしま
しょう。趣味でお作りにな
った作品なども、PRして
販売なさってけっこうです。

但し継続的に、しごととし
てのPRをなさる場合には、
広告料をいただくことがあ
ります。金額はご事情をう
かがい、ご相談の上ときき
めます。

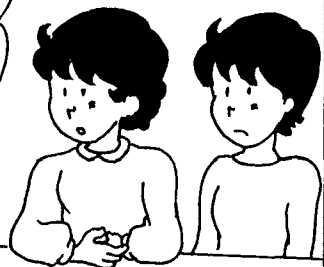
痛快!

解人

第9巻

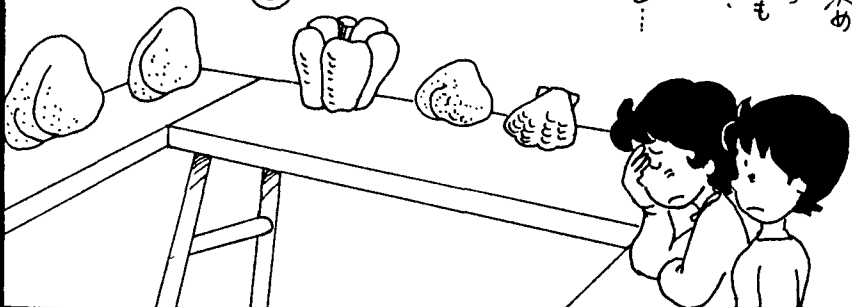
栗田^{ミヤケ}矢^{タケ}

そういうこと
ですの
でな
たか……



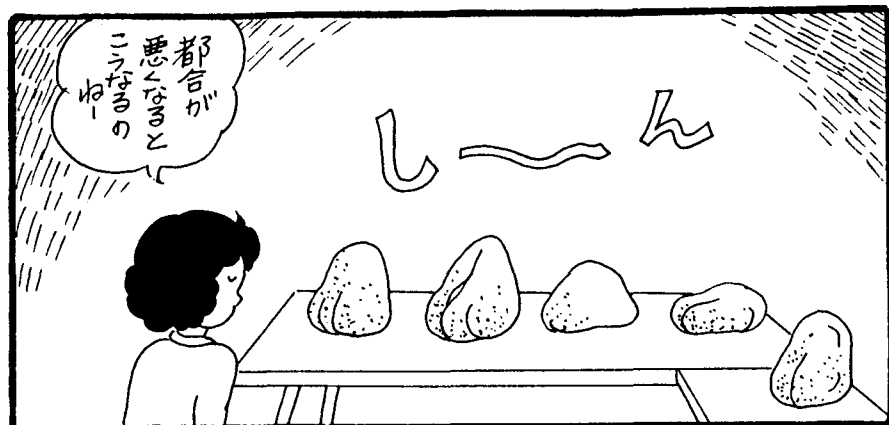
し〜ん

役員決め
スニリ
いくとも
あるが、
運が
わるいと……









私の愛する 外国人

東京都新宿区

笠原 珠子

彼の祖国

バングラディシュという国は南アジアに位置し、インド、ネパール、ミャンマーに囲まれ、ベンガル湾に接している。正式の名称をバングラディシュ人民共和国という。独立年月日が一九七一年三月二十六日というから、二十数年の若い国である。

国土面積が一四万三九八平方キロメートル、日本の約三分の一の国土に約一億二五六万人が住んでいる。

それでは一九七一年以前のバングラディ

シュは何という国だったのだろうか？ パキスタンである。が、パキスタンもその国の歴史はまだ浅い。一九四七年にインドの

独立の際誕生したのだから、それ以前は大英帝国となる。とすると、彼の親の世代は、大英帝国、パキスタンを経てバングラディシュと一生の間に三度も出身国が変わっているのである。彼でさえ、生まれたのはパキスタンだ。今はバングラディシュ人民共和国のパスポートを所持している。

日本は侵略をすることはあっても、されることがなかった罪深き国なので、私の想

像の領域ではとても彼らの気持ちは分からないだろう。

バングラディシュの八七パーセントがイスラム教徒であることを皆さんは御存じだろうか？ 実をいうと私は知らなかった。が、あのインドの父ガンジーがインド独立の際、パキスタンという国を作らざるを得なかった原因はそこにあったのだそう。ガンジー自身がヒンドゥー教徒であったこと、当時のインド内で絶えず起こったヒンドゥー教徒とイスラム教徒の争いを考えれば、イスラム教徒がほとんどパキスタンに

移動したことは容易に理解できる。

しかしインドに分散していたほとんどのイスラム教徒が長く住んだ土地を離れ、新しい国へ移動したのだから、地方出身ごとに風俗や習慣、言葉などが著しく異なり、一緒になればなったで、また別の摩擦が起こったのである。事実、バングラディッシュがバキスタンと分離したいちばんの理由は、公用語の対立であったそうだ。

私が彼らの国の歴史を知ろうとするとき、その資料があまりにも少ないのでいささか不安であるが、とにかく、彼はこういう国の出身であるということをまず御理解いただきたい。

気候は亜熱帯モンスーン型で多雨多湿である。季節的に大別すると、十一月から二月までが温暖な乾季で晴天が続く、三月から五月にかけて厚い雲がたれこめ始め、気温がいつきに上昇する。北西風が吹き、この雲が割れると大スコールとなり、この時期に年間降雨量の五分の一が降る。六月から十月までがいわゆるモンスーン季で気温はやや下がるが雨量が多く、最も多湿な時期である。ベンガル湾からの多量の湿気を含

んだ暴風がサイクロン。日本でもずいぶん報道された昨年四月の大惨事がこのサイクロンによるものである。

彼によると その昔バングラディッシュは

とても豊かな国で三毛作であったという。最大の農業生産物はコメであり、今も百種類以上のコメが作られているそうで、日本にもあるとは聞いているが、香米と称する



サリーを贈ってくれた。8千円なり

ステキな香りのお米もあるという。

果物も亜熱帯のそれで、パイナップル、マンゴ、バナナ、ライチなどと濃厚な味のものが多く、彼の好物はそういう甘い果物なので、日本のリンゴなどはあまり好まない。

しかしなんととってもカレー。そして紅茶。この二つは私に彼を異国の人だと意識させる不思議な物だ。彼はふだん紅茶以外は水しか飲まない。もちろん例外的にコーヒーや緑茶を飲むこともあるが、欧米人のようにグリーンティを称賛するようなことはない。そしてカレー。これは私たちがふだん口にするカレーとはまるで違うのだが、色々なスパイスを混ぜてできあがる料理のすべてがカレー味なのである。

数えればきりが無いほど彼の日常をとりまく食べ物と私のそれとは異なる。これは暮らしてみても思ったのだが、彼の国の文化に外国の食べ物はまだあまり入ってきていないこと、それに比べてわが国はもう何が日本食かも分からないほど雑食になってしまっていることとで、その差が甚だしいのだろう。

どちらが良いかなどという気はさらさら

ないが、彼が自分の国の米を時折手に入れると（国から貨物船が来、友人が乗っている）彼はまず右手でその感触を確かめ、次にはおいをかき、これはいい米だとかあまりよくないだとか言い切る。それにひきかえ自分は米など触っても何もわからないのが少々恥ずかしくなる。私も彼もべつに農家で生まれ育ったわけではないのだから、いったいこの差はどこから生じるのだろうか。とこちらは考え込まれる。

どっちが夫？

さて、知り合って三カ月で同居を始めた私たちであるが、これでめでたく結婚となった訳ではない。事件は次々と起こるのである。

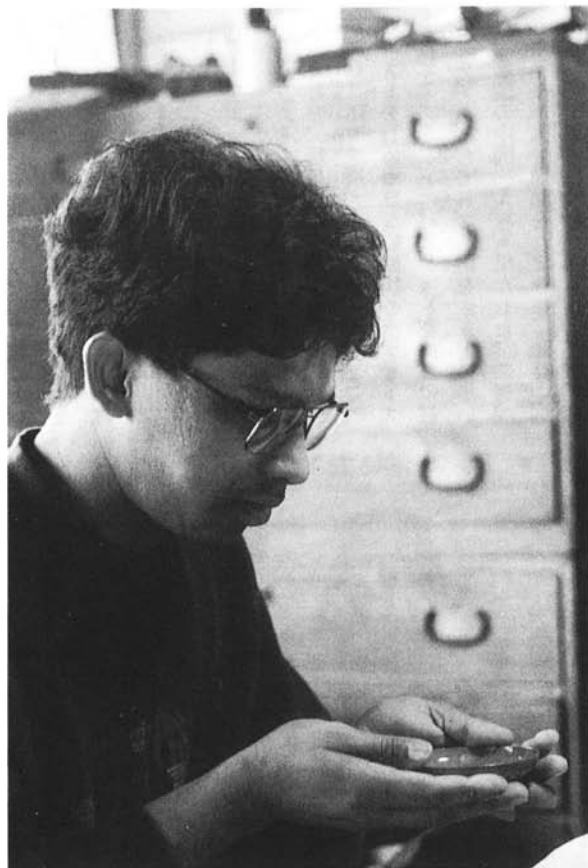
まず、彼が失業した。もともとアルバイトだったのだからそんなに落胆はしなかったが、問題は彼が終日家でゴロゴロしていることにある。以前にも話したように当時の私の仕事は猛烈に忙しくて家に帰るころはもう口もきけぬほど疲れているのに、彼は一日ゴロゴロしていたのでエネルギーは満ちあふれている。それに加えて、恋愛の



女性の集まりへバン格拉ディッシュ事情をレクチュアしに行く

初期にみられる自分と相手の距離を縮めようとするエネルギーがあいささなって、彼はまさに全身で私に向かってくるのだ。私は当時家に帰るのが憂うつだった。はつきりいって彼に向きあうだけの気力はもう残っていないからだ。

以前、私の直属の上司が皆の前で私をこ



神妙におトソをのむ。大好きです

う評したことがある。

「こいつに家庭の主婦は無理だね。まあ本人はいいかもしれないが亭主がかわいそうだ。だって亭主が外で働いて疲れて帰ってくるだろう？ もう口もきけないほど疲れて帰ってきているのに、こいつはきつと玄関口で夫をむかえた途端、機関銃のようにしゃべりだすぜ。今日はこんなことがあったの。」

それで私はこうしたので。これじゃあ夫は安らげないよ」

上司の言葉はある意味でよく当たっているのだが、まさか自分がその亭主役を演じるとは思わなかった。もちろんそんなに働かねばならぬ企業がいけないのではあるが、上司のいうような亭主のつらい気持ちというのものなるほど少し理解できた。社会から

隔絶したアパートの一室にいる彼にとって、私という存在がすべてなのだ。頼りにされる私かというと、世の亭主族に右に倣えて、疲れているのだから少し静かにしてくれとか、ベタベタしてくる相手の手をはらい、明日は早いからといってグリーいびきをかいて寝る有様だった。

しかし、やがて私の中で微妙ではあるが変化が起こった。昨日まで楽しかった仕事だんだんおもしろくなってきたのだ。それは、彼の二十四時間の使い方と私のそれとが質の部分で異なるように思えてきたからだだった。

彼の無職時代はほんの一カ月で終わったが、仕事を再び始めた後も彼の二十四時間の中で私に向けるエネルギーはほとんど変わらなかった。時間として考えれば減少したのかもしれないが、質が変わらないのだ。私に比べてのんびりはしているが健康で元気で好奇心のある人だから、仕事から帰るといような事をした。デザートを作ったり、部屋の掃除をしたり、アイロンをかけたたり、繕い物をしたり、花を生けて楽しんだり、日常生活のあらゆることを積極的に、なお

かつ楽しんでゐるのだった。一方私はという、すべてのエネルギーを職場で吸いとられ、花をめぐる楽しみはおろか、ゆっくりごはんを食べる余裕すらなかった。

彼から学んだ 生き方

そして、私は五年間勤めた会社をやめた。三カ月間、私は五年分の休養をとった。窮屈なスーツを脱ぎ、ブラジャーもととり、ウエストをしめつけない筒状のワンピースを着て、グリーンのバスケットを持ち、毎日ブラブラとあてもなく街をさまよい歩いた。念願の中国一人旅も果たした。二週間もたった一人で地図をたよりに、私は中国の街もブラブラとさまよい歩いた。色々不自由なこともあったが、ながらく疎遠だった友人と北京で再会もし、総じて楽しい旅だった。

私は私でしかない。私の相手はたまたまバン格拉ディッシュ人であった。しかし彼の同国の友人たちが彼とまったく同じだとはいえない。要するに一人一人が皆違うのだ。ただ、一つだけいえることは、彼の友人の



美男美女でしょう！

ほとんどすべてが、自分の妻を愛していること、それは私たち日本人の歩んできた、経済重視の社会で個々の愛情関係が抑制されてきた歴史とは、決定的に違うことである。

私は一カ月に数回、彼と一人でこのアパートの中で踊るダンスが、一日八時間の利益をあげる仕事よりも大切なことを知った。ダンスだけをしていれば世の中がまるく治

まると思っているのではない。しかるべき社会的貢献による充足感も大切なことだ。けれどそれだけの毎日は愛を不在にさせる。私が欲しいのはその両方。愛にかたよりすぎる日々も、仕事に忙殺される日々ももうごめん。私の中のバランスシートがうまく折りあい、私が幸福だと感じる瞬間、私はパワー全開、自由になれるのだ。

この原稿を書いている今日、私たちは婚姻届を提出した。知り合ってから一年四カ月。いろんなことが起こった。二人とも、知り合う前に各々大恋愛をし、深く傷ついたこともあった。これからも困難はつきまとう。国際結婚に対する日本側の対応は驚くほど冷たい。しかも、彼は東南アジアの人間だ。けれど、私たちは前へ前へと互いの未来に向かって進むしかない。

この紙面ですべてを語れない事情が多々ある私たちが、いつか、もう一度話したいこともある。まずはここまで。続きはいつのことになるやら。とにかく私たちは、前進するのだ、決して後にはひけない。

(終)

(写真提供・筆者)

わいふ文章講座 (8)

副編集長 和田 好子

乳をめぐって

？ ？ (見本打ち)

はた^{ニヤ}ち前にお見合い結婚で夫を迎えた側の私は、それまで祖母と二人暮らしの中へ夫が加わったていどの意識しかなかったように思う。ところが翌年、ごく安産で男児が産まれると、ひどく束縛された生活になってしまった。^{えい}お七夜を待たずに祖母は自分の懐へ嬰兒を抱き込んで、唯一オッパイはどうにもならず、

相当問題のある文章だから取り上げた、といったらまことに失礼ですが、この方はいつもこんなことはないのです。毎号のように載っていらっしゃるくらいですから。

ボツになった場合はカードに記録してあります。この方を見ますと、一九八七年、二〇八号以来の記録があります。会員になられたのは二〇四号です。

二〇八号から二三〇号までに、投稿数は分かりませんが、ボツになったのは十回。今つくづくカードを眺めると、

泣けば乳の出る私のところへ連れてくるのである。特に夜分は、^{ぐうすま}一枚の隣室から一度ならず子供を抱いて^{ぐうすま}闖入し、ぐつすり寝入った私の胸を押し開いて子供に飲ませるのだった。

また、お天気の良い日は、その昔私の父を乗せたと言^いう古い乳母車に子供を乗せて三時間ばかり近所めぐりをする。そのときの話題は、内孫は女だったのが^ひ孫は男児で、そのうえ母乳がたっぷり出るので発育がともよ^いと^いう^いり^いね^いと

？、妊娠と同時に、

誰？、
作者？、

私の^{わん}偏平だった胸は、母親になると同時に^{わん}腕を伏せたような二つのふくらみとなり、子が吸い^くより先に乳白色の数条が目や鼻に降り注ぎ、小さな口に^あい^いれ^いてむせるのを繰り返すありさまだった。

乳がよく出るのを伝え聞いて^い三十分ほどの道のりを、孫をおんぶしたお^{ばあ}さんが朝夕乳を^もう^ういに^く来るようになった。その子はおなが一杯

この方の文章は出来、不出来の差がかなりある、という気がします。ムラがあるのです。

どうしてなのか？ 検討してみましよう。最初の三行を、すっきりさせるべく書き直してみます。

「はたち前にお見合い結婚で夫を迎えた。祖母と二人暮らしの家の中へ、彼が入ってきた形だった。私としては娘時代の延長で、妻になったという意識も特にないままの結婚生活であったと思う」

よく意味が分かるように書いてみると、こんなところではないでしょうか。作者の個性、独自のにおいというものは消えてしまいますから、書き直しの方がいい文章というわけではありません。ただこのように、明確に状況を説明して欲しいということなのです。

原作の三行でも何となく分かりはするのですが、よく読んでみると、「夫を迎えた側」、「祖母と二人暮らしの中へ夫が加わった程度の意識」など、背景に相当事情があるのを、ひどく省

になると、^{差別}プライと私の乳房を離れお婆さんの方へにじり寄る。區別をした積もりはないが、この幼さで何かを感じとるのかと忸怩の思いをしたものである。

若い私は実によく食べた。食事のとき「授乳中は誰でもよく食べるそうよ」

少し恥^ぢかしく言い訳めくど

「ミルク買うほうが安上がりだぞ」と、その大言い訳めいて食ぶりにあきれ顔をして夫は言った。

息子の前歯が上下二枚^ぢつ生えたころ、何か

のは^ぢみで力一杯右乳首を^か噛んだ。傷が痛くて

とても乳を飲ませられない。左ばかり飲ませると右乳はどんどん張ってくる。熱をもち^く身体に

ふるえもついてきた。祖母は、どれどれと眺め、やおらお灸^{きゅう}をすえてくれた。灸^{きゅう}のつぼは背中

の右乳の後側、肩から下つて胴と腕の接点である。限界に迫つてパンパンに張った乳を抱え、

上体をかがめて^すすり足でソロソロとしか歩けな

もう限界というほど

言つた。

恥^ぢづけるの意^いだか満切^{まんけつ}だううか?

略した感じで実はよく分からない。

分かるようで分からない文章というのやほりまずいのです。泉鏡花など分からないところが値打ちみたいな文ですが、よほどの才能がなければまねできないでしょう。

普通は分かる方がいいのです。

次の段の、「ひどく束縛された生活」も、ただ乳をのませるだけのことを言っているのでしょうか？ どんな束縛なのか説明されていません。とにかく疑問のあるところに？を付けたので、作者はお考えになってみてください。

たぶんこの方は、思いつくままにどんどん書いてしまい、書き終わってから多少の推敲^{さうこう}をなさるといふやり方なのではないでしょうか。それがうまくいくときと、いかないときとあるのが、ムラの原因かと思うのですが。短いものでも一遍書き上げてしまうと、愛着が生じて客観的に見られなくなるものです。冷静に欠点を見出すには、ピリオドを打つことにその数行の文を十分に検討するに限ります。

かつたのが、アラ不思議二時間もたつと体が軽く息も楽にできるようになった。乳房に詰まつて出口のない乳が体内へ逆流して排泄のほうへ回つたと思えない。

その地方には騒音と振動は一人前の小さな電車が走っていた。子連れで乗車し背負つた子を膝に回すと、前の席にも女兒を抱いた人が居た。息子がむさがるので乳を含ませると、向かいの赤ちゃんも泣き出した。

「済まんけどこの子にも貰えんじやろうか」

「お安いご用で揺れる車内で安定をとりながら子供をとりかえて目的を達した。乗り合わせた人達もニコニコとその様子を見守るおおらかな時代であった。」

ツメ／＼

授乳も育児もとうに卒業して久しいが、近頃は出生率が落ちたせいもあつて乳を飲ませる情景をトンと見掛けない。

裁縫でも編み物でも、出来上がってしまつてから直すのは大変でしょう。文章も同じことで、欠点はそれが生じたときに直してしまわないと、直しくくなるのです。

よく意味が分かるか。文法は間違っていないか。助詞は適当か、同じものを重ねて使っていないか。語の意味（概念）は明確で、取り違えられる恐れはないか、など、数行ごとに見直してしまします。面倒なようですが、これが一番危ない（結局手のかからない）方法だというのが、長年の経験の結論です。一度お試しください。さてこの方の原稿はワープロ打ちですが、近ごろ増えてきているので、お願いを一つしておきます。

一行は二十字で（これは二十一字）二十行を一枚に打ち、字間と行間を、この見本のようにあけていただきたいのです。ぎっちり打たれたものは原稿整理が困難です。原稿用紙を使い、マスタ目に入れてくださるのもありがたいです。必ずタテ書きで。よろしく。

これだけの景色が見えないのか？

最近乗った新幹線で、窓ぎわに座った女性が上体を窓に向けて白いハンカチを顔に掛けた子を抱いている。一瞬死んだ子かとドキツとしたが、オツパイを飲ませていたのである。赤ちゃんほうとうとうしいのか、体をのけぞらせて泣きだした。外の景色を眺め、語りかけて授乳すれば気分もよいだろうに、それよりも身づみに重点を置いているらしい。

手間いらずの、新鮮で適温。栄養満点の生命の源泉を補給するのに何の恥じらいがあるう。人前で一部肌を見せるのを怪しむと思うのは自意識過剰であり、目に見える側は別になんとも思っていない。謎でも？、作者がマ、

社会風俗の変化から私はズレているだろうが、乳房は子育てに最も必要で大切なものになり変わりはない。そのところを茶飲み夫婦になった夫に質してみたい気もするが、何となくためらっている。人前での授乳について？、その外のことも含めて、

？印のところ、要検討

お友達に△わいふ△を
おすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。
(六人ご紹介されれば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

△わいふ△年間分をプレゼント
ントにお使い下さい

●ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

契約結婚

山影 冬彦

怜子の長距離通勤下の勤務振りは、勤務一年目にして早くも怜子の異動希望を叶えるていのもだった。怜子は、片道約一時間、往復で約二時間短縮できる職場に転勤することができた。この点、道也の立てた予想乃至作戦は見事に当たったと言ってよかった。しかし、怜子の長距離通勤時間が短縮されれば、その浮いた時間分、怜子の家事・育児分担当が増えて、その結果、自分の家事・育児分担当が削減されるに違いないとする道也の胸算用は、すっかり外れた。その浮いた時間分は、怜子の強硬な主張によるまでもなく、怜子の休養用にその殆どが費やされることとなった。

怜子の休養用という点が特に採り入れられたのは、丁度その頃怜子が二人目の子供を身籠って、自然の赴くところ怜子の体調維持が優先順位第一位を占めるようになっていたからだ。

道也は胸算用の当てが外れただけでは済まなかった。第二子の誕生は却って道也に家事・育児分担当の増加となって迫ってきた。道也は不満だったが、といって、現実に対して特になす術を持っているわけではなかった。むしろ、一旦走り出した軌道上を走り続けることは、一途な道也の性格に合っていることだった。

「ま、この次はもっと近場に転動して通勤時間を更に短縮し、その浮いた分で今度は是非俺の家事・育児労働の軽減に繋げてもらうということで、我慢するしかないか」

短期戦の当てが外れつつある六年目の記念日に、道也はこう言って、自らを慰めた。

けれども、それから数年たったその次の転勤の機会にも、事態は一向に変わらなかった。怜子の通勤時間が片道三十分、往復一時間の短縮になる職場に転動になった時、その浮い





自分の恩恵に与かることは、道也には叶わなかった。理由は、怜子の再度の懷妊という事態こそなかったが、怜子の休養用という点では、前の時と同様だった。だが、今度は、前の時と同様に「この次」に期待をかけて自らを慰めるというわけにはいかなかった。というのも、今度の職場は最も通勤時間のかからない近場に位置していたからで、従って、もうこれ以上の通勤時間の短縮は望むべくもなかったからだ。

短期戦のつもりだったのが長期化する一方の現実の事態の進行に衝撃を受けた道也は、改めて二人の各々の通勤所要時間と家事・育児従事時間とを合計し、その数値を比較してみないわけにはいかなかった。計算・比較の結果は、一日につき道也の方が怜子より一時間以上も余計に通勤・家事・育児時間に従事しているという数字がはじき出された。

8

十年目の記念日が訪れた機会を捉えて、思い切って道也はこの通勤・家事・育児時間の比較数値を怜子の前に並べ立ててみた。もちろん、幾らかの格差是正を期待しての試みだった。すると、こうした場合寡黙にはなれない怜子から次のような返事が返ってきた。

「そもそも、家事・育児時間をこんなふうに数字でもってきっちり出せるものかしら。何をもって家事・育児とみなすか、その違いによって数字も随分変わってくるはずよ。わたしが子供らに寝しなに本を読んであげることだって育児なんだから。その分、計算に入っている？ 入っていないでしょう。その点、ミチの計算では、自分に甘く、わたしに辛いのではないかしら。その点からして既に問題よ、この数字は。もっとも、通勤時間は数字として確かに弾き出しやすいわね。でも、その通勤時間でも、わたしのそれとミチのそれとは単純には比較の対象にならないわよ。わたしの通勤状態は、のろくてぎゅうぎゅう詰めで日本一評判の悪い電車で揺られてのものよ。その疲労度といったら、並み大抵のものではないのだから。それに比べて、ミチの通勤は何よ。歩いたり、自転車だったり、時



には車で行ったり、気儘なものじゃないの。肉体的にも精神的にも疲労度はまるで違うわよ。それは単純に時間では計れはしないわよ。もし敢えて時間の数字で比較しようというのなら、わたしの方の数値は、通勤時間に関しては二〜三倍しておかなくては不公平よ。そういうふうになら二〜三倍してみれば、現状はまあまあトントンというところではないの。いや、わたしの方が過負担になっているとさえ言えるのではないかしら」

なるほど、そういう理屈もあるのかと、道也は唸った。

だが、怜子の返事は、道也を唸らせただけでは済まなかった。唸る道也に怜子は追い討ちをかけた。

「わたしの言うことにご不満がおりるようでしたら、お互いの立場を入れ替えてみてもいいのよ」

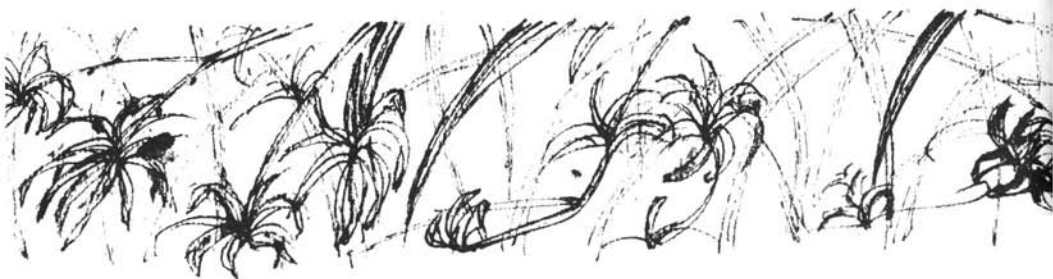
「入れ替えるって、どういうふうに？」

「わたしの職場の近くに引越すのよ。そこからミチは今の職場に電車通って通勤地獄の苦しみを味わう。通勤が楽になるわたしは今のミチがやっているように家事・育児をたんとやるわよ。どう？ こういう立場の入れ替え」

「引越す？ いや、そうまでしなくても、現状で結構」

十年近くも慣れ住んできた土地から離れて引越すのは、道也にはしんどかった。まして通勤地獄の苦しみを味わう気にはなれなかった。それくらいなら、まだ通勤・家事・育児従事時間についての過重負担感をかこっている方がましだと思われた。

結局、結婚十年を期しての負担公平を求める道也の試みは、怜子の反撃に遭って脆くもついえさった。



ただ流されるままだった。しばらくして、道也は怜子との分担関係はそれでも構わないとさえ思うようになった。というのも、二人の子供が成長するに従い、家事・育児にかかわる手間が減っていくのが道理で、その減少分が自身の負担分の減少に確実に繋がることが見込まれる時期が目の前に近づきつつあったからだ。自分の負担軽減を、怜子との任務分担関係を改めることによって実現するのは至難の技だが、こちらの方は黙っていてもそうなるのだから容易だと考えて、道也はもはや記念日が訪れても怜子との関係をいじろうという努力を見せなくなった。

育児の手間は確かに徐々に減って行った。その恩恵に与かることができるようになって、道也は肩の荷が軽くなったような感覚を覚えるとともに、時にはふっと空しさが心を駆け抜ける感覚をすら覚えることがあった。

二人の契約結婚の約束された節目である十五年目の記念日が間近に迫った時、道也はこういう心境にあって、契約更新に関する自身の側の条件をこれといって特に用意することなく、その日に臨んだ。

「それでは、いよいよ契約更新の話ね。ミチはどういう条件を用意してきた？ お先にどうぞ」

怜子は態度を改めて話を持ち出してきた。

「いや、何も用意していない。特になしというところかな」

「あら、いやにあっさりしているじゃないの。十五年目の契約更新というのはわたしたちの結婚の眼目だったはずなのに」

怜子は拍子抜けしたように言った。

「まあ、現状に満足しているということで、殊更にことを荒立てて要求をつきつけずにはいられないだけの現状への不満があるというわけではないからだろう。まずはめでたい家庭生活というべきだろう」



道也は自己を解説してみせた。

「あら、それはめでたいこと、本当に。……でも、わたしにはあってよ、要求が。わたしって、不平家なのかしら」

怜子は躊躇わずに言った。

「どんな要求？」

「こんな要求」

道也の問いに怜子は一枚の紙切れを持ち出してきた。

10

「記念すべき交渉の日に備えて、口頭ではちょっと心許ないから、文に記して見たのよ。要求の内容はそんなに大袈裟なことでもないけれど」

書いた本人の怜子のつもりでは、事柄はどうということもないものようだった。

「うくん、いや、こりゃあ、おごごだ」

受け取った道也の方は、正反対の反応を示した。

怜子の文書はこのような文面だった。

日頃勉強を続けろと発破をかけられているので、結婚十五年を期してこう考えました。大学時代にやり残した勉強に取り組みたいので、大学院に進みたいと思います。ついては、大学院に入るための勉強と入った後のそこにおける勉強との時間を確保するために、次のような要求を提出致します。

一、従来家事・育児に流用されることの多かった研修日を、その本来の目的通り研修のために使用できるよう配慮すること。

一、土曜・日曜は原則として家事、育児労働から外し、勉強に専念できるように特段の配



慮をおこなうこと。

一、春夏冬の長期休暇中には、ある程度まとまった日数集中して勉強ができるように配慮すること。

「大学院に行って大いに勉強したいって、それは結構なことだが、教師の職の方はどうする気なんだい」

日頃怜子に知的向上心を失わずに勉強しろと発破をかけていた手前、怜子が大学院への進学希望を持ち出したこと自体に難癖をつけることは、道也には難しかった。

「もちろん、職はこのまま続けるわよ」

「そんなこと、できるの？」

「闇でならね。予備校や塾で稼ぐのと同じことよ。通いたい先は東京で、勤務先と同方向だから、便利よ。きちんと教師としての稼ぎを続けるのだから、いいでしょう」

「うっうくん」

道也の返事は渋かった。

11

「この要求通りで計算すると、一週間のうちで、レイの家事・育児時間をどのくらい削ることになるのかな」

「ちょっと待って、それを計算したメモ、あるから。えーと、約十二〜十三時間程度っていうところかな」

こういう時の怜子是用意がよかった。

「いままでの総時間は？」

「週当たりね、えーと、約十七〜十八時間っていうところね。ミチの以前にやった計算に基づくと」



「すると、約三分の二の削減ということか。だいぶ大幅だな」

「まあ、ちょっとはね。でも、大学院に通って本格的に勉強に取り組むという点から言えば、これでもまだまだ足りないくらいよ。週当たり二十時間位は勉強時間を捻出したいところよ。でも、あんまり欲張ると、ミチの賛成をえられなくなると思っ、これでも控ええなければなよ」

怜子の口調からは、早くもこれ以下には絶対に譲れないという決意が感じられた。

「その三分の二もの十二〜十三時間の削減分をもらにかぶるのは、この俺ということ？ ちよっとひどくはない？ 家事・育児に限って言えば、今までだって、俺の負担の方が多かったのに、この上更に十二〜十三時間もふえるんでは、いくら俺でもやりきれんよ」

ようやく道也の口から本音が漏れ出した。

「だれもミチにおっかぶせるとは言っていないでしょう」

「じゃあ、誰がかぶる？」

「誰も。もう子供も手がからなくなっただけでしょう。育児といっても、要所要所に注意を怠らなければいいだけで、時間的にはだいぶ楽なはずよ、下のミコが小学校に入っ。それだから、世に言う空の巣症候群で、ミチも軽い鬱病にかかったんではないの。家事の方は、子供らに手伝わせるのよ。二人とも手伝うの、好きでしょう。そうなるようにちゃんと育ててきたんだから、この日のために。その上、子供たちによる家事手伝いは、子供たち自身の成長にとってプラスになることなんだから、育児の面をもっているわけで、つまり、一石二鳥っていうわけ。どう、これなら、ミチに負担をかけない形で十二〜十三時間くらい浮かすことができる計算でしょう」

「なるほど。……しかし、それは……」

頷きながら、道也は絶句した。家事・育児時間の自然減少は、実は道也自身がその恩恵に与かることができるものと密かに当て込んでいたものだったし、事実既にその恩恵に与かり出してしまったのだった。

——つづく——

(え・鳥居禎子)

わいわい がやがや

落ちる話

東京都八王子市・権瓶敦子^{ごんべい}

受験シーズン、我が家も昨年の今ごろは落ち着かない日々を過ごしていた。

センターテストの願書を出したころ、受験生の次男が食事中にはしを落とした。

「厄が落ちた!」と次男。「運

も落ちちゃったりして」と長男。言葉で遊ぶ余裕。

一次テストは×。私大受験の前日の夕飯。

「お母さん、これおいしいネ」と三男。

「本当に、まぐろの中落ちよ」「お母さん」と三男。受験生に落ちるは禁句。「これはネ、意識的に落としたもののな」

「じゃ、おれも明日は意識的に落としてくるのかな……」と受験生。

センターテストはサンドイッチが良いとのこと、心を込めて作ったが、下痢をし、お弁当を残してきた。「さすがのお兄ちゃんも緊張したんだネ」と三男がそつと言う。

二次はホットドッグが良いとのこと。冷凍室より出しておいした生ソーセージが洗いおけにポツチャン!「あー落ちちゃった!」「お母さん、浮いたじゃない!」

「浮いたよ」と素直くフォローしてくれた三男。次男には内緒。記念受験の私大は×。三月の国立大の発表は、クラスの仲間とスキー行きの息子。発表日の翌朝、夜行バスで帰宅し、早々と寝てしまった。三時間後、速達で合格通知が届いた。

すっかり目覚めて合格通知を手にした次男に「浮いたよ!」の一件を告白し、ほっとした。

長男の高校受験の時、第一志望校の発表開始の時、洗濯ざおを頭の脳天に落とした。その時運命はすでに決まっていた



はずだから、私のせいではないだろうが、長男は不合格。だから、三男の見事なフォローに感謝。三男の受験の時には、だれ

がフォローしてくれるのだろうか?

私の映画鑑賞

茨城県つくば市・山田永子

午後十時、九時ごろからふとんに入っていた末っ子がやっと寝つくと、思わず小踊りしたくなる。読書をしたり、手紙を書いたり、あるいはただボーッとしたり、私が独りになれるとても大事な時間が始まるからだ。

最近、映画が面白い。

私の住んでいる所は、ケーブルテレビが完備していて、衛星放送用のアンテナがなくとも、加入すれば、衛星放送はもちろん一日二十二時間放送の映画専用チャンネルも見ることができて、毎月ガイドブックが送られてきて、洋画、邦画、色々な映

画がいつ放送されるかが分かる。

二歳の子を持つ身では、映画館に行くのは夢のまた夢。でもこれなら、ハリウッドで話題のあの映画、この映画が少し遅れてコマースシャル抜きで見られるので、私にとってはどうっていいのだ。

それに、いわゆる昔の名画も放送していて、オードリー・ヘップバーンの一連の映画などは、彼女の輝くような美しさに、思わずため息が出たりする。

しかし、ここに大きな壁がある。

我が家は八十三歳のしゅうとめと同居している。彼女は十時ごろにはすでにふとんの中なのだが、高齢でもあるので、夜中にトイレに起きる回数が多い。そして、都合の悪いことに、テレビのある居間を通らないと、トイレには行けないのだ。

テレビでは今、まさに主人公

とヒロインがひとと抱き合い、ラブシーンの真っ最中。こちらもドキドキしながら見ている。何しろ、日常はあまりにも平凡すぎる毎日なので、おのずと力が入るというものだ。その時、ふすまの開く音がして、一瞬息をのむ。

いまだにテレビを消すのはわざとらしいし、甘いラブシーンを背後で見つめられている気分というものを想像していただきたい。私にすればどうってことない光景でも、明治生まれの彼女には刺激が強すぎる。

ごていねいに、「これはテレビの番組かい？」と聞かれても、あらぬ方向を見ながら「うん」と答えるのが精一杯。それでも映画を見るのはやめられない。障害があればあるほどなお、激しく燃え上がるという恋愛と同じだ。

かくて、我が家の愛と夢とス

・リル・と・サ・ス・ペ・ン・ス・に満ちた映画鑑賞が今夜も始まる。

貴花田雑感

茨城県取手市・佐賀成子

今年の大相撲初場所では貴花田の史上最年少優勝に終わった。

日ごろ、相撲から遠ざかっているわが家も、この日ばかりは、深夜近くまでTVにくぎ付けとなった。

画面に映し出される若武者貴花田はどこまでもカッコよく、見る者を引き付ける。また曙の生い立ちが流されると、今度は彼が優勝できるといいな、などと勝手な思いをはせていた。

すると多感な長女が、「貴花田より、曙に優勝させてやりたかった」

だが言われると、逆に、曙に

同情するなんてまったくのおごり、失礼なことにも思えてきた。それどころか、曙は貴花田よりも幸せにみえる。

二人の内、「自分の存在」がより大きかったのはどちらか。周囲が必要としてくれるのはどちらか。それを考えると、ハングリーとも言える曙の方に軍配が上がるように思う。

ことは貴花田、曙の関係にとどまらない。物質文化の中で、精神的「人生の目標」は何なのか……。あたかも資本主義の行き詰まりを見るようで、もはや捜しがたいほどなのである。

今、外国人力士をめぐっての論議が聞かれている。相撲界での荣誉は、実力で得られるはずと思う。

この点で、天賦の力と、より深い精神的支えを合わせ持つ曙が、期待できそうである。

絶対安静

栃木県鹿沼市・神山寿子

「おなかの赤ちゃんのことを思ったら、絶対安静にしてください。おふろとかトイレとか、必要最小限に動いて、あとは寝ていてください。できますか？」

できないなら入院だ、と医者に言われれば、「はい」と返事するしかないではないか。

はてさて、と思いつつ、夫に相談すると、

「メシの仕度だろう？　なんとかするよ。オレのできるものだけだけだな。ちょっと起き上がるのはかまわないだろ。部屋の掃除をする間とか、しばらく待ってもらわないとな。ま、とりあえず一週間がんばってみようや」と頼もしく請け合ってくれた。

その夜は、夫の作ったミソ汁私のたいたご飯、できあいの焼き鳥で無事食事は終わった。

そして、翌日。

夫は熱を出して、寝込んでし



まった。

私は夫にうどんを作り、薬を飲ませ、湿布をして、カゼを移され、セキが出て、頭はガンガンするようになってしまった。

この役立たずのデクノボー。お前が安静にしようするんだ。メシの仕度はどうしたんだ。掃除はいつするんだ。洗濯物がたまってろぞ。バカヤロー。

動き回ってしまったせいか、絶対安静はもう一週間延びてしまった。

大口をたたいた夫はすっかり謙虚になり、食事はホカ弁とセブニーイレブンに頼り、掃除、洗濯はあきらめる、という緊縮(?)家事となった。

家事なんて目をつぶってしまえばやらなくても済むね、という思いと、夫にも少しは家事をやらせねば、という思いを抱きつつ、私は布団にもぐりこんでいる。

いつまで安静にしているのかは分からないけど、ホコリで窒息する前には動けるようになりたいものだ。

モニター主婦の心意気

横浜市港南区・加納礼子

自慢するほどのことではないと思いがちでも、ひそかに自賛しているのが私のモニター歴。

いままで三十数種のモニターをやった。モニターを始めたのは十二、三年前からで、子供が小さかったころささやかなりともその謝礼に目がくらんだ。

当時、夫の給料は構造不況のおおりで伸びず、家計は切迫していた。パートに出たくても、四歳と一歳の子供がいてはとも無理な話。謝礼は封を切ると米代に消えたり、子供の運動靴になつたりしたものだ。家計を多少なりとも潤すと同時に、モニターは私の並々ならぬ好奇心をも満たしてくれた。

夫の転勤に伴い、見知らぬ土地で子育てに明け暮れていた主婦にとって、それは唯一社会とのつながりであったのだ。色々なモニターをするに当たり、私は「定め」を三つ作った。

第一にうそはつかない。相手にへつらったりはしない。第二にまじめに取り組む。アンケー

トの提出期限の厳守はもちろんのこと、マンネリ化しないように、いつも感性を研ぎすましておく。第三に応募は慎重にする。「悪質なものには引っかかるな」とは夫の忠告。

消費者の意見や動向に過敏な当節、企業の消費者モニターなどどこでも盛んに行われている。その内容、質は様々で、形式的な会議や消費者間の親睦程度のもの、単なる自社宣伝に終始したり、はたまた手軽に消費者ニーズ抽出と、モニターを酷使したり等々。

しかも、モニターされる方にも得ることが多く、一度やったらやめられないのも本音。行く先々で顔見知りができるのも、そんなゆえんか。競争率もなかなかのもので、応募すること七度目にして、やっと採用されたものもあった。

モニターの運命は悲しいかな

使い捨て。期間が過ぎれば、「ハイ、サヨウナラ」次の人が待っている。だが、時は移りて、わが家の子供たちも大きくなり、ようやく私にも社会への出番が来た。今度は決して使い捨てされないものを見つけるのだ。

日本舞踊に挑戦

横浜市保土ヶ谷区・井上治子(72歳)

平成三年元旦、「アッ／＼」とおどろく年賀状が届いた。それには、着物の色も朱、扇も朱色のお姫様が写されてあった。

おどろいたのは、その美しい舞い姿の主がベレー帽をかぶるモダンな友人だからである。

彼女とは、南大田の文章教室で知り合った。彼女の発言で勉強会ができて、いまでも続いている。

言い出しついで幹事をしていただいたが、二年目ごろ、ご主人の急病で退会された。私は、彼女の発言に感謝している。

良い先生、すてきな友達にめぐりあえたからである。私は体調をくずして、六年目に退会したが、いまでも文通は続いている。年賀写真の感想は、早速送った。「日本一／＼」の掛け声と、拍手喝采の文章である。

彼女は、あなたらしい文章だと喜んでくださった。そして、秋の名取発表会の招待状が届いた。私は、雨でなかったら喜んで行く、と返事を出した。だが、当日は雨で、彼女を失望させてしまった。

その夜、ささやかなお祝いを送り、二人でお茶を飲む時間をもてた。彼女はいま、ご主人の病氣も治り、日本舞踊に情熱を燃やしている。お弟子さんもできて、はりきっている。



ほかの名取の先生にさわりがあるので、公表はできないが、月謝が安い。自分のおぼえた芸術を、ともに楽しみたい／＼という主意には感動した。

「人生、意気に感ず」と、私は弟子になった。

ただし、持病があるので、雨と台風の日はお休みの約束をした。

第一回目はやさしい歌謡曲、ほんの一節だけにした。欲ばっても、忘れるから……。 「友禅流し」の伴奏は、鼓の音入りで素晴らしく楽しかった。 いま私は、友人、知人にすすめている。

(え・小宅昌枝)

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二三六号の特集テーマは「近所つきあい・私の苦勞」です。

いつの時代にも近所つきあいをまったくしないですむ、ということはないと思いますが、集合住宅にすむ人々が年々多くなっている現代は、近所つきあいに以前とはまた違った意味の苦勞が増えているのではないのでしょうか。ご近所とうまいかなくて引越してしまった、という話もきくぐらいます。

どんなかたちでもよいのですが、ご近所とのつきあいで体験なさった苦勞や、その解決のしかたなどをリポートしていただければと思います。
分量四千字前後。

●ワンポイント情報

今回は「引越上手・下手」です。

春は転勤のシーズン。あちらこちらでもトラックのそばにダンボール箱が積み重ねられている風景が目につきます。

引越になった方は手際よく、それほどの苦勞もないといわれますが、何十年も同じ家に住んでいた方が引越す、となるとこれはまた大変な苦勞が伴うようです。

ご自分のお引越しの体験から、どうか引越しのよいノウハウをお寄せください。またこんなやり方をしたために、ひどく損をしてしまった、苦勞してしまったというご体験もどうぞ。

分量千二百字前後。

以上二つとも締め切りは四月二十五日です。

●次回の子育て会議は四月十三日（月曜）二時から、編集部で行ないます。テーマは「整理整頓を身に付けさせるには」です。

参加ご希望のかたは編集部へ電話で、四月十日までにお申し込みください。お子さんが小さい方でもかまいません。

△氏名、住所を秘密にしたい方△

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

△仕事をしたい方へ△

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事か）がしたいですか」というアンケートをお送りしたことがあります。その後の新会員、以前と状況が変わって、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。



●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

エッセイスト・クラブ

(一六〇〇字まで)

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

ズバリ一言

(八〇〇字まで)

マスコミ、事件、商品、サービスその他、目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の提言もどうぞ。

奥さんから外さんへ

(一六〇〇字まで)

いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって、何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの失ったものetcをお書きください。

マイ・ジョブ／マイ・

プロフェッション

(一六〇〇字まで)

あなたのしていращやるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも

サブプレシープ

(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載せします。感想、反論、何でもどうぞ。

人間マンダラ

(一六〇〇字まで)

あなたにとって忘れられない人の姿を描いてください。もちろん家族の一員でもよ

いのです。

親の言い分・教師の言

い分

(一六〇〇字まで)

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向かつては言えない関係。教師から親へ、親から教師へ言いたいことを率直に言いあってみましょう。抽象論でなく、それぞれが抱えている問題を具体的にお書きください。

フリースペース

(八〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

わいわいがやがや

八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコラム。

読んでみました

(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

情報コーナー

(八〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交

換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

サークルだより (八〇〇字まで)

「わいふ」には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りたいう、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後についたものは、次号までとなりま。

規定枚数はより多くの投稿を載せるために、守っていただきたいと思ひます。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもお載せします。

コラム以外の投稿募集

特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の

情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。募集欄をごらんください。

特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適當と思はれるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思はれるものは、出版社に紹介、推薦します。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。

●ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇に限ります。ただし次のコラムへのご投稿とはだぶつかまいま。

ワンポイント情報・サブリース・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです。ヨコ書きはご遠慮ください(書き直

すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいの

●ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただきたい、ということ

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断わりします。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字で行間、字間をあまり詰めないように。また禁則処理をしないで打ってください。

編集だより

●今回の特集テーマは前回に引き続き投稿の山、選ぶのに苦労いたしました。

今回はとくに、文章のよしあしというより、建て売り住宅、マンションなどと、パターン別の選び方をしてみました。ご了承ください。

それにひきかえ、「ワンポイント情報」へのご投稿はほとんどなく、それも掲載にはすこし力不足の作品ばかりで、結局見送りとなりました。残念です。

●今回はフリースペース、わいわいがやがやなど、小篇の投稿に実に面白いものが多く寄せられ、編集部一同大喜びしております。日常茶飯事の中に潜む何ともいえない庶民生活の喜怒哀楽とベールスこそ、「わいわい」のだいご味です。これからもうぞぞ、ふるってこの調子で投稿下さい。

●昨年にひきつづき、子育て問題に関するアンケートを企画しています。地域サークルを主催していらっしゃる方で、アンケートにご協力いただける方はどうかお声をか

けてください。子育て最中の方ばかりでなく、もう卒業の方でも結構ですので、どうぞよろしく願っています。

●以前に「わいわい」会員でいらっしゃった樋口弘美さん（当時国分寺市在住）、前田淳子さん（三宅島在住）の現住所を知っていらっしゃる方はいらっしゃいませんか。もしご存じでしたらご一報ください。

●ベビーシッターを頼まれる側にも頼む側にも有用なガイドブックができました。クオレ育児研究所の神馬由貴子さんがまとめた「ベビーシッティングガイド」（KDDクリエティブ）です。お母さん一人で子育てを抱え込むのではなく、ときには手がわりを求めて自分自身の時間をつくるということがもっと行なわれてもいいのではないでしょうか。

●今回から西田淑子さんの女性問題風刺マンガ「平成おったまげーション」の連載をはじめることになりました。西田さんはテーマにに応じて何でも描くといっていますので、こんなテーマを取り上げてもらいたい——とお思ひの方はどうぞご要望をお寄せください。

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

わいふNO.235.

（隔月刊）

1992年5月1日発行

編集・わいふ編集部

定価460円（本体447円）

（年間購読料送料共4020円）

印刷・平河工業社

発行所・（株）グループわいふ

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

〒162 TEL (03) 3260-4771・4773

郵便振替 東京 5-110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……

必ずお申し出下さい。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひ葉書か電話を。

大月書店

東京都文京区本郷2 11 9
電話03(3813)4651(代表)

性の絵本

豊かな性、対等な性を21世紀の子どもたちへ

[全5冊]

山本直英(編集代表)／高柳美知子
安達優雅子編著 画 木原千春

「生きる」ことをベースに性について
正確にヒューマンに伝えます。
親子で読める画期的な絵本。

- ① 生きるってどういうこと
 - ② 子どもからあとなへ生きる
 - ③ 女と男 ともに生きる
 - ④ なぜ、こんなこととして生きているの?
 - ⑤ 生きていくから聞きたいこと
- 200×210mm・セット定価9900円



20万人に読みつがれた不滅の名著
待望の文庫化 [全4冊]

元始、女性は大陽であった

● 平塚らいてう自伝 国民文庫・9300円

女性解放の先駆者として、その運動に全生涯をさげ
た、らいてうの魂の記録。不滅の名著、待望の文庫化

漢方薬・指圧・薬膳・民間療法

30代からの漢方マニュアル

木下繁太郎著 症状別に解説。 A5判・1500円

福祉の専門家が複眼で見た福祉大国の現場

デンマーク スウェーデン で見た 在宅福祉

小川 政
木下 安
中川 輝
西澤 秀
根本 夫
本 博
渡辺 司
友子 益
ハンソン 雄
潤
ほか 著

定価2000円(税込) A5判・304頁

- 第一章 デンマーク・スウェーデンの福祉のしくみ
- 第二章 デンマーク・スウェーデンの在宅福祉
- 第三章 デンマーク・スウェーデンの施設
- 第四章 デンマーク・スウェーデンの視察記
- 第五章 座談会 経済大国から福祉大国へ
- 第六章 資料(翻訳)自治体の最新福祉施策

福祉現場の貴重な資料も翻訳紹介した視察報告書



北欧の福祉大国デンマーク・スウェーデンは、日本の福祉と何が違い、どこが優れているか。福祉の専門家たちが、在宅福祉を中心に複眼で見た、現場の生きいきとした姿を紹介しながら、経済大国日本が何を学び、今後の福祉にどう生かすかを語る。



発行 萌文社 ささら書房発売

〒102 東京都千代田区富士見 1-5-12 ☎ 03(3221)9008
ネモトビル1F FAX 03(3221)1038



株式会社 ミネルワ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡塚谷町1
☎(075)581-5191 振替京都 2-8076

- 目次**
- I 民間経営の老人ホーム
 - 1 有料老人ホーム(都道府県別)……92施設
 - 2 系列経営の有料老人ホーム
 - 3 厚生年金有料老人ホーム・生命保険年金ホーム・簡易保険加入者ホーム
 - II 公立・福祉の老人ホーム
 - 4 軽費老人ホーム
 - 5 養護老人ホーム
 - 6 特別養護老人ホーム
 - III 老人病院・在宅福祉サービス
 - 7 老人病院
 - 8 在宅福祉サービス



● 老後の自立のために、また自立生活が困難になったときのために、在宅福祉サービス・老人ホーム・老人病院の三つの情報を具体的に分かりやすく提供。

● 民間の有料老人ホーム92施設のデータをはじめ、老人ホーム・老人病院の全国リストのほか、在宅福祉サービスの一覧を掲載。

また、訪問記やインタビューなど生の声も満載。

これで安心！ 老後の暮らし 老人病院・ 老人ホーム・ 在宅介護 全ガイド

わいふ編集部編
A5判・美装カバー・550頁
定価2,500円

腎不全を生きて

松村満美子著 ● 腎臓病患者五人の軌跡 腎不全患者たちの悲痛な叫び——先進国の中で唯一生体腎に頼る日本の腎移植。トナーの絶対数の不足。様々な問題を力かえながら患者、医師、家族の闘いは続く！

一六〇〇円

● 目次

- フローク 腎不全との出会い／1 田と子の闘い、大島洋美の短かい人生／1 洋美との出会い／2 家族の不幸と洋美の発病／3 トラル続きの闘病生活／4 頑張って／洋美ちゃん／5 一三歳の人生を閉じる／II 黎明期を生きた人びと／1 満身創痍 中村勝男の闘争と死／2 生きていてよかった、田島熊男の十五年／3 若松孝子、日本初の移植腎で出産／4 透析患者たちの希望の星、田口又也院長／エピローグ 腎臓病——闘いの歴史と今

水かがみ

出会い——
老いの周辺

井久保伊登子著 市井の人々の暮らしぶり、生と死、さまざまな生きざまが医師の目から温かく描かれた感動のエッセイ。読売新聞好評連載！

一六〇〇円

● 目次

- I 点鬼簿
- II 風の中で
- III 花吹雪
- IV 輝いて

読むと心が洗われるという本とはこのような書か。彼女の心にある出会いの書である。この書を読むと誰もが彼女に会いたいと思う——日野原重明 聖路加看護大学長も絶賛！